

▲うたたある 　うたてくあるニテ轉キニ同ジ、分詞法ニ用キラル、俗ニ非常ナルノ意、多ク惡シキ方ニ云フ「源、手習」うたたあるまで世をうらみ侍るめれば、

▲うたまくら 　歌枕 　歌ヲ詠ムニ枕詞トスル名所ノ名、又、枕詞ノ意ニモ單ニ名所ノ意ニモ用キラル、「源、玉葛」萬のさうし歌枕よくあない知り見つくして、「徒然」今もよみあへる同じ詞歌枕も更に同じものにあらず、

▲うたて 　轉 　うたがた、うたたあるナドノうたト同語源、アルガ上ニモノ意ナリ、多クカヘスガヘス惡シナドノ意ニ用キ、又、薄情ナドノ意ニモ用キラル、「源、柏木」いとらたてゆゆしき御事なり、「徒然」人の心は猶うたてとほゆれ、

▲うたゑ 　歌繪 　和歌ノ意ヲ繪ニ書キテ助詞ナドヲ假字ニ書キ加ヘ假字ト繪トヲ併モテ歌トシテ見ルベキ繪ヲ云フ、「後撰、離別」みちの國へさかりける人は扇調じて歌繪にかかせ侍りける、又、一説ニハ歌ヲ書クベキ料ノ繪讀ヲスベキ爲ノ書ナリト云フ、

▲うそぶく 　嘘 　虚吹ノ義ニテ笛ヲ用キズ口ヲスホメテ聲ヲ出ダス俗ニ云フ口笛吹クヲ云フ、轉ジテ詩歌ヲ吟ズルヲ云フ、又、虎ナドノ烈シキ聲ヲ出ダスヲモ云フ、「神代紀、下」居濱而嘘之「源、竹川」紅梅の木の下に梅枝をうそぶきて、立よるけはひの

「著聞、二十」左右ともにはうそをふく、

▲うつろふ 　移ルノ延音言 　移ルニ同ジ、又物ノ變ル花ノ散ルヲ云フ、「萬、六」世の中を常なきものと今ぞ知る奈良の都のうつろふ見れば、「源、紅葉賀」哀にもかたがたうつろふ心地して涙ちぢべし、「萬、十七」春花のうつろふまでにあひ見ねば、

▲うつはもの 　器物 　空靈物ノ義、物ヲ納ルル料ニ内ヲ空ニシタル器ヲ云フ、靈箱ノハト同義ニシテ上古ハ愛スル物ヲ皆ハト云ヘリ、轉ジテアラユル器具ヲ云ヒ、又才幹アル人ヲ云フ、漢字ノ器量ノ義、「伊勢物」飯かいとりてけこのうつはものに盛りけるを見て、「源、帚木」はかばかしき世のかためとなるべきこともまことのうつはものとなるべきを取出ださむは難かるべし、

▲うつほ 　空 　内廣ノ轉語、うつろニ同ジ、中ノ物ナクシテ廣キヲ云フ、空虛ノ字ニ當タル、空穂ハ借字、「狹、下」鳥のこゑもさこをぬ木のうつほなどにて、

▲うつほはしら 　空柱 　中ノ空ニテ柱ノゴトクニ屋ノ隅ニ立テテ雨水ヲ流シ下スベク設ケタルモノ、雨樋ヲ堅ニシタルモノナリ、「夫木、三十三」しのぶわけて、うつほ柱に、かくるひは、漏るてふ水のくちやなからむ、

▲うづち 卯槌 古代ニ正月上卯日に絲所ヨリ桃ノ木ヲ以テ造リ種種ノ飾ヲ施シテ内裏ニ奉ルモノ、藥玉ノゴトク柱ナドニ懸ケラルル料ナリ、(卯杖ノ條參看)「杖、四尺五寸計なる卯槌二つを卯杖の様にかしらつみなどして山橋日蔭山菅などうつてしげに飾りて、江次第、二、三、絲所進、卯槌結、付書御帳、懸、角柱、副、立細木、爲、柱槌末出五尺許可、用、桃木、又、四方可、削近代丸也、失歟、

▲うつつたへに 打堪にノ義、偏にト同ジ、ヒタスラ、ヒトムキナド同意、「土佐、下」うつつたへに忘れなむとはあらず、

▲うつつ 現 顯美ノ義、夢、死等ノ隱ニ對シテ此ノ世ニ現在シテアルヲ云ヒ、又夢うつつト續用スルヨリ誤リテ幻ノコトトス、俗ニハうつし心ノ意ニシテ本心ノコトトセリ、「萬、五」うつつには、逢ふよしもなし射干玉の夜の夢にをづきてみえこと、「伊勢物」駿河なる宇津の山邊のうつつにも夢にも人に逢はぬなりけり、

▲うづき 卯月 陰曆四月ノ倭名、宇都木月ノ略語ト云フ、陰曆四月ハ卯ノ花ノ盛ニ咲ク時ナレバ然云フト云ヘリ、「萬、十九」このくれやみうづきしたてばよごもりになく郭公、

▲うつしうま 移馬 移鞍ヲ置キタル馬、又、單ニ乗替ノ馬ノ意トスルモアリ、「源、東屋」うつし馬ども引出だして、宿居に候ふ人十餘人計して參り給ふ、

▲うつしごころ 現心 現在ノ心ニテ本心ト云フ意、「狹、二」今はうつし心もなきこちちして、

▲うづる 卯杖 古代ニ正月上卯日に兵衛府ヨリ種種ノ木ヲ以テ五尺三寸ノ杖ヲ作り二束三束ニ結ヒテ天皇中宮東宮ニ奉進シテ精魅ヲ逐フトセルモノ、又、御杖ト云フ、漢ノ王莽ノ剛卯刀ノ故事ニ因ル、「兵衛式」凡正月上卯督以下兵衛已上各執御杖一束、次第參入、立定佐一人進奏、其詞曰左右兵衛府申正月上卯日能御杖仕奉進、(長久申給登久申、)

▲うつせがひ 虚貝 海濱ニアル肉ノ脱出シタルアトノ貝殻ヲ云フ、「續拾、雜」數ならぬみくづにまじるうつせ貝拾ふにつけて、袖ぞしをる、

▲うつせみ 空蟬 蟬ノ蛻ヲ云フ、轉ジテ單ニ蟬ヲ云フ、「源、葵」御室禮より始めて、ありしかはることもなければ空蟬の空しきこちちぞし給ふ、「拾愚、中」かはりゆく補の色こそ悲しけれ、音を鳴きはてよ秋の空蟬、

▲うつせみの 顯身ノ轉語、空蟬ハ借字、世ニ生キテアル身ヲ、死ニタル身ノ穢キニ對シテ、美シト美ムルヨリ起コリテ、世ノ枕詞トス、「萬、三」空蟬の世は常なしと知るものを、秋風寒くしぬびつるかも、

▲うなる 髻髮 頂居ノ義、古代ニ男女ノ童ナルガ髮ヲ頂ニ垂レタルヨリ、汎ク童男女ノ稱トス、實ハうなるト云フベキナリ、「空穗、藤原君」うなる下仕など形心ある中にまざりたるをえらびさぶらはせ給ふ、「土佐、上」よんべのうなるもがな、

▲うらぼん 孟蘭盆 梵語 Diabana 救倒懸ノ義、陰曆七月十五日父母乃至七世ノ父母ノ爲ニ百味ノ飲食五果等ヲ供ヘ、彼ノ倒懸ノ苦ヲ救ヒ、慈愛ノ恩ニ報ユトスル佛事、banaノ原語ニ盆ノ字ヲ充テタルハ、元來音譯ナルヲ此ノ祭ニ多クノ食物ヲ盆ニ盛ルヨリ對譯ノゴトクナレルナリ、「名義集、四」孟蘭西域之語轉、此翻ニ倒懸ニ盆此方貯食之器、三藏云、盆羅ニ百味以貢ニ尊ニ仰ニ大衆之恩光ニ救ニ倒懸之窘急ニ義當ニ救倒懸器ニ孟蘭言訛正云ニ烏藍婆摩此云ニ救倒懸、

▲うらなし 心無ノ義、心ノ裏表モナク打解ケテアリノ意、「源、帚木」例のうらなしものから、「徒然」うらなくいひ慰まむことを嬉しかるべきに、

▲うららかに 麗ラ氣にノ轉語、麗ハしき様にノ意、空ナドノ長閑ニ打晴レタル貌、俗ノ奇麗ナド云フニモ用キル、「源、胡蝶」鶯のうららかなる音に、「濱松、四」隔てなうららかに打とけ給へれど、

▲うらやすのくに 浦安國 心安ノ國ノ義、穩カニ心樂シキノ意、日本國ノ美稱、伊弉諾尊ノ名ツケ給ヘルニ起コルト云フ、「神武紀」昔伊弉諾尊曰、此國ニ曰、日本者浦安國、
▲うまい 熟睡 熟寐ノ義、十分ニ寐入ルヲ云フ、いハ睡ル意、「萬、十三」人の寐るうまいは寐ずに、

▲うまのはなむけ 餞 はなむけノ條ヲ見ヨ、「土佐、上」舟路なれどうまのはなむけす、

▲うまや 驛 馬ヲ畜ヒ置ク家ノ意ヨリ轉ジテハ道中宿繼ノ人馬ヲ備ヘ置ク所ヲ云フ、「大鏡、二」あかしのうまやといふ所に御やどりせしめ給ひて、後世ノ宿場、

▲うまご 孫 蕃息子ノ轉語、子子孫孫ヲ泛ク呼ブ稱ナル子ノ生ヌル子ノ意トセルニテ、實ノ子ノミヲ云フ稱ニアラズ、後ニ急呼シテまごトノミ云フ、「中古ノ書ニむまごト書ケルハ梅、馬ナドノ類ニテ俗呼ニ從ヘルナリ、正シクハうまごト書クベシ、「空

穂、俊隆「三代のひまご」源、未摘「娘にやうまごにやはしたなる大きき女の、
▲うげんべり 暈網縁 暈ノ縁ニシタル暈網ノ織物ヲ云フ、暈網ハ錦ノ名ニテ白地
ニ色色ノ絲ヲ以テ花ナド織リタルモノニテ其廻リニ同シ色エテ濃キ色ト中色ト薄色ト
ヲ重ネテ三重ニ縁ヲ取リテ織リタルガ日月ノ廻リノ暈ノゴトクナレバ暈網錦ト云フ、
字又縷網ニ作ル此ノ暈ハ臣下ハ用キヌ例ナリ、「枕、八」昔覺えてふようなる物、うげん
べりの暈のふりてふし出てきたる、

▲うけふ 祈誓 請言ノ略語、神ノ言ヲ請ケ言ヒテ其ノ驗ヲ試ミルヲ云フ、轉ジテ咀
フ意ニ云フ、「古事、上」各宇氣比而、生子、「古事、上」如木花之榮、榮座、宇氣比豆貫進、
▲うぶやしなひ 産養 古代ニ生兒アレバ、三日、五日、七日ナド百日ニ至ルマデ、
其ノ家ノ一族ノ者ヨリ生兒ヲ祝ヒテ盛宴ヲ張ルヲ云フ、「榮華、様様」三日の夜は大宮
五日の夜は攝政殿より七日の夜は皇后の宮よりと様様いみじさちほんうぶやしなひな
り、

▲うぶ 右府 右大臣ノ唐名、
▲うぶすな 産土 人ノ生レタル所ノ土地ヲ云ヒ、轉ジテうぶすなの神ノ略稱トス、

「推古紀」葛城縣者、大臣之本居也、俗ニ氏神ノコトト思ヘルハ誤ナリ、
▲うきたから 浮寶 舟ノ古名、
▲うしろやすし 後安 後ノ事心安ク思ハル、氣遣ナシナドノ意、うしろめたしノ
反ナリ、「源、玉葛」我に似たるはしもうしろやすしかしと親めきて宣ふ、

▲うしろめたなし 後見甚甚シノ義、氣遣ハルルコト殊ニ甚シノ意、うしろめたしヨ
リハ意強シ、「堀太」降りかかる雫に花やくたすらむ、うしろめたなき夜半の雨かな、
▲うしろめたし 後見甚シノ義、氣遣ハルルコト甚シノ意前條ノ語ヨリ意稍弱シ、
「源、夕霧」簀子の程もなければ奥に入やあらむとうしろめたたくて、

▲うしおふもの 牛追物 牛追物射ノ畧稱ニテ犬追物ノ起ヨル以前ニ馬乘ニテ引
目、四目、鎧頭矢ナドニテ小牛ヲ射タルヲ云フ、「吾妻鏡」二二壽永元年六月七日、丙午
武衛令出由井浦給、壯士等各施弓馬之藝、先有牛追物等、

▲うしみつ 丑三 古代ノ時計 漏刻(其ノ條參看)ノ分度ノ名ニテ、即今ノ午前二
時三十分ニ當タル、「大和」時申す音のしければ、聞くにうしみつと申しけるを聞きて、
▲うひらひし 初初 物ノ若ク初メラシキヲ云フ、俗にうひらひしト云フニ同ジ、

「源、常夏」かくてもものし給ふはつまなくうひらひしくおとやある、

【911】七二

ぬ

▲ぬだてん 章駄天 章駄ハ梵語ツエーダ Veda 靈威ト譯ス、章天將軍ト云フ、南方三十二將ノ首神ニテ佛法守護ノ神ノ名、「大乘法數」章天將軍章梵語具云「章駄ニ魔王ノ佛舍利ヲ奪ヒテ逃ケタルヲ追ヒテ取リタリト云フヨリ俗ニ足速キ神トス、ぬだてん走リナド、

▲ぬなか 田舎 田居中ノ上略語、田ニ用キル水ヲ湛ヘ置ク所ノ意、都ヨリ離レタル地ノ稱トナレリ、「萬、二」昔こそ難波居中といはれけめ今は都とみやこびにけり、

▲ぬんふたぎ 韻塞 古代ニ文學上ノ遊戯ニテ、左右ノ座ヲ分ケテ古詩ノ韻字ノミヲ去リテ題ニ出ダセバ、人人推量シテ其ノ韻字ヲ早ク附ケテ出ダヌヲ、元ノ韻ヲ顯ハシ引合ハセテ相合ヘルヲ勝トスルモノ、「枕、九」志たりがほなる物ぬんふたぎの時速くしたる、

▲ぬんし 院司 上皇ノ院ノ司ヲ云フ、其ノ職員ニハ、別當、執事、年預、判官代、殿

上人、藏人、非藏人、主典代、廳官、召次所、仕所、別納所、御服所、御厨司所、進物所、文殿、所衆、武者所、御隨身所、將曹、府生、番長、近衛、御廩等アリ、「源、落標」太上天皇になづらひて御封給はりぬんしどもなりて、

▲ぬんぜん 院宣 院ノ宣旨ノ意ニテ上皇ノ敕書ヲ申ス、「平家、五」院宣うかがふに、一日の逗留どあらむずらむ、

▲ぬのこ 亥子 陰曆ニテ十月亥ノ日亥ノ刻ニ貴賤餅ヲ食フ式日ノ稱ニテ、以テ病ヲ除クト云フニ因ル、又、玄猪ト云フ、公家武家ノ節日トナレリキ、「源、葵」そのよるりのこもちひまるらせたり、

▲ぬのししむしや 猪武者 智謀ナク只管敵陣ヘノミ進ム標棒ナル武者ヲ云フ、「保元、中」片側破の猪武者なるが、「漢書」ニモ猪突、豨勇ナドアリ、猪ハ進メバ退カヌト云フヨリ出ツ、

▲ぬやなし 禮無シノ義、無禮ナリト云フニ同ジ、

▲ぬやるやし うやうやしニ同ジ、古語ナリ、「源、旗柱」あなかしことぬやるやしにかきなし給へり、

【911】七三

▲あまのつき 居待月 陰曆十八日月ヲ云フ、あくニ掛クル枕詞、後ニハ只十八日ノ月ノ意ニ用キラル、**「萬、三」**あまのつき月あかしのとゆは夕されば、**「平家、七」**卯月中の八日のことなれば、やうやう日くれるまの月の差して、

の

▲のろふ 呪咀 禱リ言フノ轉語、神佛ニ禱リテ怨敵ニ禍ヲ被ラシムルヲ云フ、**「宇治拾、三」**君をのろひまゐらせ候ふなり、

▲のどかに 長閑 和氣にノ轉語、静ニユルエルトシテのどやかに同ジ、又、轉ジテ空ノ静ニ晴レタルサマニモ云フ、**「源、帚木」**あらためたのどかに思ひならば、**「源、常夏」**風はいとよく吹けども日のどかに、

▲のづかさ 野處頭ノ義、野ノ高クナレル所ヲ云フ、積重ナレルヨリ云フトノ説ハ誤ナリ、市のつかさ**「岸のつかさ」**ナドノつかさモ同意、**「萬、十七」**足引の山谷越えて野づかさ、今は鳴くらむ鶯の聲、

▲のなかのしみづ 野中の清水 元ハ播磨國印南野ニアリケル水ハ清水ニテ興アリ

シヲ、末ニハヨカラヌ水トナリ人モ顧ミヌヤウニナリシガ昔ヲ忍ブ人ハ尋ネ來テ賞讃セルコトヨリ本ヲ知ルコトニ言ヒ傳へ、歌ナドノ序詞トスルニ至レリ、**「古、雜」**古の野中の清水ぬるけれど元の心を知る人ぞ知る、

▲のう 能 又、能樂ト云フ、散樂ノ餘流ニテ、更ニ一派ヲナセル技藝ニテ、應永年中觀世世阿彌ノ創メシモノ、謠曲ニ合ハセテ演ズ、其ノ樂器ハ笛、大鼓、大鼓、鼓ナリ、流派ニ觀世、寶生、金春、金剛アリ、後ニ喜多アリ、今モ盛ニ行ハル、

▲ののしる 詰ト同語源ノ語、聲高ニ言ヒ騒ク、喧シク言ヒタツル意、ののめくニ同ジ、轉ジテ怒リ言フ意、**「源、夕顔」**御祈かたがたにひまなくののしる、**「徒然」**勢まうにののしりたつるにつけていみじとは見えす、

▲のくれやまくれ 野七里山七里 野ニ暮レ山ニ暮レテ長途ノ旅スルヲ云フ語、**「夫木、三十六」**東路や旅の空こそあはれなれ野くれ山くれ、駒にまかせて、

▲のぶし 野伏 山伏ニ同ジ、山野ニ伏シテ修行スルヲ云フ、**「歷代編年集成」**承和五年令レ行御佛名ニ而僧一口不足之處一人僧臥ニ内野之上ニ暫時召ニ此僧畢號ニ野伏也、又、主將ナキ兵士ヲ云フ、野武士、

▲のさき 荷前ノ轉語、荷トハ貢物ノ意、前トハ初穂ノ意ナリ、毎年十二月十陵四墓(後ニ八墓)ニ奉ラルル貢物ノ初穂ヲ云フ其ノ事ニ發向スル使ヲのさきのつかひト云フ、「萬、二」東人ののさきの箱の荷の緒にも妹が心にのりにけるかな、「續後紀、九」歳竟分、綵號曰「荷前」。

▲のさきのつかひ 荷前使 古代ニ毎年十二月十陵四墓へ其ノ年ノ貢物ノ絹ノ一部ヲ以テ幣帛トシテ奉ラセラルル使ヲ云フ、所司ノ定ハ十三日奉幣ハ吉日ヲ擇バルト云フ、「徒然」荷前の使たつなどそあはれにやむごとなき。

▲のきは 軒端 軒場ノ義、軒ト云フニ同シ、山ヲ山端ト云フガゴトシ、端ハ借字ナリ、「風雅、春」ながめやる山はかすみ夕暮の軒ばの空にそそぐ春雨。

▲のもりかがみ 野守鏡 野中ノ水ニ影ノ映ルヲ云フ、「新古、戀五」はし鷹の野守の鏡得てしがな、思ひ思はずよそながら見む。

▲のもせに 野も狭にノ義、野モ狭キ程ニノ意、野もせを「野もせの」ナド云フハ誤ナリ、道もせに、庭もせにナド皆同シ、「萬代、秋上」白露もうつるひにけり、高圓の野もせに咲ける秋萩の花。

お

▲おいかけ 綏、老懸 武官ノ冠ノ兩耳ノ上ニ當タル所ニ着クル飾、毛ニテ作り菊ノ花形ヲ半截シタルガゴトキモノ、元ハ老人ノ髻ノ落チタルガ爲ニ冠ノ綏ニテ冠ヲ止メシニ起コル又ほほすけト云フ、「宇治拾、十」冠のおいかけなどあるべき定にしければ、▲おいらかに 老ら氣にノ轉語、俗ニ大人シクナドノ意、「空穂、初秋」右大將のおとどおいらかに立走りあそびすに、

▲おいらく 老ゆるノ延音言ナルもゆらくヲ轉轉誤寫シテ出來タル語ナレバあゆらくヲ正シトスベシ、「萬、十二」天なるや月日のごとくわがもへる君が日かげにあゆらくをしも、

▲おはさうす おはしますノしまヲ約メテラヲ挿メル音便言ナレバおはしますニ同シ、「源、檣柱」打ひそみて泣きおはさうす、

▲おはしま 檣 欄干ニ同シ、「倭名、十」軒檣、漢書注云軒檣上板也(檣音監於波之萬)殿上欄也、

▲おほし強きふ おはしますノ延音言、意モ同シ、「空穂、國讓」生れ給へるみこどうつくしみおはしますふ、

▲おはします 大坐坐ノ約音言ニテおはすヲ一層強キ敬語トセルナリ、「源、桐壺」何事もおほしめしわかれずこもりおはします、

▲おほひどの 大臣殿ノ意、「源、桐壺」おほひどのの君いとどかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、

▲おほいまうちぎみ おほさまへつぎみノ音便言、(まうちぎみノ條參看) 大臣ノ古語、「拾遺、戀」清慎公おほいまうちぎみにつかはしける、

▲おほろげ おほらかト同ジ、俗ニ「タイシテ」極メテ大イニノ意、おほろげならぬノ略語ト云ヘル舊説ハ誤ナリ、清音ニ讀ムベシ、「土佐」二十一日おほろげの願によりてにやあらむ、「枕、四」上達部まかて参り給ゆるおほろげにいそぐことなきは必参り給ふ、

▲おほろげに 臆氣にノ義ニテ、不明分ニ、ハキトセメナドノ意、「萬代、戀」五月雨のたそがれ時の月影のおほろげにやは、我人を待つ、「空穂、菊宴」ひまを伺ひておほろげならずまこえて御覽せさせつ、

▲おほほる 溺 おほるノ古語其ノ意同ジ、「後、離別」さらばよと分かれし時にいはませば我も涙におほほれなまし、

▲おほどこかに 大足氣にノ義、寛ニ穩ナル貌、俗ニユ、タリトシテ、大ヤウニ「ナド云フ意、「空穂、樓上」靜に稚兒の御ありさまともなくおほどこかなり、

▲おほとのごもる 大殿籠ノ義天皇ノ御寝ナルヲ云フ敬語、「源、桐壺」ある時はおほとのごもりすぐして、

▲おほよそごもる 大装衣ノ義ニテ、祭服ノ上衣、後ノ袍ノゴトシ、「神樂、宮人」宮人のおほよそごもるも膝とほしきのよろしもよ、おほよそごもるも、

▲おほつかなし 大虚氣甚ノ義ニテ、不分明ニハキトセメノ意、又、思ヒヤリテモ儘ニ分別ノ出来ヌヲ云フ、「萬、十」春されば、木のこのくれの夕月夜おほろつかなしも山陰にして、「枕、三」おほろつかなき物、十二年の山ごもりの法師の女親、

▲おほん 大御ノ撥音便ニテ敬稱ニ用キル接頭語、「源、紅葉賀」佛のおほん迦陵嚩伽の聲ならむとまこゆ、

▲おほんべ 大嘗會ニ同ジ、(其ノ條參看)「古、大歌所」この歌は承和のおほんべのさ

びの國の歌。

【セ】一八〇

▲おほうち 大内 大内裏ヲ訓讀ニシテ略シタル語、禁中ニ同シ、「千載、賀」二條院大内にもはしまして、

▲おほうちやま 大内山 大内ヲ敬シテ山ニ比シテ云フ語、大内ト意同シ、「源、末摘」もろともに大うち山はいてつれど、

▲おほくち 大口 大口袴ノ略語、束帶ノ時、表袴ノ下ニ穿クモノ、生絹平絹ナドニテ作ル又別ニ精好ニテ作り口ノ大キクアクヤウニ作レル大口アリ、「枕、七」大口ながさよりは口ひろければ袴いとあぢきなし、

▲おほやけ 大家處ノ轉語、臣民ノ家處ニ對スル稱ニテ朝廷ヲ云フ、轉ジテ天皇ヲ申ス更ニ轉ジテ一家ノ私ナラヌ公然ノ意トナル、「源、桐壺」おほやけのかためとなりて、天下を助くる方にて見れば、「神皇正統」おほやけの世を「つにしらせ給ふことは、「源、薄雲」おほやけわたくし物さわがしきほどすとして、

▲おほやけはら 公憤 公共ノ爲ニ怒ルヲ云フ、「一己人ノ怒ニ對スル語」〔榮、浦浦別〕げにさもありぬべき御ありさまのためしを思ふぞげに、おほやけはらたたれける、

部 の 語 國

解詳語要文漢語國

▲おほやしま 大八洲 大日本國ノ異名、八箇ノ島ヨリ成レルニ因リテ云フ、「神代紀、上」廼生ニ大日本豊秋津洲、次生ニ伊豫二名洲、次生ニ筑紫洲、次雙生億岐洲與佐度洲、次生ニ越洲、次生ニ大洲、次生ニ吉備子洲、由是始起大八洲國之號焉、

▲おほけなし 負氣無シノ轉語其ノ意同シ、身分ニ過ギテ堪ヘラレズノ意、過分ナドノ意、「源、葵」心のおほけなきをさこしめし、

▲おほえ 覺 思ハレノ古語、人ニ愛シ思ハルヲ云フ、「源、桐壺」いとまばゆき人の御おほえなり、「徒然」おほえ劣りけおされて枝にしほみつきたる心うし、

▲おほみやびと 大宮人 禁中ニ奉仕スル人人ヲ云フ、「萬、五」百敷の大宮人は暇あれや梅をかざしてここにつどへる、

▲おどろおどろし 驚驚シノ義ニテ俗ニ仰山ナリト云フニ同シ、「源、寄生」御衣どもをいとど句はしそへ給へるは餘りおどろおどろしきまであるに、

▲おとにきく 音ニ聞クニテ、人ノ話ノミニ聞き居タル意、畢竟有名ト云ハムガゴトシ、「源、幻」猶音にきかして思ひやる事のかたはなるよりも、

▲おとど 大殿ノ略轉語、貴人ノ邸宅ノ尊稱、「源、野分」おとどこの瓦さへ残るまじ

【セ】一八一

く吹き散らすに、「又、おほきあとの略語、大臣ニ同ジ、「狭、一」おとどのあんさいはひにてこそおはせめ、

▲おとづる 訪 音連ノ義、人ノ許ヲ訪フ意、又、おとづりトモ云フ、「源、夕顔」右近だにちとづれねば、「宇治拾、二」おとづり奉らむと思ひて、又、安否ヲ訪フ意、

▲おとひ 弟生ノ義、兄弟ノ中ニテ後ニ生レタル者ヲ云フ、即弟ノ意、女弟ヲモ云フ、又おとどとひト云フハおとどとひノ訛言ナリ、「顯宗紀」倭者彼彼茅原淺茅原弟日僕是也、

▲おとなし 大人シノ義、成人ジミタル意、又落チツキテ氣質ノ穩ナルヲ云フ、「源、落標」十一になり給へど程より大きにおとなしうさよらにて、「宇治拾、一」おとなしき郎等すすみ来て、

▲おとうと 弟人ノ音便言古クハ兄ヨリ弟ヲ云ヒ、姉ヨリ妹ヲ云フ語、今ハ兄弟ノ弟ノミニ云フ、「狭、一」只今のおほきあとのとさこえさする御娘一條院の後の宮の御あつと東宮の御をばに、

▲おとや 乙矢 一手二本ノ矢ノ次ニ射ル矢ノ名、(甲矢ノ條參看)「著聞、九」は

やを射るに(中略)おとやにて又こしの串を射てけり、

▲おりのみかど 下居帝 帝位ヲ下リテ居タマフ帝ヲ云フ、太上天皇ナリ、「榮、花山」いみじけれどもおりの御門の御事はただ人のやうにこそありけれ、

▲およすぐ 夙慧 兒童ノ智慧ヅキテ歳ヨリマセテ見ユルヲ云フ、「源、浮舟」若君のいとうつくしうおよすげ給ふまゝに、

▲おちなし 奥無シノ音便言、淺慮ナルヲ云フ、「源、東屋」あやしくおちなく人の思はむ所も知らぬ人にていひちらしたり、

▲おのがしじ 各ガ爲爲ノ義ニテ各ガサマザマト云フニ同ジ、シジト下ノシヲ濁音ニ讀ムベキヲ上ノシヲ濁ルハ誤ナリ、「貫之」置く霜の心や分くる菊の花うつろふ色のあのかしじなる、

▲おくつき 奥津城 奥築處ノ義、死シタル人ヲ埋ムル高キ處ヲ云フ、墓ト云フニ同ジ、「萬、九」うなびをとめのおくつきを吾がたち見れば、又、おくつきどころトモ云フ、

▲おふなおふな 随分 身分相應にノ意、「源、桐壺」御心につくべき御遊をしおふ

なまふなまほしうたづく、

▲おぎのる 賒 其ノ物ノ價ノ錢ヲ拂ハズシテ借リテ買フヲ云フ、俗ニかけがひと云フ、「土佐、上」そらごととしておぎのりわざとして、

▲おめ 怖めノ義、物事ニ怖レタル色ヲ見スルヲ云フ、「平治、中」弓矢取る身の何條さるちめたる事やある、

▲おめおめ 怖め怖めノ義ニテ、怖レ怖レナガラ耻ヲ知ラズニノ意、俗ニのめのめト云フ阿容ノ字ヲ充ツ、「盛衰、十八」烏帽子も取らず髻放ちおめおめと這ひ起きて、

▲おしてるや 打照や 難波ノ枕詞、「萬、廿」おしてるや難波の津より、

▲おもはゆし 面映シノ義、マバユキヲ云フ、「盛衰、六」子ながらすがにあの顔に物の具して相向はむ事おもはゆくやおもはれけむ、

▲おもひいで 思出 アリシ事ヲ後ニ思ヒ出ダシテ、自カラ慰ムルヲ云フ、又、心ノトドクヲ云フ、「古、春」ちりぬとも香をだにのこせ梅の花戀しき時のおもひ出にせむ、

▲おもひなる 決心スルヲ云フ、「源、空蟬」ながらまじくこそおもひなりぬれ、

▲おもひぐまなし 無思限 思ヒ遣リ周到ナラヌヲ云フ、心ニトメヌ意、「源、總角」殊更にもいとほしき身をと聞き給へどもおもひぐまなく宣はむもうたてければ、

- ▲くどく 功德 梵語迦提ノ對譯字、善業ヲナシテ他ニ福利スル徳ヲ云フ、功カト同シ、「源、薄雲」功德のかたとてすすむるによりていかめしうめづらしうし給ふ、
- ▲くちさきら 吻 口先ノ義、らハ接尾語、辯舌ノヨキヲ云フ、「後三年合戦記」多くの兵ちのちの口さきらをとぎて答へむとす、
- ▲くちきがた 朽木形 冬ノ几帳ノ帷ニ附タル模様ノ名、木ノ朽チテ心ノミ殘レルゴトキ紋ナリ、「禁秘抄」四面有ニ几帳帷、夏生衣以ニ胡粉ニ畫葦鶴ニ冬朽木方、
- ▲くるめく 廻轉ノ意、又、目ノ廻ルゴトキ心地スルヲ云フ、俗ノ目ガマハルニ同シ、「著聞、二十」あらあつやあつやとおめさうりくるめく事夥し、「十訓、四」ゆゆしきあやまちしたりとおそれくるめくことさめぬれば、
- ▲くわばう 果報 吾ガ爲シタル因果ノ應報ノ意ニテ、多ク善キコトニ用キル、「榮、衣珠」すべてさるべき昔の世の果報にこそなどもひ給へれば、

▲くわらりやう 荒涼 心ノスサマシキ意ヲ云フ、「盛衰、十」文覺ほくそゑみて、ろの荒涼にては、一定、天下のあるじとなり給ひなむ、

▲くわんぢやう 灌頂 佛道ニテ初メテ受戒ノ時若クハ修道上昇ノ時ニ香水ヲ頂上ニ灌グ式ヲ云フ 摩頂灌頂授記灌頂放光灌頂等アリ、流灌頂ハ水邊ニ卒塔婆ヲ立テ白布ヲ張り櫛ヲ立テタルモノ之ニ水ヲ灌ギテ功德トス、多クハ難産ノ死靈ノ爲ニス、

▲くわんねん 觀念 佛經ノ語、觀シテ念ズルヲ云フ、俗ニハ思ヒ切ルヲ云フ、「天臺止觀」寂而常照名觀、念者但念ニ涅槃寂滅ニ不念ニ餘事、「萬代、釋教」觀念の心もすめば山風も常樂我淨とこそきこゆれ、「方丈記」谷しげけれど西は晴れたり觀念の便なきにしもあらず、

▲くわんおん 觀音 觀世音ノ略語、(其ノ條ヲ見ヨ)

▲くわんぶつ 灌佛 陰曆四月八日釋迦誕生日ニ其ノ像ヲ盤中ニ安置シテ香水ヲ灌ギ祭ル佛事、浴佛、又、佛生會トモ云フ、「浴佛功德經」我今爲汝說ニ俗像法ニ諸供養中最爲殊勝ニ爲衆香湯ニ至淨器中ニ先作ニ方壇ニ敷ニ妙牀座ニ於ニ上置佛以ニ諸香湯ニ次第浴ニ之用ニ香水ニ畢復以ニ淨水淋ニ洗其像、人各取ニ少許洗像水ニ置ニ自頭上ニ初於ニ像上淋水時ニ

應ノ誦ニ此偈云、我今灌水諸如來淨智功德莊嚴聚五濁衆生令離垢願證如來淨法身、「源、藤裏葉」くわんぶつ拜みてまゐりて、

▲くわんぢやう 冠者 元服シテ冠着タル少年ヲ云フ、又くわんぢや、くわじやトモ云フ、又、六位ニテ無官ノ人ヲ云フ、「源、桐壺」くわじの御座、「岷江入楚」六位無官の人を冠者といふ、

▲くわんぎてん 歡喜天 大聖天、又、聖天トモ云フ、梵語毗那羅毘伽ノ譯語、九千八百ノ大鬼王ノ頭首ニシテ福祿護法ノ神ノ名、

▲くわんじん 勸進 天皇ノ御位ニ即カセ給フヤウニト群臣ノ勸メ參ラスルヲ云フ、又、堂舎佛像ナドヲ建立修復セムガ爲ニ僧徒ノ普ク信者ヲ勸誘シテ其ノ錢ヲ奉納セシムルヲモ云フ、又、勸化ト云フ、「百鍊」賀茂社御塔供養也、夢有ニ上人ニ勸進之已終ニ其功、

▲くわんじやう 還昇 殿上人ノ地下ニ降リテ再殿上スルヲ云フ、「千載、雜」還昇して侍りける人のもとにつかはし侍りける、

▲くわんじやう 勸請 神佛ノ分靈ヲ一場ニ請ジテ久住ヲ願フヲ云フ、「大乘法數」

勸請有^二一者謂十方世界有佛將入涅槃者勸請住世利濟衆生、二者謂十方世界有佛初成正覺者勸請轉法輪度諸衆生、雖不面見諸佛而虔心勸請以達歸敬之誠、^三徒然^一比叡山に大師勸請の起請といふ事は、

▲くわんじゆ 卷數 經卷呪文ヲ讀誦シタル名目ヲ一紙ニ合記シタルモノヲ云フ、

〔拾遺、賀〕天曆の帝四十になりおはしましける時山階寺に金泥壽命經四十八卷を書き供養し奉る御卷數、鶴にくはせて洲濱に立てたりけり、

▲くわんじゆ 貫首 名簿中ノ筆頭ノ意、專、比叡山座主ノ稱トス、又貫主トモ書ク〔平家、二〕昔こそ三千の衆徒の貫首たりしが今はかかる流人の身となりて、

▲くわんぜおん 觀世音 菩薩ノ名、梵語ニ婆婁吉低輸ト云フ、慈悲ヲ以テ衆生ヲ利ス化物利生ノ方便ニハ七觀音ノ名目アリ、〔名義集〕阿那婆婁吉低輸、此云觀世音、能所

圓融有無兼暢照窮正性、察其本末、故稱觀也、世音是所觀之境也、萬象流動隔別不同、類音殊唱俱蒙離苦、菩薩弘慈一時普救者令解脱、故曰觀世音、〔新六、五〕くるくると人だのめなるずすのとは永き世救ふくわんぜおんなり、

▲くわらるせん 黃櫨染 天皇着御ノ御袍ノ染色ノ名、綾一疋ヲ染ムルニ櫨十四斤

蘇芳十一斤、酢二升、灰三石薪八荷ヲ要シ御紋ハ桐竹鳳凰麒麟ナリ、〔禁秘抄〕御裝束事尋常黃櫨染文竹風

▲くわこちやう 過去帳 寺院ニテ死者ノ法名ヲ記載セル帳簿、鬼簿トモ書ク、〔平

家、一〕後白河法皇の長講堂の過去帳に、

▲くわさ 過差 過分ノ驕奢ヲ云フ、〔大鏡、二〕延喜の世間の作法認めさせ給ひしかど過差をばえしづめさせ給はざりし、

▲くたびる 草臥 朽滅ノ轉語、身體ノ激動ニテ疲レ弱ルヲ云フ、〔撰集抄、七〕かくいへどささいれ給はねば、そのこともくたびれ給ひもどするとしてつひにかへりにけり、

▲くれはとり 吳服 吳機織ノ約語上古吳國ヨリ傳來セル綾織女工ヲ云ヒ、後ニ絹帛ヲ織ル工人ノ總稱トナリ、又其ノ式ニテ織リタル綾ヲ云フ、又、綾ノ枕詞、〔後撰、戀〕くれはとりといふ綾を二匹包みてつかはしける、くれはとりあやに戀しくありしかばふた村山もこえずなりにき、

▲くれなる 紅 吳ノ着色具ノ義ニテ、吳國ヨリ渡レル染料ノ意、其ノ多ク渡セル染料ノ中ニ紅色殊ニ美シキヨリ紅花ノ名トナレルナリ、藍ノ義ニアラズ、〔續古、戀〕

さけばつむ物と思ひしくれなるは涙のみする色にぞありける。

▲どそく 具足 具ハリ足ル意ニテ、元ハ什器ヲ云フ語、轉ジテ鎧ヲ云ヒ後ニ其ノ略製ノモノノ名トナル、「徒然」なにとなき具足取認め、「盛衰、二十」只一具持ちたりし装束は水にしてぬらしぬとりかふべき具足もなし、

▲くつろぐ 寛 ユルヤカニナルヲ云ヒ、又、身ヲユルヤカニスルヲ云フ。「源、若菜」上臈もみだれて冠の額すこしくつろぎたる大將の君も、「枕、二」もとむたりつる人も少し打みじろぎくつろぎて高座のもと近き柱のもとなどにすゑたれば、

▲くつほる 壞ルノ義、心ノ屈スルヲ云フ、「源、桐壺」くちをしうちもひくつほるに、▲くねる 曲ルノ義、俗ニスネルト同ジ、又くねくねしト云フハ心ノ佞ケタルヲ云フ、「古今、序」女郎花の一時をくねるにも歌をいひてぞなきさみける、「源、紅葉賀」まつくねくねしう恨むる人の心やぶらむと思ひて、

▲くらべうま 競馬 古代ニ陰曆五月五日、互ニ騎馬ニテ其ノ遲速ヲ競ベテ勝負ヲ定ムル行事ヲ云フ、「夫、二十七」只しばし、おくれさきだつくらべ馬はしりけならぬ世にはあらずや、

▲どんじ 郡司 上代、郡ヲ治ムル司ノ名、其ノ四等官ニ大領、小領、主政、主帳アリ、又、其ノ大領ヲモ云フ、「續紀、一」文武二年三月庚午任諸國郡司

▲くごつのことり 傀儡ノ部領ノ略語、遊女ノ頭ダツモノヲ云フ、「枕、四」とりもてるもの、くごつのことり、

▲くび 公家 おほやけノ義ニテ朝廷ノ意、又公家衆ノ略語ニモ云フ、「榮、浦浦」是ただ事にはあらで公家をいかにし奉らむとする事をかまへたるぞ、

▲くびしゆう 公家衆 朝廷ニ仕フル人ヲ云フ、武家起コリテヨリノ稱ナリ、略シテ公家トノミモ云フ、又、堂上家、

▲くさどき 種種 色色、様様ナドニ同ジ、「源、繪合」くさどきの御たき物ども、▲くさばひ 物事ノタネトナルモノヲ云フ、「源、常夏」さやうならむ物のくさはひ見

出でまほしけれど、▲くさまくら 草枕 古代ノ旅行ニ野山ノ草ノ上ニ臥スト云フ意ヨリシテ旅ノ枕

詞、轉ジテ旅ノ意ニ用キラル、「古今、離別」あさなげに見べき君としたのまねば思ひたちぬる草枕なり、

▲くさぶし 草臥 鹿ノ野山ニ臥スコトヲ云フ、「千載、秋」いかばかり露けかるらむ
さをしかの妻戀ひかぬる小野のくさぶし、

▲くぎぬき 釘貫 杭ヲ立テ材ヲ横ニ通シ、釘ニテ打貫キタル柵ヲ云フ。「狹、三」
ちはしつきたれば門もなくて只くぎぬきといふものをぞしたりける、

▲くぎやう 究竟 佛經ノ語、理ノ極ヲ究ト云ヒ事ノ極ヲ竟ト云フ俗ニトドノツマ
リニノ意、又、究竟即ノ畧語トシテ用キラル、又轉シテ至極ナルノ意、「徒然」究竟は理即
に等し、「太平、二十五」究竟の射手を二百人擇みて、

▲くぎやう 公卿 攝關大臣ヲ公ト云ヒ、大中納言、三位以上、參議(四位ナレド)
ヲ卿ト云フ、又、卿相、月卿トモ云フ、若シ大臣公卿ト云ヘバ、大臣ヲ除キタル他ヲ云
フ、「源、胡蝶」公卿といへどこの人のおぼえに必しもならふまじきことおぼかれ、「方
丈記みかどより初め奉りて大臣公卿悉くうつり給ひぬ、

▲くぬまひ 久米舞 本邦固有ノ舞樂ノ一ニテ、神武天皇ノ御製(所謂久米歌)ヲ歌
ヒ、拔劔シテ舞フ、樂器ハ拍子、和琴、笛、篳篥ヲ用キル、其ノ意天皇ノ戰捷ヲ祝ス
ルナリ昔ハ大嘗會ニ行ハレ一旦中絶シ明治十一年紀元節ヨリ復再興セラル、「貞觀成

式」踐祚大嘗祭、午日伴佐伯兩氏率舞人入自儀鸞門就中庭床子奏久米舞、

▲くもがくれ 雲隠 日月ナドノ雲ニ隠レテ見エズナルヲ云ヒ、又、人ノ死シタルヲ
云フ、「新古今」雲がくれにし夜半の月かな、「萬、三」とどめ得ぬ命にしあればしきたへ
のいへゆは出てて雲がくれにき、

▲くもる 雲居 雲ノ居ル處ノ義ニテ、遠キ處ヲ云ヒ、又禁中ヲ譬ヘテ云フ、雲井
ト書クモ同ジ「貫之」あふことは雲るはるかになる神の、「新葉、冬」つかふとてまづふ
みわけし九重のくもるの庭に雪のあけぼの、

▲くものうへ 雲上 和歌ノ上ニテ、禁中ヲ天ニ比シテ云フ語、「源、桐壺」雲のう
へも涙にくもる秋の月いかですむらむ淺茅生の宿、

▲くものうへびと 雲の上人 昇殿許リタル人ヲ云フ、殿上人ニ同ジ雲客うへのを
のこ皆同ジ、「拾遺員外」明らけき御代の千年を祈るとて雲のうへ人星うたふなり、

▲くもて 蜘蛛手 八方へ打違へニ八重十文字ニナレルヲ云フ、又、思ヒノ模様ニナ
ルヲモ云フ、「伊勢物」水ゆく川のくもてなれば橋を八つ渡せるによりて、「大和」いかに
わすれざりけるにかもし男などに具して來たるにやなどくもてに思ひ亂るるほどに、

▲くせもの 癖者 一癖アル者、普通ニ異ナル者ヲ云ヒ、又、ワル者ノ癖ニ用キラル、[○]「徒然」世を軽く思ひたるくせものにて、

▲くすりこ 薬子 古代ニ正月元旦ニ、供御ノ屠蘇酒ヲ第一ニ飲ミテ奉ル童女ヲ云フ、[○]「年中行事」年毎に今日なめそむるくすりこはわかえつの見む君がためとか、

▲くすだま 薬玉 種種ノ香料ヲ玉トシテ種種ノ造花ヲ以テ包ミ五彩ノ絲ノ長キモノヲ垂レタルモノニテ、古代ニ簾、柱等ニ掛ケテ不淨ヲ拂ヒ邪氣ヲ避クト云ヒテ用キシモノ端午ト重陽トニ掛ケ換ヘタリ、續命縷トモ云フ、[○]「源、簞」くすだまなどえならぬさまにて、

▲くすし 醫師 酒大人ノ中略語、酒ノ古名クス、クシト云ヒ約音ニキト云フ、大人ハ師ノ意、上古ハ酒ヲ以テ病ヲ治メシヨリ醫師ヲくすしト云フ、又、くすりしトモ云フ、[○]「源、若菜」くすしなどやうのさまして「徒然」くすしのがりゐてゆきける、

や

▲やへむぐら 八重葎 繁茂セル葎ヲ云フ、歌ニ詠ムモノ是ナリ、又別ニ草ノ名ニア

リ、[○]「古、雜」今更にとふへき人もおもほえず、八重むぐらして、かどさせりてへ、

▲やりど 遣戸 鴨居ト敷居トノ溝ニハメテ左右ニ引キ違ヘテ開閉スル戸ヲ云フ、高遣戸ハ丈高キモノヲ云フ今引戸ト云フモ同ジ、[○]「源、夕顔」はしぢかさおましどころなりければやりどを引あけて諸共に見出だし給ふ、

▲やりみづ 遣水 地ヲ淺ク堀リ下ゲ流水ヲ導キ池ニ流シタル水ヲ云フ、懸樋ト混ズベカラズ、[○]「順集」御前のやりみづに浮べる残りの菊、

▲やかん 野干 狐ノ異名、又、射干ト書ク、但、梵語ニ悉地羅又悉伽羅ト云フモノ狐ノ類ニテ、色青黃狗ノゴトク群行シ夜鳴ク狼ノゴトシ、能ク樹ニ上ルモノアルヨリ借字セルナラム、[○]「祖庭事苑」野干形小尾大能上樹疑枯枝不登狐即形大疑氷不渡不能上樹、[○]「水鏡、上」やかんをきつねと申し侍りしは、

▲やがて 頓、躰、即 彌ガ時ノ義、其ノ時直ニノ意、止難ノ義ト云フハ誤ナリ、[○]「空穗、藏開」それがあやしさに一日まかて侍りしままにやがてまうでて侍りしに、

▲やよひ 彌生ノ略約語陰曆三月ノ倭名、草木ノ日日ニ生ヒ出ヅル時ヨリ云フ、[○]「好忠」ははこのひやよひの月になりぬれば、ひらけぬらしな、吾が宿の桃、

▲やそうちびと 八十氏人 八十ハ物事ノ多數ナルヲ云フ稱、即多クノ氏人ト云フ意、數ノ八十二アラズ、「神樂、庭燎」檜葉の香をかぐはしみとめくれば八十氏人ぞまともせりける、

▲やつこ 奴 家處人ノ義、上古、朝廷ヨリ田宅ヲ賜ハリテ奉仕スル官人ヲ云フ、官給ノ家處ヲ所有スル人ノ意ナリ、轉ジテ、自稱代名詞ニモ用キ、又、男女ノ人ニ使役セラルル者ノ稱トナリ、後ニハ他ヲ賤ムル稱ニ用キラル、又略シテやつトノミ云フ、「方丈記」人をたのめばよろづ他のやつことなり、「竹取」かくや姫てふ大盜人のやつが人を殺さむとするなりけり、

▲やつがれ 奴ガ上ノ略語、自稱代名詞ノ謙稱、やつがりトモ云フ、

▲やつる 篋 彌衰ノ義甚シク衰ヘタルヲ云フ、又、衣服チドヲ殊ノ外事殺タルヲ云フヤつすノ自動ナリ、「源、玉葛」うつくしげなる後手のいといたうやつれて「源、夕顔」御裝束をもやつれたるかりの御衣を奉り、

▲やつす 俏 前條ノ語ヲ他動詞ニ用キタルモノ、「源、夕顔」御車もいたうやつし給へり、

▲やないばこ 柳筥 柳筥ノ音便言元ハ柳ノ細條ヲ以テ作レル筥ヲ云フ其ノ蓋ヲ物ヲ載スルニ用キキ、後ニ柳ノ細枝ヲ紙摺ニテ机ノゴトク作りテ物ヲ載スル臺ニ用キシガ更ニ變ジテ白木ノ細枝ヲ三角ニ削リタルヲ並ベテ板ノ脚ナル小机ノゴトキニ作りタルヲ云フ、冠、硯、鞆等ヲ載ス、「類聚雜例」御冠入ニ柳筥居ニ高坏、「徒然」柳筥にすうる物は、たてごま横ごま物によるべしにや、

▲やなぐひ 胡籛 矢之器ノ義ナラム矢ヲ盛リテ負フモノ籛ノゴトシ、壺胡籛ハ圓筒形ニシテ矢七本ヲ盛リ、(讓位節會等ニ公卿以下ノ料)平胡籛ハ扁平形ニシテ矢二十一本ヲ盛ル、(行幸、例幣等ニ負フ)、「狭、一」やなぐひなどおひたるもの見も知らぬ姿ともしたるもの數しらず、

▲やむごとなし 無止事ノ義止ミ難シ打捨テ置カレヌ意、轉ジテ特別ニ貴シノ意、「後撰、戀」遠き所に罷りける道よりやむごとなき事によりて京へ人つかはしけるついでに、「源、桐壺」いとやむごとなきさにはあらぬが極めて時めき給ふありけり、

▲やうがう 影向 佛經ノ語、諸佛ノ靈ノ一時ノ應現ヲ云フ、「大鏡、八」今日この御堂に影向し給ふらむ、

●やまらぬ やは威嚇詞うれハ己ノ轉語、卑下ノ者ヲ呼ビ掛クル語、「宇治拾、十一」
從者を呼びて、やうれ、御前の邊にて見てこ、

▲やうき 様器 本様トシテ造ラシムルヨリ云フ、今ノ塗盆ノゴトキモノナリ、「枕、
八」村上の御時雪のいと高う降りたりけるを、やうにもらせ給ひて、

▲やうめい 揚名 名ノミアリテ職掌モ所得モナキ官職ニ云フ語、揚名介、揚名書
生ナド、「徒然」揚名介に限らず揚名目といふものあり、政事要略にあり、

▲やくし 薬師 薬師瑠璃光如來ノ略語、又大醫王佛ト云フ、佛經ニ東方瑠璃國
ノ教主ニシテ、衆生一切ノ病患ヲ醫スト云フ、「更科」等身に薬師佛をつくりて、

▲やもせば 輒 稍も爲ばノ義ニテ俗ニヒヨットモシタラノ意、事ノ成リ行カ
ムトスル機會ヲ云フ語、やもすればノ未定、「紫日記」やもせば腰はなれぬばかり折
れかかりたる歌をよみいて、

▲やもすれば 前條ノ語ノ既定、「枕、一」つとめては、やみにたれど猶曇りてや
もすれば降りあちぬべく見えたるもをかし、

▲やまとだましひ 大和魂 大和心ト同シ、日本ノ學問、漢學ニ依リテ得タル才智ヲ

からざえト云フニ對スル語、轉ジテハ、日本人ニ特有ナル節義ノ心ヲ云フ、「源、少女」猶
ざえを元としてこそ、やまとだましひの世に用ゐらるる方もつよう侍らめ、「大鏡、二」
やまとだましひなどはいみじくあはしたるものを、

▲やまとうた 和歌 歌ハ本邦固有ノモノナレド、中古、漢詩ノ盛ナルニ當タリテ、
漢詩ヲからうたト云フニ對シテ、歌ヲやまとうたト云フニ起コレル稱、又和歌トモ云
フ、「古今」序「やまとうたは人の心を種として萬の言の葉とぞなれりける、

▲やまとどころ 大和心 日本國ノ學問、本教ニ依リテ、養ヒタル精神ヲ云フ、「漢才
ニ對スル稱」續世繼、三〇かの少納言からの文をもひろく學び、大和心も、かしまかりけ
るにや、「愚管抄、三〇」人からやまとどころばへはわろかりける人なりかち才はよくて侍
れどいみじく作られき、

▲やまとしまね 大和島根 根ハ親愛ノ語、垣根、屋根、初根ノ根ノゴトシ、大日本國
ト云フニ同シ、「萬、二十」いふこともたはわざなせと、天地の固めし國ぞ、大和島根は、

▲やまがつ 山賤 山が入ノ略轉語、山ニ住ム樵夫ノゴトキ賤民ノ意山縣人ノ義ト
スルハ誤ナリ、「拾遺、夏」やまがつと人は言へども郭公まづ初聲は吾のみぞきく、

▲やまたち 山立 山中に潜ミ居テ、追劔キナドヌル盗人ヲ云フ、「著聞、十二」奈良坂にて、山だち待ち設けて、「徒然」さて山だちありとのしりければ、

▲やまたのそらづ 山田案山子 山田ニ立テル案山子ヲ云フ、そほどト云フガ古名ナリ、「古事記、上」故顯白其少名毘古那神所謂久延毘古者於今山田之會富勝者也、「古俳諧」足引の山田のそほづものれさへ我をほしといふうれはしきこと、

▲やまのは 山端 山ノ場ノ義、山ト云フニ同シ、軒ヲ軒端ト云フガゴトシ、端ハ例ノ借字、意ナシ、「萬、四」山のはにあぢむら騒ぎ、ゆくなれど、吾はさぶしる、君にあらねば、

▲やさげび 矢叫 矢ヲ射テ物ニ中タリ、手答シタル時ニ叫ブ聲ヲ云フ、狩ノ時ハ我ガ顔ヲ、アヲノケテ、ああ、又おちト長ク引キ、犬追物ノ時犬ヲ射バ、我ガ頭ヲ弓手ニシテあうト高聲ニ云フ故實ナリト貞丈雜記ニ見エタリ、又、矢答ト云フ、又戦争ノ初メニ遠矢ニ射合フ時ニ兩軍ニテ、高聲ヲ發スルヲモ云フ、「夫木、三十六」道多き奈須の御狩のやさげびにのがれぬ鹿の聲ぞささこゆる、

▲やさし 彌狹シノ義、身幅ノ狭ク感ズル貌ヨリ耻カシキ意轉ジテ優美ナル意後ニ

ハ圓滑ニテスナホナルヲ云フ、「古、俳諧」何をして身のいたづらになりぬらむ、年の思はむ、ことぞやさしき、「山家、上」いとぎとちて庭の小草の露ふまむ、やさしき數に人やちもふと、「徒然」おそろしき猪のししも、ふするの床といへばやさしくなりぬ、

▲やきゑ 焼繪 焼鑊ニテ物ニ模様ヲ燒キ附ケタルヲ云フ、「盛衰、四十三」三浦義盛十三東二伏の白籠に、山鳥の尾を以て矯ぎたりけるを、羽本一寸許置いて三浦小太郎義盛と焼繪したりけるを能つ引いてひやうとはなつ、

ま

▲まろね 眞荒寐ノ略轉語、帯ヲ解カズ着タルママニテ寐ルヲ云フ、(和寐ニ對スル稱)又まろねト云フ、俗ノごろねナド同シ、「萬、廿」草枕旅行く君がまろねせば、「萬、廿」草枕旅のまろねのひもたえば、

▲まほゆし 目映シノ轉語、光明ノ烈シク目ヲ刺撃シテ正シク視難キヲ云フ俗ノまほしいト同シ、又、威勢ノ盛ナルニ對シテ恥カシク思ヒ、衰ヘタルニ對シテ冷マシク思フ意、「空穂、俊陰」あたり光りかがやきて見る人まほゆきまで見ゆ、「源、桐壺」上達部

殿上人なども、あいなく目をそばめつといふまはゆき人の御ちほえなり、

▲まにまに 隨 儘ニ儘ニノ略語、ソレニ連レテノ意、「萬、八」神無月時雨にあへるもみぢばの吹かば散りなむ風のまにまに、

▲まほ 眞秀ノ義、完全ノ意、片ほニ對スル稱、船ニまほト云フモ正帆ノ義ニシテ偏帆ニ對セルナリ、「源、繪合」草の手にかんなの所所にかきまぜてまほのくはしき日記にはあらず、

▲まほろし 幻 目惚様ノ義ニテ、無キ物ノ姿ノアルガゴトク現ハレテ、直ニ消エ失スルコト、目ノ惚レタルガゴトク思ハルルニ依リテ云フ、又、幻術ヲ行フ人ヲ云フ、「千載、戀」思ひ餘り、打寐る宵のまほろしも波路を分けて行き通ひけり、「源、桐壺」尋ねゆく、まほろしもがなつてにても、玉のありかをそこと知るべく、

▲まほる 眞欲ルノ義、食フニ同シ、「土佐、上」手を切る切る、つんだる菜を親やまほるらむ、

▲まほらま 眞秀善眞ノ義、眞秀ハ上條ノほと同意、らハ親愛語、野ららト同シ、まハ詔らま、わくらばマ、ばト同シ助語、畢竟、完全無缺ノ意、國形ノ十分ニ整頓

セルヲ云フ、美合ムノ義トセルハ誤ナリ、「景行紀」やまとは國のまほらま「萬、九」國の眞保良を、「萬、十八」國のまほらに、

▲まへつぎみ 前齋君ノ義、天皇ノ御前ニ祇候セル人ヲ、他ヨリ崇敬スル語、仍リテ一般ノ高官ナル人ヲ云フ、まうちぎみ「まちぎみ」ナド云フ、「景行紀」まへつぎみいわたらすもよ、

▲まどろむ 目漂ムノ義、暫時睡ルヲ云フ、「源、空蟬」若き人は、何心なくいとよくまどろみたるべし、

▲まぢいづ 待出 待チ居テ其ノ物ヲ出デサスルヲ云フ、まぢいだすと解ク方解シ易シ、使役語ノ變形ナリ、「徒然」曉近うなりて、まぢいでたる木の間の影、

▲まぢとる 待取 待チ居テ其ノ時ニ及ブヲ云フ、「拾、玉」夕立の、雲よりいつる夏の日を待ちとるものは、蟬の諸聲、

▲まぢわたる 待渡 期シテ其ノ時ニナルヲ待チ居ルヲ云フ、

▲まぢつく 待附 待チ居テ遇フ事ヲ得ルヲ云フ、「枕、二」験者もとむるに、辛うじて待ちつけて、

▲まぢらうく 待受 待チ迎フルヲ云フ、「源、野分」宮いとうれしくたのもしと待ち受け給ひて、

▲まかる 罷 眞離ノ義退キ去ルト云フ意ノ敬語、參るノ反ナリ、轉ジテ、往反スルコトノ敬語、更ニ轉ジテ、他語ノ上ニ加ヘテ敬意ヲ表ハスタメニ用キル添語、本來ノ意義ナシ、「伊勢」昔男梅壺より雨に濡れて、人のまかり出づるを見て、「古、別」紀の宗貞が東へまかりける時に、「千載」熊野の方よりまかり入りけるにつけて、「罷出、罷在罷成」ナド、

▲まかりまうす 罷申 罷ラムト申シ願フ意、暇ヲ請フ、まかりまうしト云ヘバ、暇乞ノ意トナル、「源、源雲」まかり申し給ふさま、くまなき夕日に、いとどしく、きよらに見え給ふ、「神皇正」古々例を尋ねて、罷申の儀あり、

▲まかなふ 眞足爲ノ義、取揃ヘテ供スルヲ云フ、轉ジテ用度ノ物ヲ給スル意、多ク食物ニ用キラル、「源、初音」御視取まかなひかかせ奉らせ給ふ、「源、夕顔」御かゆなど急ぎ參らせたれど、とりつぐ御まかなひうちあはず、

▲まがまがし 禍禍シノ義、忌忌シキ意、不吉ヲシキヲ云フ、「枕、一」いかなる心に

かあらむ、泣腹立ち、打ちつる人をのろひまがまがしくいふもをかし、

▲まかげさす 目影翳ノ義、手ヲ額ニ當テテ遠クヲ見ルコトヲスル意、「盛衰、廿」

高さ峯にのぼり、まかげをさして、見わたせば、

▲まかぶら 睡 目覆ラノ義、目ヲタラ云フ、又、まなぶらト云フ、「盛衰、廿」まかぶらおほひて勢大なり、「宇治拾、十」まかぶらくぼく鼻のあざやかに高く、

▲まだら 曼陀羅 梵語 mandala ノ略語、圓ノ義、壇見、又、壇ト譯ス、又、三摩耶形ト云フ、實相全部ヲ一圓廓ノ内ニ具寫シタルモノヲ云フ、「名義集、七」此翻壇新云ニ正名曼茶羅、「源、幻」極樂の曼陀羅などこのたびなむ供養すへき、「源、鈴蟲」法華のまたらかけ奉りて、

▲まそかがみ 眞澄鏡ノ略轉語、善ク澄ミテ明ナル鏡ヲ云フ、照る「清き」見る「磨ぐ」懸けて「蓋」面影「向ふ」ナドノ枕詞、「萬、七」眞十鏡、てるべき月を、「萬、八」銅鏡清き月夜に、「萬、十一」眞祖鏡見とも言はめや、「萬、四」眞十鏡磨きし心を、「萬、十二」犬馬鏡、懸けて忍ばゆ、「萬、十九」眞鏡蓋上山に、

▲まな 眞字 漢字ノ楷書ナルヲ、草書ニ對シテ云フ稱、まんなトモ云フ、「源、葵」さ

まにもまなにもまなまめつらしきまに、かきませ給へり、「狭、四」女君のまなや、
かななやまのま打とけてかい給へる、

▲まなむすめ 眞親娘ノ義、殊ニ鍾愛ノ娘ヲ云フ、「空穂、藤原君」ふこのすけのまな
むすめ、「殊ニ親愛ノ子ヲまなごト云フまなモ同意ナリ、

▲まらうと 客 稀人ノ音便言ノ轉ジタル語、他ヨリ來訪ノ人ヲ云フ、まらびと、
まらと「まらうと」まれうとナト云フ、「土佐、上」大和歌、あるじもまらうともこと人もい
ひあへり、

▲まんどころ 政所 政ヲ行フ所、特ニ檢非違使廳ヲ云ヒキ、後、鎌倉幕府ニハ政
ノ出ヅル所ヲ公文所ト云ヒシヲ、頼朝ガ近衛大將ニ任セラレテヨリ政所トシ長官ヲ別
當ト云ヒ、令、寄人アリキ、室町幕府ニハ大小政令ノ府ナリキ、更ニ轉ジテ、攝關ノ妻
ヲ北政所ト云ヒ略シテ政所ト云ヒ、又、攝關ノ母ヲ大政所(又、大應)ト云ヒキ、「源、紅
葉賀」まんどころ家可などをはじめ、

▲まんな 眞字 まなニ同ジ、其ノ條ヲ見ヨ、

▲まのぼる 参り上ルノ音便言、参内スルト云フニ同ジ、「源、桐壺」何事にも故あ

ることのふしぶしにはまづまのぼらせ給ふ、

▲まうけのきみ 儲君 皇太子ヲ云フ、「源、桐壺」一のみこは右大臣の女御の御腹に
てよせ重く疑なきまうけの君と世にもてかしづき、

▲まうづ 詣 参り出ツノ音便言ノ畧語、参り出ツノ意、轉ジテ來るノ上ニ冠ラセテ
強ムルコト、罷ルノコトク用キラル、「伊勢物」ろの御わざにまうて給ひ、「源、少女」恨め
しと思ひまこえさせつへき事の出でまうて來たるを、

▲まうしぶみ 申文 上書ニ同ジ、「枕、一」除目のほとなど、内わたりはいとをかし、
雪ふり氷りなどしたるに申文もてありく、

▲まぐらごど 枕言 物語ノ材料トスル言ヲ云フ、「源、桐壺」伊勢貫之によませ給
へるやまとことのはをももろこしのうたをも只その筋ををまぐらごどにせさせ給ふ、

▲まぐらのさうし 枕草紙 物語ノ材料トスル話ヲ多ク書キ集メタル草紙ヲ云フ、
「枕、十二」上の御前には、史記といふ文をかかせ給へるなど宜はせしを、枕にこそはし
侍らめと申ししかば、

▲ままきゆみ 細射 其ノ製詳ナラズ、ままき矢モアリ、「兵庫式」矢四具、一具萬々

まにもまなにもまままめづらしままに、かきませ給へり、「狹、四」女君のまんなや、
かななやままま打とけてかい給へる。

▲まなむすめ 眞親娘ノ義、殊ニ鍾愛ノ娘ヲ云フ、「空穂、藤原君」ふこのすけのまな
むすめ、殊ニ親愛ノ子ヲまなごト云フまなモ同意ナリ、

▲まらうど 客 稀人ノ音便言ノ轉シタル語、他ヨリ來訪ノ人ヲ云フ、まらびと「
まらと」まらうど「まれうど」ナト云フ、「土佐、上」大和歌、あるじもまらうどもこと人もい
ひあへり、

▲まんどころ 政所 政ヲ行フ所、特ニ檢非違使廳ヲ云ヒキ、後、鎌倉幕府ニハ政
ノ出ヅル所ヲ公文所ト云ヒシヲ、賴朝ガ近衛大將ニ任ゼラレテヨリ政所トシ長官ヲ別
當ト云ヒ、令、寄人アリキ、室町幕府ニハ大小政令ノ府ナリキ、更ニ轉ジテ、攝關ノ妻
ヲ北政所ト云ヒ略シテ政所ト云ヒ、又、攝關ノ母ヲ大政所(又、大廳)ト云ヒキ、「源、紅
葉賀」まんどころ家司などをはじめ、

▲まんな 眞字 まなニ同ジ、其ノ條ヲ見ヨ、

▲まのぼる 参り上ルノ音便言、参内スルト云フニ同ジ、「源、桐壺」何事にも故あ

ることのふしぶしにはまづまうのぼらせ給ふ、

▲まうけのきみ 儲君 皇太子ヲ云フ、「源、桐壺」一のみこは右大臣の女御の御腹に
てよせ重く疑なきまうけの君と世にもてかじつゝ、

▲まうづ 詣 参り出ヅノ音便言ノ畧語、参り出ヅノ意、轉ジテ來るノ上ニ冠ラセテ
強ムルコト、罷ルノゴトク用キラル、「伊勢物」の御わざにまうで給ひ、「源、少女」恨め
しと思ひまこえさせつべき事の出でまうで來たるを、

▲まうしづみ 申文 上書ニ同ジ、「枕、一」除目のほどなど、内わたりはいとをかし、
雪ふり氷りなどしたるに申文もてありく、

▲まごごご 枕言 物語ノ材料トスル言ヲ云フ、「源、桐壺」伊勢貫之によませ給
へるやまごごのはをももろこしのうたをも只その筋をぞまぐらごごにせさせ給ふ、
▲まぐらのさうし 枕草紙 物語ノ材料トスル話ヲ多ク書キ集メタル草紙ヲ云フ、

「枕、十二」上の御前には、史記といふ文をかかせ給へるなど宣はせしを、枕にこそはし
侍らめと申ししかば、

▲ままきゆみ 細射 其ノ製詳ナラズ、ままき矢モアリ、「兵庫式」矢四具、一具萬々

伎「夫木、卅二」いかにせじ、ままの弓のともすればひきはなちつあはぬ心を、

▲まけわざ 負事 圍碁、雙六、歌合、相撲ナドノ時、負ケタル方ヨリ勝方ニ響應スルヲ云フ、「新勅、賀」中將公任と基つかうまつりて、まけわざに銀の籠に虫をいれて弘徽殿に奉らせける、

▲まぶし 翳射 目柴ノ義トモ間伏ノ義トモ云ヘド詳ナラズ、獵夫ノ隠レテ鳥獸ヲ射ムトスル時柴ナド折リカケテ身ヲ隠スモノヲ云フ、「夫木、十二」障子の繪にまぶしといふことをして、まぶえふく所、まぶしさをさつをの笛の聲ぞともしらてや鹿のなきかはすらむ、

▲まてつがひ 眞手番 古代、五月五日ノ競馬騎射ニ近衛ノ射手ノ立合ヲ云フ、其ノ試ヲ荒手番ト云フ、「新六、一」梓弓まゆみは今日をまてつがひあやめの根さへ引そへにけり、

▲まさなし 無正 正體ナシノ義ヨリ出デテ良カラズノ意ニ用キラル、「竹取」こわだかに宣言ひり、屋の上をる人どものさくに、いとまさなし、
▲まめやかに 眞見エやかにノ約言、眞實デニ、實體ナル様ニナドノ意、「枕、五」な

まき人のためいとほしく侍るなどまめやかに啓すれば、

▲ましら 猿 梵語マルカタ makata 猴獮ノ義ノ音譯ヲ摩斯叱又、摩迦羅トセシヲ訛レリト云ヒ、又、眞猿ノ轉語ト云ヒ、又、申ノ字(十二支中ノ)ヲ申ト讀ムヨリ起コレリナド諸説アレド詳ナラズ、又、ましトモまじトモ云フ、「古、誹諧」わびしらにましらななきそ足引の山のかひある今日にやはあらぬ、「紫日記」ましも猶遠方人の聲かはせ、

▲まじらふ 交 まじるノ延音言、まじるニ同シ、又、交際スル意ニ云フ、「源、桐壺」かたじけなき、御心はへのたぐひなきをたのみにてまじらひ給ふ、

▲まますほのすすき 眞緒薄 眞ハ發語、緒ハ丹色ノ義轉シテ赤キ意ニ用キル、即赤キ穂ノ薄ヲ云フ、後ニハ、只、薄ノ穂ノ意ニ云ヒ、糸ニ比シテ云フ、まそを、「ますを、まそを」、「まそう」、「ますう」ナドモ云フ、借字ニ十寸穂ト書クヨリ、穂ノ長サ一尺ノ薄ヲ云フト云ヘルハ非ナリ、「徒然」あるものまますほのすすきまそほのすすきなどいふ事あり、

▲ますかがみ 眞澄鏡 眞鏡ミ鏡ノ略語、善ク澄ミ明ナル鏡ノ意、照ル塵ク清キナドノ枕詞(まそかがみノ條ヲ見ヨ)

▲ますらを 丈夫 益荒男ノ義剛キ男ヲ云フたをやめニ對スル語、又、ますらたけ
をト云フ「萬、一」ますらをの、さつ矢たばさみ立向かひ射るまどがたは見るにさや
しけ、

け

▲けいこ 稽古 古ヲ稽ヘ(稽ハ心ヲ止メテ計リ見ル意)知ルヲ云フ、又、學ビ習フ
意ニモ用キラル、「後漢書、廿」今日所蒙稽古之力也(神皇正統後宇多の御門こそゆゆ
しき稽古の君にましまししに、

▲けいめい 警衛 警衛ノ訛音、警メ衛ル意、又、轉シテ其ノ事ヲ取扱フ意、舊説ニハ
經營ノ訛音ナリト云フ、但、漢字ニテ書ケルハ皆警衛トアリ、又、敬命ナリト云フ説モ
アリ、「三實、十二」天行成災相仍宜益警衛兼防災疫(源、夕顔)大殿いみじくけいめ
いし給ひて、「濱松、四」中納言あるじだちてけいめいしつつ「徒然」せうとの城介義
景その日のけいめいして候ひけるが、

▲けいし 辰子 辰子ノ音便言、木屐ヲ云フ、くつつけのあしたトモ云フ、「枕、一」
高さけいしをさへはきたればゆゆしくたかし、

▲けいし 家司 家司ノ音便言、親王家攝關大臣家等ノ家務ヲ取扱フモノヲ云フ、
上家司、下家司ナドアリ、「源」御供に人も候はざりけりふびんなるわざかなとてむつ
ましさ下家司にて、「落窪、三」衛門の督の殿のけいしなる但馬守下野守、

▲けいせい 傾城 美人ヲ云フ稱ニテ、漢武帝李夫人ノ故事ナル一願傾人城二再願
傾人國ニヨリ出ツ、後ニ遊女ノ稱トナル、「平家、七」大將軍、矢面に進んで傾城を御覽せ
られむ所を、

▲けはひ 氣色 けハ氣ノ義、はひハ形容ノ語、様子「ソブリ」ケブリ「ナド云フ
意(源、帚木)さてもみつべかりしけはひなりしかば、

▲けに 超にノ約音、一層勝リテ、尙優レテ「ナドノ意、「源、夕顔」ひまびまより見
ゆる火の光、螢よりけにほのかに、

▲げに 超にノ更ニ轉シタル語、常ニ實ニト書クハ義ヲ以テ書ケルナリ、誠ニ思ヒ
シゴトク「實際ニ」ナドノ意、「土佐、下」げに三十文字あまり七文字ありける、

▲けちどわん 結願 日數ヲ定メテ佛ニ立願シテ、其ノ修法ヲ終ヘタルヲ云フ、

「源、種」はての日は我が御ことを結願にて、世をなま給ふよし佛に申させ給ふ。

▲けちごんに 掲焉にノ古音、キハヤカニ「ハッキ」リト明白ニナド云フ意、「文選、西京賦」豫章珍館揭焉中三時、「落窪、一」この聲の君は、あしき事をも、かしがましくいひ、よき事をば、けちごんにほむる心さまなれば、「増鏡、村時雨」妙法院の宮はげちごんに赤き腹巻をすかして、

▲けちごん 結縁 佛道ニ縁ヲ結ビ始ムルヲ云フ、「源、柏木」かくものしたるついでにいむごとくけ給はむをだに結縁にせむかし、

▲けぢめ 區別 差別トモ書ク、「伊勢物」この人は思ふをも思はぬをもけぢめ見せぬ心なむありける、

▲げだう 外道 梵語底體迦ノ對譯、佛教ニテ自己ノ妄情ニ隨ヒ、他ノ道ヲ求ムル者ヲ云フ、「義楚六帖」至妙虛通爲道、心遊道外、故名外道、「狹、二」外道の娘にも佛ははかられ給はざりけるものとて、

▲けたし 蓋 氣正シノ義、大略斯ウナラムト推量スル語、「萬、二」古に戀ふらむ鳥は郭公蓋やなきし吾が戀ふるごとく、

▲けそら 顯證 けせう、けしよう、けんそらトモ云フ、アラハナルヲ云フ、顯露ニ似タリ、「枕、一」あれは誰そ、けそらにといへば、

▲けそく 華足 机、箱、臺等ノ脚ニ花形ノ彫刻アルモノヲ云フ、くゑそくとモ書ク、「源、繪合」左は紫檀の箱に蘇芳のけそく、

▲けづりほな 削花 木ヲ削リカケテ造レル造花ヲ云フ、「圖書式」金銅花瓶二口菊削花二枚、

▲けづりひ 削氷 削リタル氷ヲ云フ、食用ノ物ナリ、「著聞、六」折櫃の上に折敷を置きてけづりひをすゑて公卿の前におかれけり、

▲けづく 結句 詩歌ノ終ノ句ヲ云フ語ヨリ轉シテ、物事ノ終ヲ云フ、今ノ俗、却ッテノ意トス、「盛衰、四十」能登殿こそ、ゆゆしく振廻ひ給しか結句舟に乗り海に入り給ひぬ、

▲げらふ 下薦 年功ノ少ナキ者ノ義ヨリシテ、賤シキ者ノ稱トス、「伊勢」まだ下らうにて内へまゐり給ふに、

▲けんぞく 眷屬 六親以外ノ同族ヲ云ヒ、又、僕従、家隸ヲ云フ、「大經、下」六親

眷屬、(注)、父母兄弟妻子曰六親也或父母伯叔兄弟也六親之外名爲眷屬、(無量壽經) 家室眷屬飢寒困苦「源、夕顔」くゑんぞくもたちまじりたらむ、

▲げんぶく 元服 うるかうぶりト云フ、男子十二三歳ノ者、元テ大人ノ服ヲ着、冠ヲ加ヘ大人トナル禮式ヲ云フ、此ノ時、實名ヲ着ク、後世、貴人以外ハ、大抵略式ニテ唯前髪ヲ剃リ、上下ヲ着ルヲ禮トセリ、婦人ハ眉ヲ去リ、齒ヲ涅シ、髮結ノ風ヲ改ム、昔ハ大禮ノ一ナリシガ、方今此ノ禮全ク廢絶セリ、「源、桐壺」十二にて御元服し給ふ、

▲けんぎ 駢者 修驗者ヲ云フ、「源、葵」いみじきけんぎどもにもしたかはず、

▲けんしやう 勸賞 功ヲ賞シテ官ヲ授クルヲ云フ、勸ヲケント讀ムハ漢音ナリ、

〔平家、五〕安藤武者は文覺をたるけんじやうに「らう」を経ずして、當座に右馬の允にぞなされける、

▲けう 希有 有ルコトノ希ナル意、メヅラシキ、不思議ナルヲ云フ、「法華、序品」諸佛神力智惠希有也、(注)希有者正歎爾前不然、故云「希有」、「源、手習」いとあやし、けうの事をなむ見給へし。

▲けうやう 孝養 孝養ニ同ジ、「大乘法數」若能孝養父母奉事師長、即心慈心不殺修業十善是爲淨業、「平家、一」只我を都の内にて住みはてさせよそれは今生後生のけうやうにてあらむずるといふは、

▲けおさる 氣壓 けハ發語おさるハ、壓スヲ受身ニ云ヘル語、壓倒せらるると云フニ同ジ、「徒然」顔にくさげなる人にも立まじりてかけずけおさるるこそ本意なきわさなれ、

▲けやけし 尤異 超彌超シノ義、勝レテ甚シクアリノ意、「後三年記」義家が郎等らさきて我が主程の兵をけやけさこといふ翁かなと思ひつゝ、

▲けふそく 脇息 小サキ机ノゴトキ物ニテ、座ノ脇ニ置キテ、體ヲ凭ラスルモノ、あしまつきたト云フ、又、脇足トモ書ク、「源、帚木」けふそくによりおはすいとやすらかなる御ふるまひなりや、

▲けふのほそぬの 希婦細布 陸奥國希婦ノ里ヨリ出ダス布ノ名、白クシテ幅狭キモノ、多ク狭キト云フ形容語ニ用キラル、けふのせばぬのトモ云フ、「袖中抄」いしぶみやけふのせばぬのはつはつに、

▲けふじ 脇士 佛像ノ左右ニ侍スル佛ヲ云フ、字、又、脇仕夾侍挾持ニ作ル、わき
だちト云フ、例ヘバ彌陀ノ觀音、勢至、不動ノ制吒迦、毘羯羅等ノゴトシ、源、鈴虫、
あみだ、佛けふぢの菩薩ちのちの白檀して作り奉る、

▲げこくじやう 下剋上 下ヨリ上ノ威ヲ輕ンシ侮ルヲ云フ、「盛衰、六」大方近頃
いとしもなきものどもが近習者し、下剋上して、折をまち時を伺ひて、

▲けさ 袈裟 梵語、袈裟野 *Kassaya* ノ略語ニテ褐色衣ノ義、又不正色雜色トモ云
フ、本蘭色ナルヲ本義トス、沙門ノ服ヲ云フ、美稱ニハ、無垢衣、功德衣、忍辱鎧ナ
ド云フ、後ニハ肩ニ懸クルヤウニ作ラル、「祖庭字苑」字本作迦沙、梁高洪撰傳記下
添衣言「道服」也、「源、若菜」けさなどはいかにぬふものぞ、

▲けさい 潔齋 潔齋ト同シ、物忌スルヲ云フ、「大鏡、二」湯度度あみいみじく
けさいしてきよまはりて、

▲げざん 見參 見在參任ノ義ニテ、古昔朝廷ノ節會ナドニ伺候シタル人ノ交名ヲ
注記シテ、御前へ出タヌヲ云フ、轉シテハ會フコトノ敬語トナルけんざんト云フ、「太
政官式」凡諸節會五位以上見參者、未召刀稱之前式部省書其簿進太政官「源、梅

枝」内のおほいどのの頭中將、辨少將なども、げざんばかりにて、まかづるを、とどめさ
せ給ひて、

▲けさうぶみ 懸想文 懸想シタル意ヲ書キ送ル文ヲ云ヒ、艶書ニ同シ、又、古代京
都ニテ、正月篋ニツクテ賣リ歩キタル一種ノ文、男女良縁ヲ占フ爲ニ争ヒ買ヘリト云
フ、「枕、二」すさまじき物、よるしうよみたりと思ふ歌を、人の許にやりたるに、返しせ
ぬ、けさうぶみはいかがはせむ、

▲げさく 外戚 外戚ノ吳音、其ノ意同シ、母方ノ親族ヲ云フ、「源、桐壺」げさくの
よせなきにてはただよはさじ、

▲げゆ 解由 國司ノ其ノ任終ハレル時、後任ノ人ヨリ受取ル國稅等ノ滯納ナク濟
ミタル由ヲ書ケル文書ヲ云フ、解由狀ナリ、「土佐、上」ある人縣の四とせ五とせ果てて
例の事ども皆しをへて、げゆなどとりて、

▲けし 超シノ約言、常ニ超エテ甚シク違ヘル意、「萬葉、十」あら玉の年のを永くあ
はざれば、けしき心を、あがもはななくに、「伊勢物」この女かく書き置きたるを、けしう
心よくへき事も覺えぬを、

▲けしがる 超しくあるノ約語、尋常ニ超エタル、普通ナラヌナドノ意、異シクアルノ義トスルハ、本末違ヘリ、けしがる禰宜、けしがる女、けしがる賤が伏屋、又ハけしがる直衣小袴ナド、

▲けしからず 前條ノ語ヲ打消ニ用キタルニテ、異様ナラズ、惡シクハアラズノ意「紫日記」けしからぬ人を思ひ聞こえさすとして、

▲けしからず 常シカラズノ義ニテ、殊ニ普通ニ超エタリ、惡シナドノ意、前條ノけしからずト語源異ナリ、混ズベカラズ、「源、夕霧」あなけしからず六條の東の上の御文ナリ、「榮華、初花」それにつけてもけしからぬことどもいで来て、

▲けしうはあらず 前條ノ語ヲ緩メテ用キタル語、其ノ語源ハ同シ、「源、帚木」もてつけてみるまに心もけしうはあらず侍りしかど、「古事談、一」花山院御出家之時、天下騒動、有人申大入道殿仰云ケシウハアラジヨク求メヨ、

▲けしきはむ 氣色ノアラハルル意、ばむハ黄ばむ、よしばむナドノばむニ同シ、「源、藤裏葉」いかに思ひて例ならずけしきはみ給ひつらむ、

▲けもの 畜産 飼物ノ約轉語、家ニ飼養スル畜類ヲ云フ、馬牛犬豕ナドノ類ナリ、

けだものハ野獸ノ意ニテ、熊鹿等ヲ云フ、

ふ

▲ふはさみ 文挿 文挿ノ音便言、又、ふんばさみトモ云フ、上書文ヲ挿ム杖ヲ云フ、▲ふところのみ 懐紙 たたうがみニ同シ、今ノ鼻紙ノゴトシ、「枕、二」ふところ紙もとむとして、

▲ふぢころも 藤衣 葛布モテ作レル衣、古代ノ服ナルガ、後ニ喪服トナル、綾衣ノ意ニ多ク用キラル、「古、戀」思ふどち一人一人が戀ひ死なば、誰によそへて、ふぢころも着む、

▲ふりはへて 振延 振ハ添語、一向ニ其ノ方へ趣ク意ヨリシテ、俗ノ態態、殊更ニナドニ同シ、「土佐、上」醫師ふりはへてとうそ白散もてきたり、

▲ふりわけがみ 振分髪 古代ノ童男女ノ髪ノ形ニテ、左右ニ振分ケテ垂レ肩ノ程ニテ切りタル髪ヲ云フ、振ハ例ノ添語、「伊勢物」くらべこしふりわけ髪も肩すきぬ、▲ふりさけみる 振避見 振ハ添語、吾ガ體ヲ後ニ避ケテ遠ク仰ギ見ルヲ云フ、瞻

仰ノ字ニ當タル、「古、羸旅」天の原ふるもろけ見れば春日なる、三かさの山に出でし月か

も、
▲ふるつはもの 古兵、老功ナル武者ヲ云フ、「盛衰、卅八」熊谷はふるつはものな
りければ、

▲ふるな 富樓那 梵語ブラーナ Purna、佛弟子ノ名ニテ雄辯ナリシヨリ、人ノ
雄辯ナルヲ富樓那の辯ナド云フ、

▲ふかみどき 深見草 藪柑子（古名山橘）ノ古名、林叢中ニ生ズルヨリ名ヅク、歌
人等牡丹ノコトトスルハ倭名抄ノ誤ヲ襲ゲルナリ、從フベカラズ、今ノ花ヲ賞スル牡
丹ハ古名ほうたん、ぼたにナド云ヘリ、

▲ふだらく 普陀落 梵語ポータラカ Potalaka、印度河口ニアル海港ノ名ナルヲ
觀音ノ遊所ノ靈地ト信ゼラレシヨリ海島ト譯スト云ヒ、又小白華ト譯スト云ヘルハ
「パータラ」 Patala ヲ誤レルナリ、舊譯書皆從ヒ難シ、「新古、神祇」ふだらくの、南
の岸に堂建てて今を榮えひ北の藤波、

▲ふたあゐ 二藍 赤藍ベニバナト青藍アヲバナトノ間色ニテ染メタル色ヲ云フ、夏ノ衣服ニ用キル

「源、空蟬」ふたあゐの小褂、「筋抄」二藍、苦熱之比着ニ用之、先年最勝講右大將實氏着レ之
文如レ常、

▲ぶつた 佛陀 梵語ブツダ Buddha 覺者ノ義、又、勃陀、勃駄、部陀、母駄、佛徒、
浮屠、浮圖ナド書ク、義同シ、（ほとけノ條參看）又ぶつト云フハ略語ナリ、

▲ぶつさう 物忿 物騒ガシト云フベキヲ音讀シテ、別種ノ意ヲ成セル語、世上ニ
平穩ナラヌ事アルヲ云フ、「保元、一」是程京中物忿の由承聞す、

▲ぶつつかじ 不束 太之氣フツケにノ義、太ク大キナル様サマニノ意、轉ジテ太ク賤シゲ
ニノ意、更ニ轉ジテ無才不能ナドノ意、「空穗、藏開」いと大さやかにふつつかに肥を給
へるが、「源、夕顔」やつれたる旅姿いとふつつかに心づきなし、

▲ぶつみやう 佛名 御佛名ト云フハ、古代禁中ノ公事ニテ陰曆十二月十九日ヨリ
三日間、清凉殿ニテ、諸僧ニ佛名經（十二卷、元魏菩提流支譯）ヲ誦セシメ、三世諸佛ノ
名號ヲ唱ヘテ六根ノ罪ヲ滅セシメラルト云フ式ヲ云フ、「榮華、日蔭」宮宮の御佛名に例
の佛名誦經などする聲もをかしげに、
▲ふんだりげ 芬陀利華 梵語ブンダリーカ Pundika 蓮華ノ義、此ノ蓮ハ蓮中ノ

最勝レタルヨリ、物ノ最勝レタルヲ云フ稱トナル、「觀經」若念佛者當知此人是人中分陀利華、

▲ふげん 普賢 梵語娑輸跋陀ニテ、徧吉、賢首ナド譯ス、體性周徧(普)隨緣成德(賢)菩薩ノ名、無礙念王千太子ノ一ニシテ第八子ナリト云フ、白象ニ騎リタル像ヲ圖ス、文珠ト共ニ釋迦ノ脇侍タリ、

▲ふこ 封戸 上古、位ニツキテ臣下ニ賜ハリシ地方ノ戸口ヲ云フ、官ニツキテ給ハルヲ職封ト云フ、其ノ租ハ半ヲ給シ調庸ハ皆本主ニ給フ、封戸ハ最初親王ノ爲ニ定メラレシガ、後ニ中納言ヲ置カレテ後、準ジテ賜ハリ、後世參議ヲ置カルルニ及ビ又之ニモ給ヘリ、沿革多シ、又嬪以上ニモ品位ニ依リテ給ハルコト祿令ニ見ユ、(拾芥抄參看)

▲ふさつ 布薩 梵語ウポサタ Uposatha 優補婆陀、齋戒日ノ義、「四分律」若說戒日、無能誦者當下如布薩法行籌告白差一人說法誦經餘諸教誡誦、

▲ぶきやう 奉行 上ノ命ヲ奉ケテ執リ行フヲ云フ、上卿ニアタル、轉ジテ幕府ニテ職ノ長タル者ヲ云フ、豊臣氏ノ五奉行、徳川氏ノ寺社奉行、町奉行、御勘定奉行、

御藏奉行ヲ始メ地方官ニハ長崎奉行山田奉行等尙多シ、「玉葉、雜」後白川院かくれさせ給ひにける後の御事を經房卿に奉行すべしよし、

▲ふゆごもる 冬籠 冬ノ寒キ間動物草木ナドノ籠リテアルヲ云フ、「古、冬」雪降れば冬ごもりせる草も木も春に知られぬ花をささける、

▲ふじやう 府生 近衛府衛門府兵衛府及檢非違使廳等ノ下官ヲ云フ、「徒然」府生殿の御馬に候ふ、

▲ふしまちのつき 臥待月 陰曆十九日月ヲ云フ、又、ねまちのつきト云フ、(其ノ條參看)一説二十九日以後ノ月ヲ總稱スト、「源、若紫」ふしまちの月はつかにさし出でたところもとなしや、「平治、一」二十六日夜更けていまだ夜半の事なればふしまちの月もさし出でず、

▲ふしめ 伏目 下ヲ向キテ屈シタル貌、即、ウツムクヲ云フ、「源、浮舟」石山もとまり給ひにさかしといふもかたはらいたければふしめなり、

▲ふししほ 柴 生柴ノ上略語ニテ、只、柴ト云フ程ノ意ナリ、「千載、戀」兼ねてよ、思ひしことよふししほのこるばかりなるなげさせむとは、

▲ふびん 不便 便ナキコトニテ不都合ノ意、轉ジテ不便ノ者ト感ムヨリ、アハレナル者ノ意トナル、不憫ト書クハ當字ナリ、正シクハ慇然ノ字ヲ用キル、「源、夕顔」かきをもちまどはしていとふびんなるわざなりや、「宇治拾、二」捕へしはられやせむずらひをそれど不便に覺えければ、

▲ふせ 布施 佛教ニ云フ五行（布施、持戒、忍辱、精進、止觀）ノ一ニテ一切衆生愛感ノ爲ニ事物ヲ惜マズ施スヲ云フ、財施、法施ノ二種アリ、轉ジテハ單ニ法師ニ施ス物ヲ云フ、「源、若紫」法師のふせまうけの物ども、

▲ふせんれう 浮線綾 綾ノ一種ニテ紋ヲ浮織ニシタルヲ云フ、袍及下製等ニ用キル綾ニアリ、

▲ふせや 伏屋 柴モテ作レル假屋ヲ云フ、しばのいほりト云フニ同ジ、屋根ノ伏シタルヤウナル屋ト云フハ非ナリ、「金葉、秋」ちのづから秋は來にけり、山里の、葛はひかかるまきのふせやに、

▲ふせご 伏籠 籠ヲ伏セテ上ニ衣ヲ被ヒ其ノ中ニ香爐ヲ置キ香ヲ燒キ占ムルニ用キルモノヲ云フ、「宇治拾、三」とのゐるものともほしき衣ふせごにかけてたきものじめ

たるにほひなべてならず、

▲あすみのこと 臥猪ノ床かるもかく、條參看、「徒然」あそろじきあのみしもふすあのことといへばやさしくなりぬ、

▲あすま 衾 臥間ノ物ノ略語、寢タル時ニ身ノ上ニ被フモノニテ、古クハ長サ八尺五寸方形ノモノト云ヘリ紙ナルヲ紙衾ト云フ、「雅亮」御あすまはくれなるの打たたる袖くびなし長さ八尺五寸の物なり、くびの方に紅の練絲をふとらかによりて二筋ならべて横さまにみはりきぬをぬふ、「源、浮舟」御あすまをまゐりてねつる人々あすまじ

▲あすま 襖 臥間ニ建ツル物ノ意、實ハ衾障子ト云フベキヲ略シタル語、今ノ唐紙ニ同ジ、唐紙ト云フハ唐紙障子ノ略語、多ク唐紙モテ張レルヨリ云フ、

▲あすまもん 諷誦文 佛事ニ導師ノ聲ニ揚ケテ頌偈ヲ誦スルヲ云フ、諷誦ハ梵語伽藍Gālayaノ譯語、佛家ノ詩、讚美ノ詞ナリ、「大藏法數」梵語伽陀、此言諷誦謂不頌長行之文直説偈句一如金光明經中空品等是也、「千載、哀傷」人のわざしける導師にて諷誦文よみけるに、

國語文要詳解

▲こと 御前ノ略語、婦人ノ尊稱、後ニハ尊長ヲ呼フ敬語トナル親御兄御叔父御ナド、「大和」ちほいこはきさの宮に少將のごといひてさぶらひけり、

▲ころほひ 比頃 延ノ轉語、頃ト云フヨリモ語勢ヲ緩メテ時間ヲ長ク云フ時ニ用キル、「喜撰式」ニ若詠句時ころほひといふハシトアリ、「源、夕顔」いと忍びてさぶらひころほひより、「伊勢」秋立つころほひに、

▲ごへん 御邊 同輩ニ用キル代名詞、「平治」御邊に大小事を申し承ることとぞきこゆれ、

▲こといみ 言忌 惡シキトヲ忌ミテ言ハヌヲ云フ、俗ノ延喜ヲ祝フニ同ジ、「源、若菜」様様にもの悲しさをかつはゆゆしとこといみして、

▲ことりづかひ 部領使 事執使ノ義、專其ノ事ヲ擔任シ行フ使者ヲ云フ、古代防人ノ徵集差遣、又ハ、相撲節會ニ國國ノ力士ヲ召集スルニ遣ハサル使ヲ云フ、「萬、十九」防人部領使、「年中行事」かたわさてことりづかひのいとさしは、今日のぬさて

國語の部

の、ためとなりけり、

▲ことねり 小舎人 藏人所ニ屬シテ使用セラルル職ニテ、本來六人アリシガ高倉帝ノ御時ヨリ十二人トナレリ、「枕」ことねり、はちひさく髪のうるはしきがすそさばらかに聲をかしてかしてまりてものなどいひたるぞ、りやうりやうしき、

▲ことならは 成ル事アラバ、出來得ルアラバノ意、「源、横笛」笛竹に吹きよる風のことならば、末のよながき音につたへまじ、

▲ことなしが 事無キ風スル意、「古、戀」むら鳥の立ちにしわが名今更にことなしがともしるしあらめや、

▲ことなき 言種 ことのはぐらニ同ジ、物言フ種ノ意、俗ノ言ヒグサニ同ジ、「源、若菜」あけくれのことばにさこえ侍り、

▲ことやう 異様 様異ナルノ意、普通ト甚シク様子ノ變リタルコト、俗ニ變ト云フニ同ジ、「源、總角」ことやうなる女車のまましてかくろへい給ふ、

▲ことごとし 事事シニテ、大事ラシ、「仰山ラシ」ナドノ意、「源、竹川」右大臣は、ことごとし御好むにたつてなき對面を難きをなと宜ひて、

▲ことあび 揚言 特ニ言ヒ立ツルヲ云フ、「萬、十三日秋津島、大和の國は、袖がらと言あびせぬ國、然れども吾は言あびず、」

▲ことさま 事様 事ノ有様、事情ト云フニ同ジ、「徒然」大方は家居にこそことさまは推はからるれ、

▲ことさま 異様 變リタル様ノ意、異様ニ同ジ、「源、少女」殿はことさまに覺しなることさまはしますとも、

▲ことひのうし 特牛 特負ノ牛ノ略語、雄牛ノ強キヲ賞スル稱、「夫木、廿七」ことごとしことひの牛の角のさきのさしあかみるもとるしの世や、

▲ことたし 事甚シノ約語、甚多シノ意、轉ジテ、煩ハシノ意トナル、「源、葵」御ぐしいと長うことたしを引結ひて、「六帖、六」茜刺晝はことたし紫陽花の花のよひらに相見てしがな、

▲ことなし 骨無シノ義、天才ナシ、不風流ナリノ意、粗笨ナドノ字ヲ書ク、「古事記」天性無骨者ニ候間出玄ノ處ヲニ舞ヒ候ヌナリ、

▲ことこのよらひ 五智如來 大日(中央)、寶幢(東)、華開(南)、阿彌陀(西)、不空成就(北)トモ、又阿彌陀、釋迦、藥師、彌勒、大日、トモ、又、大日、阿闍、寶性、彌陀、釋迦、ナリトモ云ヒテ、諸説多シ、「太平、廿六」五智の如來は、鳥瑟を夜の雨に酒せり、

▲ことちとし 骨骨シノ義、骨ナシト語ハ相反シテ意ハ同ジ、無骨ナル狀ナリノ意、木強ノ字ヲ書ク、「土佐、下」舟君のやまとうど、もとよりことちとしき人にて、かうやうの事更にしらさうけり、

▲ことりすまに 悠リズマニノ義、マハ臆詞逢はずしてラ逢はずまにしてト云フ類ナリ、失敗ニ悠リズシテ、俗ノシヤウモ悠モナクニ同ジ、一説ニ悠リズ等ニナラムト云ヘルハ強ヒタリ、「源、若菜」まづみしも忘れぬものをことりすまに、身を投げつべき宿の藤波、

▲ことわだかに 聲高ノ轉語、物言フニ聲ヲ高クシテノ意、「竹取」ことわだかに宣ひと屋の上をる人どものきくにいとまがなし、

▲ことわづくる 聲咳 セキハラヒスルヲ云フ、「空穗、俊蔭」立よりにことわづくり給はば、

▲ごがい 五戒 佛教ニテ守ルベキ戒ノ名、殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒ヲ云フ、
「名義集」茲五戒、超三出三塗、取運載義乃至天教、源、若菜、いし事の力にもよ
て御頂まるしばかりはさみて、ごがいばかりうけさせ給ふ、

▲ごよなし 是ヨリ無シノ略語、此ノ上モオク勝レタリノ意、俗ノ無類飛切ノゴト
シ、格別ニアタル「源、浮舟」あてなる所はかれはいとこよなし、音便言ニこよなう
ト用キルモアリ、

▲ごよく 五欲 佛教ニテ人ニ感ズル色、聲、香、味、觸、法ノ五情ノ所欲ヲ云フ、又、
五塵トモ云フ、又、財欲、色欲、飲食欲、名欲、睡眠欲ヲモ云ヘリ、「父子相迎、上」只穢
土の五欲をまたなまものにして、

▲ごよみのちろ 曆ノ軸 古代ノ曆ハ卷物ニ作ラレタルヨリ其ノ軸ヲ云フ、歌ニハ
曆ノ終ノ意ニ用キル、「夫、十八」行く年を曆のちろにまきよせて、老いはせにける身
を蘇くかな、

▲ごたい 五體 頭ト兩手足ヲ云ヒ後ニ總體全身ノ意トス、「枕、六」むろごめによ
給へといふをごたいごめにとなむいひつるといひて笑ふ、

▲ごたい 五大 佛經ニテ天地ノ萬物ヲ成生スル原素ナル地水火風ノ四大ニ空ヲ加
ヘタル稱、「弘決」從五塵ニ生五大、謂四大及空、塵細大塵、今塵爲大從塵生大、

▲ごたち 木立 木立ノ轉語、樹木ノ生ヒ立チタル地ヲ云フ、中古以後多ク前栽ノ
作方ニツイテ云フ、「源、若紫」庭のごたち池のかた、「徒然」木立ものふりて、

▲ごれう 御料 飯ノ敬語、轉ジテ武家ノ世トナリテ禁裏仙洞等ノ御領地ヲ云フ、
「長門平家、十」御料はまゐりたるかといへば、

▲ごそ 中古ニ人ノ名ニ添ヘテ用キル敬語、今ノ何様ト云ハムガゴトシ、尙、古クハ
くそト云フ靈ノ轉語人ヲ崇メテ云フ意、係詞ノことをト同語トスルハ非ナリ、「空穂」た
だこそ、あてこそ、源氏ニ北殿こそ、右近の君こそ、又宇治拾遺ニ地藏こそ、花こそ今
昔ニ父こそ、「ナド多シ、

▲ごそはゆし 身モコソグラルガゴトキ感ヲ受クルヲ云フ、俗ノコソグダツイニ
同ジ、「著聞、十」この僧こそはゆさにたへぬものなりけるにや、

▲ごそで 小袖 袖ノ大袖ニ對シテ內衣ナル單衣、袷衣ナドヲ云フ、後世ハ單ニ絹
布ノ綿入ノ稱トス、「義經紀、一」白き小袖一重に唐綾を着重ね、「盛衰、廿」兼隆紺の小

勅に腹巻着て、

▲ごつばふ 骨法禮儀作法之道ヲ意ハシ盛衰、士衛府の官をばがす侍は種々の

心など申し行ひつること無下に骨法を知らざりけり、

▲ごつせんたん 牛頭栴檀佛經ニ云フ香牒ノ名、能ク病ヲ除クト云フヨリ義ヲモ

テ與藥ト譯ス、華嚴經摩羅那山出栴檀香一名曰牛頭、若以塗身設入火坑火不能

燒、源、東屋、やくわうばんなどにもとりわきて宣へるごつせんたんとがや、

▲ごなす 御惱御ナキミシ意、尊者御病ヲ云フ敬語、〔榮、月冥〕御惱まことに

かみじければ宮だち御方方普涙を流し給ふもあるかた、

▲ごんぼんか 混本歌、旋頭歌ニ同ジ、其條ヲ見ヨ、〔拾玉、四〕うきものと我が心を

ばらばらしめぬ、まるかひはなむ君を久しくまもれ、

▲ごんがら 於羯羅梵語キツカラ、奴隷ノ義ナキ、不動明王ノ脇士ノ名

よる、各掌シテ二股杵ヲ横ニ大指ニ狹ク童子ヲ云フ、制吒迦、梵語チカカ、

▲ごんげん 權現佛菩薩等ノ衆世濟度ノ爲ニ權ニ此ノ世ニ現セルヲ云フ、權化、

化身ニ同ジ、中古以後本地垂跡ノ説ニ依リ權現ヲ神號トセル熊野權現東照大權現ノゴ
トシ、今ハ停メラレタリ、〔最勝王經〕世尊金剛體權現ニ於化身、〔太平、六〕傳へ聞く三
所權現は是伊弉諾伊弉冉尊の應作なり、

▲ごんかき 紺掻 紺ニテ物ヲ染ムル工人ヲ云フ、紺ハ藍ヲ掻キ立テテ染ムルヨリ
云フ、又、かうかさトモ云フ、今ノ紺屋ナリ、〔拾玉、四〕ごんかきの意、ごんかきと
どにほしてせによくほるやこの世なるらむ、

▲ごんく 金鼓 佛家ニテ用キル樂器ノ名ひらがねト云フ、今ノ伏鉦ノ類ナリト云
フ、後ニハ今ノ鰐口ヲ云フ、〔枕、六〕侍めきて細やかなる物など具して、ごんくうのこ
そをかしかれ、〔壬生寺鰐口ノ銘〕奉ニ鑄願一金鼓一口、

▲ごんてい 健兒 古語ちからびト云フ、衛士ノ類、後世ノ中間ノゴトキキキ
云フ、又、ごんていわらはアリ、

▲ごんびら 金毘羅 梵語クンビラ Kumbhira、王舎城守護ノ神ノ名、我が邦ニ
本地垂跡説行ハレテヨリ、讃岐國象頭山ニ翠平トテ、大己貴命ヲ祀レル、附會シ神像
ヲサハ作リシカド今ノ御代ニナリテ其ノ舊ニ復セシメラレタ、〔玉樽、五〕彼象頭山と

いふは、彼山の別當金光院正傳の祕書といふ物を鈴木隆彦といふ人に借りて見たるに元は琴平とて大物主の神を祭れりしを佛書の金毘羅神といふに形勢威應似たる故に混合して金毘羅と改めたるよしを記せりなほ此の後に白峯に坐す崇徳天皇の御靈を配祭せるよし世の人普くいふはさもありなむそは其靈應ありし事實どもを聞あつめ考ふるに崇徳院の御稜威に思ひ合さるる事の多かれば、幽にむねと金毘羅の名を負ひ給ふは此の御靈にや、

▲このかみ 長子 子ノ上ノ義、第一ノ兄ヲ云ヒ又姉ヲモ云フ、轉ジテ年長ナル人ヲ云ヒ、又、氏上ヲ云フ、「應神紀」長子「源、紅葉賀」四年ばかりはこのかみにはすれば「天智紀」氏上、

▲このきみ 此君 竹ノ異名、晋ノ王之欲ガ竹ヲ愛シテ何可一日無此君邪ト云ヘルニ起コル、「枕、七」物もいはてみすをもたげて、そよるとさしいるはくれ竹の枝なりけり、あゝ、このきみにこそといひたるをききて、

▲このもかのも 此面彼面 こなたかなたニ同ジ、アチコチト云フモ同ジ、「古、東歌」つくば山このもかのもにかげはあれど君が御かげにますかかげはなし、

▲こきませせて 搔雜セテノ轉語、搔ハ例ノ添語、打雜セテニ同ジ、「古、春」見渡せば、柳櫻をこきませせて都を春の錦なりける。

▲こくらく 極樂 佛説ニ、阿彌陀如來ノ報土ニテ西方十萬億土ニアリ佛果ヲ得タルモノノ生マル國ノ名、又安養、安樂、蓮華藏世界、無量清淨土無量光明土ト云ヒ梵語ニ須摩提、妙樂ト譯セリ、「阿彌陀經」爾時佛告長老舍利弗、從是西方過十萬億佛土、有世界名曰極樂、其土有佛號阿彌陀佛、今現在說法、舍利弗、彼土何故名爲極樂、其國衆生無有衆苦、但受諸樂、故名極樂。「新古、釋教」吾だにも、まづ極樂に生まれなば知るも知らぬも皆むかへてむ、

▲こま 護摩 梵語 ホーマ Homā、梵燒、又火祭ノ義、佛法ニ、火ヲ燒キテ佛ニ祈リ一切惡事ノ根本ヲ燒滅スルヲ云フ、天台眞言ノ祕法アリ、「拾玉、四」護摩の火の、灰なき灰に、種まきつ、まきつる種は、うすきものは、「徒然」護摩たぐといふもわろし、修する護摩するなどいふなり、

▲こまいぬ 高麗犬 獸ノ名、清涼御帳臺ノ前、又ハ神社ノ前等ニ木石ニテ作りタル像ヲ獅子ノ像ト相向カシテ鬼魅ヲ避クハ爲トテ置カレ、此ノ獸ハ最初高麗ヨリ

渡セルモノト云フ、又、狛犬ト書ク、獅子ハ口ヲ開キ狛犬ハ口ヲ閉ジ、遊仙窟牀頭
玉獅子(注)以玉刻爲獅子安牀頭遂鬼魅、枕五宮はじめのさほりしてさき犬
犬床子などもてまゐりて御帳の前にしつらひす、徒然丹波に出雲といふ所あり御前
なる獅子狛犬をむきてうしろさまにたちたりければ、

▲とけい 御禊 禊ノ敬語、天皇大嘗會及賀茂齋院等ナルニ云フ、祭日蔭大嘗會
御禊などいみじうよにいそぎたちにはけり、狭四賀茂の祭の程にもなりぬれば御禊の
御せんどもつかひなど定めさせ給ふ、

▲こけら 柿 木ヲ斧ニテ研リテ出デタル木片、今ノ骨波ト云フモノナリ、倭名
五柿古介削朴也、謂削木之朴所出細片曰柿也、

▲こけらぶき 柿茸 前條ノ語ヲ轉シテ云フ、但、今ノ檜ヒノキ等ノ材ヲ薄ク削キテ薄
キ板トシ、板屋ヲ葺クニ用キル、俗ノ屋根板、著聞十この堂を修理しけるにもと
こけらぶきにありけるが、

▲こふ 國府 國府ニ同シ、古代ニ每國、國司ノ國衙アリシ地ヲ云フ、後ニ府中ト
モ云フ、宇治拾十二國府にかへり來て、

▲ごふ 劫 梵語 コフバ Kopa、劫波、劫波ノ畧語、分別時節ト譯ス、印度ノ古
代ニ時間ノ極メテ長キ稱、萬劫、永劫ナド、祖庭事苑梵云劫波此云時分云云長
時、又、日月歳時數謂之時成住壞空謂之劫、拾哀傷ごふをのむ、みたらし川の龜
なれば法の浮木にあはぬなりけり、

▲ごふ 業 佛說ニ人ノ事ヲ作キ其ノ果ノ必現生スル事業ヲ云フ、又引業ト云フ、
俱舍論若由宿世善業引發生於人中則得珍寶豐足多受快樂若由宿世惡業引
發生於人中則感貧窮困乏受諸苦惱是名引業、

▲ごころば 心葉 新嘗會、神今食等ノ時、供神ノ官人ノ冠ノ巾子ニ添ヘテ立ツル
飾花ニテ、貝製、金銅製、結花製等アリ、其ノ花ハ梅、藤、山吹等トス、○又、贈物ニ
添フル飾ヲモ云フ、其ノ製、帛ノ絹ニ銀ノ梅花ヲ五所ニ附ケテ總角ノ絲ヲ附ケ、元々同
心結ヨリ起レリト云フ、榮初花管一具に薰物入れてつかはす、心葉は梅の枝な
り、

▲ごころばへ 心操 心延ココロスノ義、心ヲ用キル意ニテ心掛ト同シ、○又、其ノ心ヲ用
キタル趣致ヲ云フ、源桐壺御ごころばへありてもどろかせ給ふ、源帚木木の心は

へなどさるかたにをかしくしなしたり、

▲こころほせ 心馳ノ義ニテ、心ノ活動、思ヒ込ミナドノ意、「源、東屋」我が君をば心ばせありもの思ひ知りたらむ人にこそ見せ奉らめ。

▲こころほくし 心惜 心ニ惜シト思フ程善シノ意、俗ニ惜ラシイ程ヨイト云クニ同シ、「空穂、樓上」いとあてにけはひなども式部卿の君よりも心にくくはづかじげにものし給へり、

▲こころほそし 心細 頼ミ申妻ナク切ニ悲シノ意、心丈夫ノ反、「徒然」遙なる苦の細道を踏み分けて、心細く住みなしたる庵あり、「源、夕顔」心細き様にははしますに、

▲こころとまめく 心ノ物物ト盛ニ起ル意ト、胸ノ鼓動シテ騒々(多ク驚ク時)意トノ二意アリ、文勢ヲ案ジテ區別スベシ、「枕、二」心とまめさする物、雀のこがひ見避ばする所の前わたたりたる、「源、寄生」珍らしく嬉しきは、心とまめさもしぬべし、

▲こころづから 心之從ノ義、吾ガ心ヨリシテノ意、「後、春」風をたは待ちて空花の散りなましこころづからにうつるふがらさ、

▲こころづかひ 心道 心ヲ用キル意ニテ、俗ノ氣ヅカヒニ同シ、こころしらひモ同シ、「空穂、初秋」ねたうまけ奉りぬるかをなこころづかひしてつかうまつらましを、

▲こころづなし 心盡 思ラ盡ス意ニテ俗ノ氣ヲ採ムニ同シ、「古、秋」木のまより、もりくる月の影見れば、心づくしの秋は來にけり、

▲こころづきなし 心愛無シノ義ニテ、思フ情ノ移ラヌ意、俗ノスカナイニ同シ、「大和」さて心づきなしとや覺しけむもの空になむ渡り給ひにける、

▲こころうし 心愛シノ義ニテ、氣ニカカルノ意、「源、紅葉賀」若き女房などは心うしと耳とどめけり、

▲こころのやみ 心闇 愛情ノ深クシテ理非ノ區別ヲモ忘ルルニ至ルサマヲ形容セル語、深キ愛情ノ意、「古、戀」かきくらす、心のやみに惑ひたき、夢現とは世人定めよ、

▲こころおとり 心劣 見下ゲラルノ意、「枕、十一」吾が詞にもてつけていふが、心おとりする事なり、

▲こころおくる 心ノ後ルル義、物ニ畏ゲテ臆スルヲ云フ、「源、帚木」詠み出でたるながなが心ぢくれて見ゆ

▲こころぐるし 心苦 心ニ苦シト思フ義、氣遣ハシノ意、○又、氣ノ毒ノ意ニ用キラル、「枕」思はむ子を法師になしたらむと心ぐるしけれ、「源、初音」さる織物の掛を着給へるいと寒げに心ぐるし

▲こころどと 心太 海草の名、大凝菜、古語こるもは、俗ノところてんナリ、「倭名、本」大凝菜、本期式云、凝海藻、古留毛波、俗用ニ心太二字ニ古々呂布止とこるてんハ心太ノ訛言ナリ

▲こころあて 心當 吾ガ心ニ推シ量ルヲ云フ、推測ノ意、「古、秋」心あてに折らばや折らむ初霜の置き感はせる白菊の花

▲こころゆる 心行 心ノ行クニ思フヤウナル意、「源、紅葉賀」御いらへもささえねば、心ゆかぬなめりといとほしくおぼす

▲こころしむ 心知 延音言、心スルニ、俗ノ氣ヲ附ケル意、こころづかひニ同ジ、「源、東屋」ふりはへさかしらめきて心しらひのやうにもはれ侍らむ

▲こころひとつ 心一 心ヲ其ノ事物ニノミ注グコトニテ、心ト云フニ同ジ、ひとのこころトハ異ナリ、「古、秋」女郎花、秋の野風に打靡き心ひとつを、誰に寄すらむ

▲こころもとなし 心黙止無シノ義ニテ、心ノイラレテ黙止シテ居ラレヌ意、俗ノ待遠ナリノ意、轉ジテオボツカナシノ意、「枕、三」いかならむと心もとなく思ふほどに、采女八人、馬に乗せて引出でたり、「枕、三」花びらのはしにをかしきにほひこそ心もとなくつきためれ

▲ここち 心地 佛經ノ語、心地ノ湯桶讀セルモノ、三界ハ心ヲ主トスルコト天地ノ萬物ヲ生ズルガコトシト云フニ依ル、俗ノ心持、氣分ナドノ意、「要覽上」心地者佛言、三界中以心爲主、衆生猶天地五穀五果從大地一生如是心法生世出世善惡五趣三乘三界唯心故名心地、「貫之」大空は、曇らざりけり、神無月、しづれこちは吾のみぞする

▲ここたぐ 許多 ここた、こきたニ同ジ、多數ノ意、俗ニシヨタマト云フ、「萬、十七」天離るひなともしるくこたぐも、まげきてひかも、なぐる日もなく

▲ここら 許多 こだニ同シ、多數ノ意、「古、賀」珍らしき聲ならなくに、郭公、
ここらの年をあかずもあるかな、

▲このへ 九重 楚辭ニ天之門兮九重トアルヨリ、天ノ高キニ比シテ禁中ノ別稱
トス、「後拾、秋」朝まだき八重咲く菊のこのへに、見ゆるは霜のおけるなりけり、
「徒然」哀へたる末の世とはいへど猶九重のかみさびたる有さまこそよづかずめてたき
かぎりとはおぼえしか、

▲ごさんなれ こそ有るなれノ約略語、何何ニテ確ニアリト決定スル語、誤リテ御
參なれノ義トシ俗ノサア來タレノ意トスルハ極メテ非ナリ、「保元、一」さては一家の
郎等ごさんなれ、汝を射るにあらず大將を射るなり、

▲こしをれ 腰折 調ノトトノハ又歌ヲ云フ語、短歌ノ第三ノ句ト四ノ句ト繼カヌ
ヲ云フ、○又、轉ジテ自身ノ歌ヲ謙遜スル語、蜂腰ト書ス、「源、東屋」こしをれたる
歌あはせものがたりかうまをし、

▲こしざし 腰差 賞與ニ贈ル卷帙ヲ云フ、賜ハリシ者ノ腰ニ差シテ拜シテ退出ス
ルヨリ云フ、「續古事、二」盃酌管絃ありて、人人の祿隨身のこしざしまてたびにけ

り、「枕、四」腰にさしてまかてぬ、

▲こまくら 薦枕 高ニカガル枕詞、薦枕ハ殊ニ高クスルヨリ云フドゾ、「武烈
紀」こまくらたかはしすぎ、

▲ごせち 五節 古代、陰曆十一月ノ丑日ニ宮中ニテ行ハルル女樂ヲ云フ、五節ノ
稱ハ夫武天皇ノ御故事ニ據ル後ニハ大嘗會ノミニ行ハル、「續紀、十五」天平十五年五月
癸卯宴群臣於内裏、皇太子親舞五節、

▲ごせん 御前 古代ニ女人ノ名ノ下ニ附ケテ用キシ敬語、其ノ人ノおまへノ人ニ
ト云フヨリ起コル、又、其ノ女ヲサシテモ云フ、巴御前靜御前ナド、略シテ御前トモ云
フ、「宇治拾、十」御せんたちはいたく笑ひ給ひて、わび給ふなよ、

え

▲えいきよ 郢曲 神樂催馬樂其ノ他今様風ノ謠物ヲ美メテ云フ語、宋玉ガ對楚

王問ノ文ヨリ出ヅ、「徒然」梁塵秘抄の郢曲の詞こそ、又、あはれなる事は多かめれ、

▲えはち 衣鉢 佛教徒ニテ釋迦ヨリ世世相傳シ來タレリト云フ袈裟ト應器トヲ

云フ、禪家ニ出デタル語、達磨携ヘテ支那ニ入り慧可ニ傳フト、正宗記ニ見エタリ、轉ジテ宗教學藝等ニテ蘊奧妙義ヲ師ヨリ弟子ニ傳フルヲ云フ語トナル、衣鉢を傳ふ、」ナド云フ、

▲えに 〇ハ善ノ義、能クノ意、口語ニヨリ何何セヌナドノヨリニ同ジ、ハ打消ナルぬノ古語いへばえにハ言へバ能ウ言ハレヌノ意ナリ、「源、須磨」中納言の君いへばえに悲しう思へるさまを人知れずあはれとおぼす、

▲えに 縁ノ古音、ゆかりニ同ジ、「源、夕顔」夕露に紐解く花は玉鐙の使に見えしえにこそありけれ、

▲えにし 縁ノ音ニ強意ノ助詞ナルシヲ添ヘタルガ一語ノゴトクナレルニテえにしあればハ「縁ガソレアレバ」ノ意ニ解スベシ、後ニハ單ニ縁ノ一字ノゴトキ意ニ用キルニトアリ、「後撰、戀」深緑染めけむ松のえにしあらば、薄き袖にも波は寄せてむ、

▲えほらし 鳥帽子 鳥ハ黒キ意ニ借リタル字ニテ、音ニアラズ、音ハ悉ナリ、黒キ絹ニテ作レル帽子ヲ云フ、後ニハ紙ニテ作り堅ク漆塗ニシテ、立鳥帽子風折鳥帽子侍鳥帽子ナド種種アリ、貴人ハ冠ノ畧禮ノ時ニ用キ、他ハ禮冠トセリ、「著聞、十」經家、水干

の袖くくりて袴のそば高く挟みてえほらしがけして、

▲えたち 課役 枝發ノ義、枝ハ足ヲ云フ、上古ノ壯丁ハ脚力ヲ以テ奉仕スルヨリ名ヅク、壯丁ヲ一般ニ徵發シテ公役ニ就カシムルヲ云フ、役ヲ古訓ニえたちト云フハ當タラズみいくさトヨムベシ、「萬、十六」檀越や、しかも言ひを、てこらわが課役はたらば汝も泣かまし、

▲えぞ 蝦夷 惡畏ノ義ニテ開明ノ人ヨリ未開ノ人ノ強暴ニシテ忌ミ畏ルベキヲ指シテ云フ稱、古ク我が本土ニ住居セシ人ヲ云フ、えみし、えびすナド皆同ジ、舊説ニ贅多クシテ蝦ニ似タレバ名ヅクト云ヘルハ取ルニ足ラズ、「新古、雜」みちのくの、いはてしのぶは、えぞしらぬ、かさつくしてよ、壺のいしぶみ、

▲えならず 能ウ言フコトモナラズノ意、優レテ善キヲ云フ、極妙、微妙ナド云フニ同ジ、「徒然」笛をえならず吹きすさびたる、「源、紅葉賀」菊のいろいろうつろひ、えならぬをかざして、

▲えんだう 筵道 蓆ヲ長ク敷キテ往來スルモノノ道トシタルヲ云フ、「枕、六」未の時ばかりに、えんだう参るといふ程もなくうちをよめさいらせ給へば、

▲えんま 閻摩 梵語 Yamā 一雙ノ意、俱生ノ神ニテ其ノ妹ト共ニ死靈ヲ司ル神ナリ、又閻摩羅 Yimmaraja ヲ中略シテ閻羅ト書ク、靜止又遮止ナド譯ス、能ク造惡者ノ罪ヲ止ムルヲ云フ、「要覽」上「梵音閻摩羅此云遮、謂遮令不造惡、故瑜伽論問、餘摩王爲能損害爲能饒益乃至脫那落迦、是故餘摩由能饒益諸衆生故名法王」

▲えんぶ 閻浮 梵語閻浮提、Yambu-dvīpa 閻浮洲ノ略語ニテ印度大陸ヲ云フ、又、膽部洲トモ云フ、「西域記」南膽部洲舊曰緣浮提洲、又曰剌洲訛也、「涅槃經」於此緣浮中現轉法輪、

▲えんぶたい 閻浮提、梵語南瞻部洲ト云フ、前條ノ語ノ原語、印度ヲ云フ、閻浮ハ樹ノ名、提ハ洲ノ義、

▲えんぶたいこん 閻浮檀金 梵語 Yambu-nada 金ノ名、閻浮提ハ前條ノ語ニ同シ、此ノ洲ト上ニ樹アリ林中ニ河アリ河中ヨリ生ズル金ヲ云フ、「智度論」林中有河、底有金沙名閻浮檀金、「觀經」無量壽佛住立空中觀世音大勢至是二大士侍立左右光明熾盛不可具見、百千閻浮檀金色不得爲比、

▲えんぎ 緣起 因緣生義ノ義、神佛ノ草創ノ由來、又ハ其ノ靈驗等ヲ語リ傳フルヲ云フ、轉ジテ其ノ事由ヲ記セル書物ヲモ云フ、俗ニ起緣よし緣起わるしナド云フハ更ニ由來ノ義ノ轉ジテ、兆ノ意トナレルナリ、

▲えんする 淵醉 深醉ノ義、古代ニ五節ノ後、諸臣ヲ殿上ニ召サレテ酒宴セシメラルルヲ云フ、院方官方ニモアリ、「左京大夫」五節ノ比、霜夜の有明に宮の御方のえんするにて、「公事根源、新嘗」寅日は殿上の淵醉あり、朗詠今様など歌ひて三獻はてて亂舞あり、

▲えやみ 疫病 えはえだち(課役)ノエト同意、一國全般ニ流行スル病勢ノ熾ナルヲ課役ニ廣ク徵集セラルルガゴトキニ比シテ云フ語、今流行病ト云フ意ナリ、又瘧ヲモえやみト云ヘリ、疫ノ字音ト云フハ非ナリ、「宇治拾、四」その年の村の在家悉くえやみをして死ぬるもの多かりけり、

▲えきれい 驛鈴 上古、官司ノ諸國ヲ往來スル時、驛ノ人馬ヲ出ダス公用ノ符トシテ渡サルル鈴ニテ、親王以下初位等、其ノ刻數ニ差アリ、「公式令」親王及二位驛鈴十刻、三位以上驛鈴八刻、四位驛鈴六刻、五位驛鈴三刻、初位以下驛鈴二刻、其六位以下隨事増減不_レ必限數、

▲えみし 蝦夷 忌大人ノ略轉語、えぞニ同シ、「神武紀」えみしを一人、百なひと、人はいへどもたむかひもせず、

▲えびら 箬 矢ヲ盛リテ右ノ脇ノ下ヨリ背ニカケテ負フ武器、此ノ器昔ハ養蠶ノ時ニ、蠶ヲ入レテ繭ヲ作ラシムル具ノ蠶篋ヨリ考ヘテ作り出デタル者ト云フ、古代ハ箬ヲヤなぐひト讀ミシガ中世ヨリえびらト云ヘリ、古制ニ逆類箬、柳箬、竹箬等アリ、

▲えびす 蝦夷 えみしノ訛言、えぞニ同シ、後ニハ野卑ナル者ヲ指シテ云フ語、「伊勢物語」女限りなく、めてたしと思へど、さがなきえびす心を見てはいかがはせむ、又外國ノ寇ヲモ云フ、

▲えもいはず えハ善ノ義ニテ、能クノ意ナルヲ得ト當字スルモアルヨリ、得ノ義トシテ、言フヲ得ズナリトスルハ非ナリ、いはれずノれヲ省キタルモノナリ、サテ其ノ下ハ必打消反語ニ應ズ、「空穂、祭使」舍人三十人えもいはず、装束かせて、「源、明石」えもいはぬ入江の水など繪にかくは心のいたり少なからむ、

▲えせもの 似而非者 えせハえを(蝦夷)ノ轉語ニシテ、卑シキ意ニ用キ、又、實ノ狀シテ然ラヌ、即、似テ非ナルノ意トシテ接頭語ニ用キラル、えせ法師、えせ連歌、えせ

受領」ナド、「保元、上」えせものとして、親に不孝せられしがたまたま勘當ゆるされし身の、

て

▲ていたらん 爲體 體たるノ延音言、容子、有様ナドノ意、「太平、五」いやいやこの城の體たらん一日二日には落つまじかりけるぞ、

▲ていさん 庭訓 にはのをしへトモ云フ、父ヨリ子ニ對スル教ヲ云フ、「太平、十六」正成是を最後の合戦と思ひければ嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを思ふ様ありとて、櫻井の宿より河内へ返し遣はすとて、庭訓を殘しけるは、

▲てへ と言へノ約轉語、歌ニ多ク用キラル、「古、雜」今更に、訪ふべき人もおもほえず、八重葎して、門させりてへ、

▲てへん 天邊 兜ノ鉢ノ頂ヲ云フ、巔邊ノ音ナリト云フ、俗ニ山樹木等ノ絶頂ヲ云フ稱、「太平、五」かぶとの天邊綿囃のはつれより、

▲てだれ 手足ノ轉語、手ニ熟シテ巧妙ナルヲ云フ、「平家、七」てだれにねらうて射まどにこそ候ふらめ、

▲てづつ 手漣ノ義、手ノ自由ニ活カヌ意ヨリ、爲ス事ノ進歩セザルヲ云フ、俗ノ不調法ニ同シ、手筒ハ當字ナリ、「紫日記」一といふ文字をだに書きわたし侍らざいとてづつにあさましく侍り、「新猿樂記」裁縫甚以手筒也、

▲てづくり 白絲布 手作布ノ略語、婦女ノ手織セル布ヲ云フ、「萬、十四」玉川に晒すてづくりさらさらは、何ぞこのこの、ここだかなしけ、

▲てら 寺 百濟語てらノ訛言高麗語でる今ノ韓語ちよると云フ、或ハ云フ、金堂ヲ莊嚴ニ造レルヨリ其ノ光ノ麗ハシキニ取り光ノ義ナリト云フ、佛ヲ祀リ僧ノ居ル所ヲ云フ、印度ノ僧伽藍摩ニ當タル、「推古紀」二年春二月丙寅朔詔皇太子及大臣令興隆三寶是時諸臣連等各爲君臣之恩競造佛舍即是謂寺焉、

▲てらふ 街 照爲ノ義、世ニ顯ハシテ誇リ示ス意、俗ノ見セビラカスニ同ジ、「萬、十八」針袋、帯つけながら、里毎に、てらひあるけど、人も咎めず、

▲てんぼふりん 轉法輪 佛ノ教法ヲ説キテ邪見ヲ破シ正道ヲ開クヲ輪王ノ能ク邪ヲ摧キ能ク安ズルニ喩ヘタル語、三轉法輪ノ名アリ「大藏法數」三轉法輪者、以苦集滅道四部諸之法三番而説、名爲三轉世間車輪則有摧碾之用佛之説法則能摧碾衆

生一切惑業故名轉法輪、「拾玉」難波津や古き昔の葦垣のま近きものを、轉法輪所、

▲てんとう 纏頭 歌舞スル者ニ、縁トシテ衣服ヲ頭ニ纏ウテ贈ルヲ云フ、後世ニハ金鏡ヲ與フ、「著聞、十」敦延に方人纏頭せざりければ、

▲てんぢく 天竺 梵語シンドウ Sindh 身毒、辛頭ノ訛言、今ノ印度ヲ云フ、辛頭ハ元來、印度ノ川ノ名、即今ノインダス河、波羅門文明ノ中心タリシ地、遂ニ總稱トナル、「智度論」天竺國法名諸好物皆爲天物、

▲てんがい 天蓋 佛像ノ上ナドニ蓋ノゴトクニテ飾ヲ垂レタルモノ、又、柄ノ長ク曲リタル先ニモ附ケタルアリ、葬具ニ棺ヲ蓋フニ用キル、後ニ虛無僧ノ編笠ノ名ニモ云フ、「橋窓茶話」喪禮用ニ天蓋燈籠者唐山季世之俗禮僧家之事、

▲てんか 殿下 王太子親王諸王等ノ名宛ノ下ニ、尊號トシテ用キル語、中世ヨリ關白ニモ云フ、「西陽雜俎」秦漢以來於天子言陛下、皇太子言殿下、將言殿下、使者言節下、殿下、二千石長吏言閣下、父母言膝下、通類相呼言足下、○又ハ關白以上ノ人ノ代名詞トシテ用キラル、「平家、一」殿下の御出ともいはず、

▲てんがく 田樂 古代ハ農人ノ耕作ノ勞ヲ慰スルガ爲ニ、鼓、笛、編木等ノ樂器ニ

奏セシヲカシキ歌舞、「樂、御裳着」田樂といひてあやしきやうなるつづみ、腰に結ひつけて笛吹きささらといふものつゞみささらの舞してあやしみの男ども歌うたひて、こちよげに誇りて十人ばかりあり、○又、後ニハ法師ノ業トナリ鎌倉室町ノ時代ニ盛ニ行ハタル一種ノ舞、高尾、腰鼓、銅鉦子編木等其ノ技種種アリ、「洛陽田樂記」永長元年之夏洛陽大有田樂之事、初起自閭里及於公卿、○今ハ田樂豆腐ノ略語、「和訓栞」俗間豆腐の製に田樂といふは田樂法師の竿によりて踊る貌に似たるをもて名を得たりといへり、

▲てんま 天魔 魔ト云フニ等シ、魔ハ梵語マール Māraノ略語、殺者、能奪命、障ナド譯ス、善事ニ障害ヲ與フル鬼類ノ稱、四魔五魔十魔等ノ目アリ、天魔ハ四魔ノ内ニテ欲界第六天ナリ、波旬トモ云フ、波旬ハ惡ノ意ナリ、「諸曲、安宅」いかなる天魔鬼神も恐れつべうを見えたりける、

▲てんこつ 天骨 人トナリ、生レツキナドノ意、又、機巧ノ意トモナル、「靈異記」中「天骨邪見不信三寶」(注)天骨、比止止那利、「宇治拾」一「とく舞へといへば先の翁よりは、天骨もなくあるある奏てたりければ、

▲てんじやう 殿上 禁中ノ清涼殿ノ上ナル殿上ノ間ノ略語、殿ハ本音てんナレバてんト讀マヌヲ法トス、「源、帚木」日たけて、各殿上に參り給へり、

▲てんじやうびと 殿上人 四位ニ叙セラレテ昇殿ヲ許サレタル官人ヲ云フ、くものうへびと、雲客ナド云フ、「源、若菜」つぎつぎの殿上人は簀子にわらうだ召して、

▲てんしゆ 天主 城ノ本丸ノ中ニ特ニ高ク建テタル物見櫓ヲ云フ、織田信長、耶蘇教ノ神天主ヲ櫓上ニ祀リシヨリ云フト云へり、國主ノ居城ニ殿主、將軍家ニテ天守ト書クト云フ説アリ、「書言字考」殿守又作天守、松永久秀於和州多聞城造望樓一名曰殿守、天正四年織田信長取則於彼建殿守於江州安土城、「甲子夜話」天守、以前は天主と書きて櫓の上層に天帝を祭ることとぞ、然るを上杉謙信天主の稱を惡み、これを天守と改め、須彌の天主は毘沙門なりとて、これを祭りしより今皆天守と書くなり、

▲てうど 調度 身近ク用キル具ヲ云フ、什器道具具足ニ同シ、正シクハてうたくト云フヘキヲ古クヨリ誤讀セリ、道具ハ佛家ニテ云ヒ調度ハ俗家ノ用語ナリシガ後ニ混用セリ、「源、帚木」うるはしきてうどの飾りとする、○又、專、武家ニテ弓矢ノコト

ニ云フ、

【て】二五四

- ▲てうどがけ 調度懸 又てうどがけト云フ、鎌倉將軍ノ頃ヨリ將軍參内等ノ折ニ行粧ヲ正サルル時、器量アル者ヲ撰ミ、將軍ノ弓矢ヲ帶セシムル役人ヲ云フ、轉ジテハ、箆ノ大ナルガゴトキモノニ弓一張ツツヲ左右ニ立テ、後ニ色色ノ矢ヲ並ベテ負ヒ行クヤウニシタル物ヲ云フ、「義教公御元服記」調度懸一人號ニ胡録負、
- ▲てふず 調 古代ノ祈禱法ニ佛力ニ頼リテ怨敵邪祟等ヲ降伏セシムルヲ云フ、調伏ニ同ジ、「枕、九」てはき物の怪てうじたる験者、
- ▲てうもく 鳥目 錢ノ異名、宋ノ泰始年中ニ鑄タル錢ハ圓ク中ノ孔ノ方ナルヲ驚眼鏡ト云ヘル起コリテ、普通ノ孔アル錢ノ異名トナレリ、
- ▲てめ 出居 いてるニ同ジ、其ノ條ヲ見ヨ、「源、東屋」まらうどの御てゐるさぶらひとしつらひさわけば、
- ▲てまさどり 手弄 手真探ノ義、手ニテ弄ブ意、「枕、九」扇をてまさぐりにして、番は誰が書きたるをなど宣ひて、
- ▲てけ 天氣 ていけノ約言、天氣ニ同ジ、「土佐、上」夜更けて、西東も見えずして

てけの事楯取の心に任せつ、

▲てふ と言ふノ約轉語、(てへノ條參看)、「竹取」かくや姫てふおほぬす人のやつが、

▲てぶり 手風 風俗ノ風ノ字ニ當タレド風俗ノ二字ヲ用キタリ、「萬、五」天さかゝる、鄙に五とせ住ひつつ、都のでぶり、忘らえにけり、「方丈記」都のでぶり忽に改まりて只鄙びたる武士に異ならず、

▲てて 父ノ轉語、其ノ意同ジ、血血ト同音ナルヲ避ケタルナラム、「狹、三」宮の御前の御男ぞ、されば、姫君の御ててにこそあなれ、

▲てのすまに 手真數ノ轉語、手ヲ放タズノ意、「萬、八」さみが爲、吾が手もすまに春の野に抜ける芽花ぞ、召して肥えませ、

▲てすさび 手遊 手進ノ義、手ニテスルナグサミヲ云フ、「伊勢」前栽などの、をかしかりけるを、花をなむ、手すさびに結びたりける、

あ

【あ】二五五

▲あいだちなし 間隔無シノ義、遠慮ノナキヲ云フ、ないだてなしニ同ジ、「源、寄生」世をおもひ給へみだることのみなむなりたるとあいだちなくぞ、うれへたまふ、

▲あいなだのみ 合無頼ノ義ニテ甲斐ナキ頼ヲ云フ、「源、帚木」年月を重ねむあいなだのみは、いと苦しうなむあるべければ、

▲あいなし あひなしノ音便言、あひなしニ二種アリ、間無シノ義ニテ無遠慮ナドノ意ニ解スベキト、又一種ハ合無シノ義ニテ面白カラズ、「何トナシ」ナドノ意ナルモノナリ、共ニ音便ニテあいなしト書キタルガ多ケレバ前後ノ文勢ヲ案シテ見定ムベシ、愛なしノ義ト云フハ非ナリ、「徒然」我が方にある事かすかすに残りなく語りつづくるこそあいなけれ、「第一種ノ方ナリ」(「徒然」あまりに興あらむとすることはかならずあいなきものなり、「世に語り傳ふることまことはあいなきにや多くは皆そらごとなり、(第二種ノ方ナリ))

▲あいぜん 愛染 明王ノ名、愛慾ヲ司ル神、其ノ像三目怒視六臂ニ杵、鈴、弓、箭、蓮華ヲ執リ、頂ニ獅子冠ヲ冠シ威怒ノ相ヲナシ身色日光ノゴトク、熾盛嶺中ニアリ、

▲あはれ 感 あはあれト深ク事物ニ感ジテ發セル歎聲ナレバ深ク喜ビ、又ハ傷ムニモ云フ語ナリ、天晴ノ當字ニ拘泥シテ日神天岩戸ヲ出デ給ヒ天始メテ晴レタル時ニ稱ヘタルニ起コルトスルハ非ナリ、「源、玉葛」いてあはれいかてかくあひ出て給ひけむ、「源、桐壺」いといたう思ひわびたるをいといとあはれと御覽じて、「徒然」をりふしの移りかはるこそ物ごとにあはれなれ。

▲あはつけし 淡虚氣シノ義ニテ浮キタル状ナルヲ云フ、「源、少女」人の聞き思ふ所もあはつけさやうになむ、

▲あはむ 淡ムノ義、疎クスル意、「源、帚木」いはむ方なしと式部をあはめにくみ給ひて、

▲あへか 淡 淡氣ノ義、物ノハカナク強ミナキ意、あえかハ誤ナリ、「紫日記」御有様常よりもあへかに若くうつくげなり、

▲あへなむ 合せなむノ約音言、伴ナハシメムノ意、「大鏡、二」ちひさはあへなむと公もゆるさしめ給ひしかば共にゐて下りしぞかし、

▲あへなし 合無シノ義 彼ト此ト合體セヌ意、俗ノハリアヒナシト同シ、「源、夕

顔」召し入れて宣ひ出てむことのあへなきにふともものはれ給はず、

▲あへて 敢 合テノ義、先方ノ鞏固ナルニ合ハセテ此方ノ強ヒテ事ヲスル意、「押切リテ」是非共トナドノ意、「續紀、二十二」吾如久不申成敢。氏申人者不在、

▲あへしらふ 合知合ノ義、應答ノ意、「源、若紫」言づくなにひてをささあへし。らはず、○又、響應スルヲ云フ、「十六夜」そのよに見し人の子うまごなど呼び出てあへしらふ、

▲あたらふ 詠 あつらふノ古語、其ノ意同シ、

▲あどうつ 支那ニテ伎人ノ相手ヲ和伎者ト云フ、相手トスルヲ云フ、「宗鏡錄」如楞嚴經偈云「心爲工伎兒」意如和伎者、○又、他ノ語ニロヲ合ハスルヲ云フ、俗アヒツチヲ打ツト云フニ同シ、「大鏡、八」あながちに居よりて、あどうち給ひし、

▲あぢきなし 大虛氣甚シノ義、無益ノ意、無味氣ト書クハ當字ナリ、「躬恒」常磐なる松をば置きてあぢきなくあだなる山の櫻をや見じ、

▲ありがたし 有難 世ニ有ルコトノ難キニテ世ニ有リニクキ意、今ハ多ク感謝ノ意トス、「空穂、國讓」あしこにあるこの母いと心よくありがたき人なり、「神皇正」中

頃より代代の帝にはありがたき程の御事なりけむかし、

▲あるじ 主人 有主ノ約語、家ノ主タル人ヲ云フ、

▲あるじ 響應 あるじまうけノ略語、主人ノ率先シテ馳走ノ準備スルヨリ人ヲ響應スルヲ云フ、「土佐、上」なほ守の館にあるあるじのしりて、

▲あを 襖 襖の古音、武官ノ禮服、袍ノ兩腋ノ闕キタルモノニテ襦ナキ衣、後世ノ闕腋ノゴトシ、「衣服令」武官禮服位襖(注)謂無襦之衣也、○又襖子ノ略語、其ノ條ヲ見ヨ、

▲あをいろ 麴塵 天子御袍ノ染色ノ名、さくぢんノ條ヲ見ヨ、

▲あをによし 青丹吉 奈良ノ枕詞、大土ヨシノ義、古ク土ヲにト云フ、ヨハ感歎詞、シハ強意ノ助詞、神武天皇ノ東征ニ官軍ノ草木ヲ路ミ平シシヨリ多クノ土ヲ平ラス意ヲ以テ、土ト云ヒテ枕詞トセルナリ、「萬、一」青丹吉、奈良の山、

▲あをにぎて 青和幣 麻ノ幣帛ヲ云フ、栲布ノ幣帛ヲ白和幣ト云フ、「夫、九」御そぎする、麻のたちえの、青にぎて、さばへの神も、なびけとぞおもふ、

▲あをにび 青鈍 花田色ニ青ミノアル色ヲ云フ、「源、葵」こきあをにびの紙なる文

つけて、

▲あをつづら 青葛 蔓草ノ名、繰ルモノ故ニ多ク人ノ來ルニ言ヒ掛ケテ用キル、
「資賢」雪ふりてあとたをにける奥山にくる人もなき青つづらかな、

▲あをうなばら 青海原 大海原ノ意、青ノ意ニアラズ、「土佐、上」あをうなばらふ
らさけ見れば、春日なる、三笠の山に、いでし月かも、

▲あをうま 青馬 黒馬ヲ云フ、古代、禁中ノ公事ナル正月ノ白馬節會ニ古クハ黒
馬ヲ用キラレシヲ、後ニ白馬ニ代ヘラレシカバ白馬節會ト書クニ至ル、「萬、廿」水鳥の
鴨の羽の色の青馬を今日見る人は限なしといふ、「土佐、上」七日になりぬ今日はあを馬
を思へどかひなし、只波の白きのみを見ゆる、

▲あささぶらひ 青侍 年ノ若ク未熟ナル侍ヲ云フ、「宇治拾、七」父母も主もなく妻
も子もなくして只一人ある青侍ありけり。

▲あをひとごさ 青人草 世ノ人ノ生息マザルヲ草ノ繁殖スルニ比シテ云フ語、
人民ト云フニ同ジ、「古事記、中」又宇都志岐青人草習乎、

▲あをずりのきぬ 青摺衣 神事ニ着ル祭服ノ名、白キ布ヲ粉張ニシテ、山藍ニ鳥草

ナドノ模様ヲ木版ニテ摺リ出ダセル衣ヲ云フ、小忌衣ナリ、「踐祚大嘗祭式」小齋親王
以下皆青摺袍、五位以上紅垂紐、

▲あわつか 惶急 周章ニ同ジ、

▲あか 闕伽 梵語水ト譯ス、又、齋勃、嗔勃、烏勃、齋特、烏娜迦ト云フ、共ニ同
ジ、「名義集」阿伽、此云水、依約ニ其德、或翻圓滿、或翻無濁、「倭名、五」闕伽、内典
云、闕迦、梵語也、漢言齋勃ニ蒸ニ煮雜香ニ以ニ其汁ニ供養佛也、○又、水ヲ容ルル器ヲ
云ヒ熟シテあかの水ナド云フ、「夫、廿九」あか水に櫃の青菜さうりうけてささげもたれ
ば、ぬるる袖かな、

▲あがほとけ 吾佛 吾ガ大切ニ思フ人ヲ云フ、「竹取」あが佛何事思ひ給ふぞ、

▲あかほし 明星 金星ヲ云フ、此ノ星ハ日出ノ前ニモ見エ、日没ノ後ニモ見エテ
他ノ星ヨリモ赤ク輝クヨリ明星ト云フ、曉ナルヲあかほし(曉)明星、啓明ト云ヒ
タナルヲゆふつづ(宵)明星、長庚ト云フ、「神樂歌」あかほしは、みやうじやうは、

▲あかりまやうじ 明障子、今ノ紙張ノ障子ヲ云フ、衝立障子ニ對スル語、「徒然」あ
かりしやうじのすすけたるを禪師手づから切りまはしつづ、

▲あがる 頌 分カレ散ル意、あがつノ自動詞、「源、帚木」臨時の祭の調樂に夜更けていみじう震ふる夜これかれまかりあがる所にて、

▲あかがち 酸醬 赤耀威ノ義、酸醬ノ實ノ赤キヨリ云フ、ほほづきノ古語、「古事記、上亡彼目如赤加賀智」神代紀、上亡赤酸醬、此云阿箇箇鵝智、

▲あがた 縣 大田ノ義、上古ニ諸國ニアル朝廷御領ノ地ヲ云フ、○又、國司ノ官人ノ其ノ國ヲ指シテ云フ語、「土佐、上」ある人あがたの四とせ五とせはてて、○又、田舎ヲ云フ、「夫、三十」たづらなる、わらやの軒の、こもすだれ、是やあがたのまるしなるらむ、

▲あかたな 關御棚 佛ニ供スル香水花等ヲ調フル棚ヲ云フ、(あかノ條參看)「風雅、雜」あかたなの花の枯葉も打まめり、朝霧深し、峯の山寺、「徒然」關御棚に菊紅葉など折り散らしたる、

▲あがためし 縣召 古代ニ正月十一日地方官ヲ任ゼラルル式ヲ云フ、除目ト司召トノ條參看「公事根源」正月十一日縣召除目外官をひねと任ぜらるる也、

▲あがつ 頌 分配スル意、分ツヨリ意廣シ、「榮、日蔭」この殿うせ給へりとて大殿より多くの人をあがちてもとめ奉らせ給ふ、「神皇正」大上中下の四の功を立てて田をあがち給ひき、

▲あかねさす 茜刺 日ノ枕詞、赤照發ノ義、朝日ノ赤ク照リ耀クヨリ云フ、赤氣差或ハ赤丹差ノ轉ナド云フハ非ナリ、「萬、二」赤根刺日につくるまで、○、又、畫、紫、君ナドノ枕詞トモス、

▲あからさまに 彌離少間にノ義、僅少ノ時間ノ意ヨリ忽然ノ意ニ用キル、「空穗、俊蔭」いささかなることづてもしてしがなとあからさまにもいくものにもがなと思へど、○又、轉ジテかりそめ苟且ノ意トナル、「枕、七」ここなる所にあからさまにまかりてまらむといひて、

▲あからさまに 白地に、明狀にノ義 明白ニ、カクスコトナクナドノ意、

▲あからめ 彌離目ノ義、目ヲ離スヲ云フ、俗ノ傍觀スルニ同シ、「大和」もとのごとくあからめもせてとひるにける、

▲あがる 足搔 馬ノ走行スルヲ云フ、馬ハ前足ニテ土ヲ搔クゴトク歩メバ云フ、「萬、二」青駒のあがきを早み、雲居にぞ妹があたりをすぎて來にける、

▲あがく 躑 手足ヲ動カシ騒グサマヲ云フ、俗ノかくニ同ジ、「宇治拾、十二」虎さ
かさまにふして、たふれて、あがくを、「著聞、十二」平六がいろをとくいれと手をあが
さしかば、

▲あがふ 贖 大足フノ義、あがなふニ同ジ、物ヲ罪ノ代リニ出ダシテ其ノ罪ヲ消
スヲ云フ、「萬、十二」時フ風ふけひの濱に出て居つつ、贖ふ命は、妹が爲こそ、

▲あかもがさ 赤疱疹 はしかノ古語、(もがさノ條參看)、「榮、峯月」かくいふほど
にことしはあかもがさといふ物いて來て、上中下わかずやみののしるに、

▲あがもの 贖物 身ノ罪科ヲ贖フ爲ニ出ダス物ヲ云フ、かたしるニ同ジ、「後拾、
雜」御あか物のなべをもちて侍りけるを、大盤所より人のこひ侍りければ、

▲あだかも 恰、宛 當歎もノ義、大方スクアラムト推量スル意ヨリ、俗ノ丁度、マサ
シクノ意トス、「萬、十九」吾が背子が、捧けてもたるほほがしは、あだかも似かる青
さ絹がさ、

▲あたらし 可惜 噫ラシノ義、アタハアナ(歎聲)ノ通韻言ラハアラ(歎聲)ノラト
同ジ、惜シミテ歎ズルヨリ直ニ惜シム意トス、「拾玉」あたらしや、まぞが千島の春の花

ながむる人もなくて散りなむ、

▲あだし 佗 徒シノ義、花ノ變リ易キ意ヨリ出デテ都テ物ノ移リ易キ誠ナキ意ニ
云フ語、「貫之、上」櫻よりまざる花なき春なれば、あだし草をばものとやは見る、

▲あそん 朝臣、あそみノ訛言、吾兄臣ノ義、天皇ノ特ニ親シミテ宣フ敬稱、後ニ
姓ノ名第二等ニアリ、後、又、君ノ字ノ意ノゴトク用キラル、朝臣ノ字ノ義ニアラズ、

「空穂、藏開」この事あそんと少將ともろ心にことかかれず、あつかひ物ごとせられ
よ、

▲あそぶいと 遊絲 かげろふニ同ジ、いとゆうトモ云フ、其ノ條參看、「堀次」は
るばると、淺緑なる大空にあそぶいとをや、ながめくらさむ、

▲あそび 遊 中古ノ俗ニ管絃ヲ云フ、御遊ト云ハ天子ノ御前ノ管絃ノコトヲ云
フ、「源、若紫」御あそびもやうやうをかしま頃なれば、「宇治拾、一」年頃このあそびと
としつれども、

▲あそび 遊女ヲ云フ、面白ク人ノ心ヲ慰メシムルヨリ云フ、「源、落標」あそびども
の、つどひまるれるも上達部とさこゆれど、

▲あつらふ 詠 あとらふノ轉語、當合取合ノ義、頼ミテ其ノ言ノゴトク爲サシムルヲ云フ、「履仲紀」持其詠言「古、春吹く風に、あつらへつくるものならば、この一本はよぎよといはまし、

▲あづま 吾妻 吾妻國ノ略語、畿内ヨリ遠キ東方ノ國ノ稱、日本武尊ノ吾嬬者耶ト宣ヒシニ起コリテ東國一般ノ稱トナル、「景行紀」時日本武尊每有願ニ弟橘媛ニ之情故登碓日嶺而東南望之三歎曰吾嬬者耶故因號山東諸國曰吾嬬國、「伊勢物」京にありわびて、あづまにいさけるに、

▲あづまごと 和琴 六絃ノ琴、本邦固有ノ琴ニテ神樂等ニ用キル樂器、元ハ弓六張ヲ並ベテ彈キケルニ起コレト云フ、やまと琴わごん、又、略シテあづまトモ云フ、「源、竹川」妻戸押あけて、人人あづまをいとよく掻合せたり、

▲あつし 熱悶 病ミテ熱アルヨリシテ單ニ病氣ノ意トス、「源、桐壺」いとあつしくなりゆき、物心細げに里がちなるを、

▲あない 案内 あんないノ略語、物事ノ内容ノ意、又、教導ノ意、又、告ゲ知ラヌル意ニ云ヒ、又、通調ノ意ニモ云フ、「枕、一」家主なれば、あないをよく知りてあけてけり、

「源、蓬生」ほとりにつきてあない申さするを、「徒然」おぼし出づる所ありてあないせさせて入り給ひぬ、

▲あなにく 生憎 噫憎シノ義俗ノ折悪シクナドノ意今アイニクト云フ、「源、葵」例はあながちなりや、あなにくと見ゆるに今日は、ことわりに、

▲あながちに 強 當勝にノ通韻言、無理に、強ひてニ同シ、孔穿ノ義トスルハ非ナリ、「源、須磨」いとあながちにもきこえ給はずなりぬ、

▲あなかま 噫喧 噫喧シノ義、人ヲ制止スルニ云フ語、今ノエエ八釜シイノ意、「源、御法」女房のある限り騒ぎ感をあなかま、しばしとまづめ顔にて、

▲あなかしこ 噫惶シノ義、ア恐レ多シ、物體ナシノ意、穴賢ト當字スルヨリ恙虫ノコトニ關スル説ヲ立ツルハ非ナリ、書簡文ノ末ニ用キルハ恐惶謹言ノ意ニアタル、「源、竹川」打出たすこともこそ侍れ、あなかしこことてたつ程に、

▲あなづる 侮 あなどるノ轉語、「源、蓬生」まづしきあたりと思ひあなづりていひくるを、

▲あななひ 幫助 合爲ノ義、カラ入ビテ助ケルヲ云フ、「三實、卅八」天下政乎相

安奈奈比助奉、○又、高キニ上ル足掛ヌトヌル材、今ノ足代ヲ云フ、俗ノ足場ナリ、麻柱ノ字ヲ用キル、麻ハ殿ノ誤ナリ、「中右記」近日待賢門院修理之間構ニ立麻柱、「竹取」まめなるをのこども、廿人ばかりつかはして、あななひにあげすゑられたり、

▲あなごる 檢覈 當繰ノ義、嚴シク探リ求ムル意、穿鑿スルニ同シ、「著聞、十二」血付きたる小袖あり、怪しくていよいよあなごりて、板敷をあげて見るに、

▲あらかん 阿羅漢 梵語 Arhan 禮拜ヲ受クベキ者ノ義ニシテ應供ト譯ス、煩惱ヲ脱シテ生死ノ境ヲ離レタル聖者ヲ云フ、略シテ羅漢ト云フ、十六羅漢、五百羅漢トアリ、「大藏法數」三謂、阿羅漢、智斷功德既已具足應受ニ人天供養ニ故名應供、

▲あらがふ 諍 荒合ノ義互ニ劣ラシト張リ合フ意、あらそふニ同シ、「徒然」さらばあらがひ給へといはれて、

▲あらかじめ 豫 大カ占ノ義、大略是ト定メ置ク意、「萬、四」あらかじめ、人言繁し、かくしあらば、まゑや吾が背子、おくはいかにあらめ、

▲あらまほし 有らまく欲しノ略語、斯クアラムコトヲ望ムノ意、「源、桐壺」劣らずもてかしづきたるはあらまほしき御あそびどもになむ、「徒然」ひたぶるの世捨人は中

中あらまほしき方もありなむ、

治拾、二「鯛のあらまきを多く奉りたりけるを、

▲あらます 有らましヲ動詞トシタル語、行末ヲ前以テ定ムル意、豫算スルト云フニ同シ、「徒然」榮ゆく末までの命をあらまし、「拾、五」世の中を厭ふ心のあらましに死なでも人に別れぬるかな、

▲あんど 安堵 堵ハ居處ノ墟ナルヨリ安居スル意、即、家ニ安ンジテ居ルヲ云フ、「漢書」高祖入關、吏民皆安堵如故、○又、知行ヲ賜ハルヲ云フ、○又、心ノ落チツクヲ云フ、「著聞、四」随分の思召案をめぐらし向後の安堵を存すべし、

▲あんない 案内 文書ノ内容ヲ云フ、古代ノ制符ニ多ク見エタリ、他ハあないノ條ヲ見ヨ、

▲あくがる あごかるノ轉語、(其ノ條參看)「續古、秋」見る人の心は空にあくがれて、月の影のみすめる宿かな、

▲あやにく あなにくニ同シ、「源、帚木」御心にあばしとどむるくせなむあやにくに

て、

▲あやかろ 肖 肖疑ノ義、似通フ意、「拾遺、雜」風早み峯の葛葉のともすれば、あやかり易き人の心か、

▲あやなし、無理 文理無シノ義、條理無シ、譯分カラズナドノ意、「古、春」春の夜の暗はあやなし梅の花色こそ見えぬ香やはかくるる、

▲あやめがさ 綾蘭笠 蘭ニテ編ミタル被笠ヲ云フ、流鏑馬、犬追物等ノ時ニ被ムルモノ是ナリ、「宇治拾、六」髪黒きがあやめる笠着てふしくるなるやなぐひ皮まきたる弓もちて、

▲あやし 怪 噫シノ義、アヤト歎ズル聲ヨリ云フ、奇妙不思議ノ意、○又、イブカシノ意、更ニ轉シテ鹿相ノ意、「源、未摘」あやしき馬に、狩衣姿のながしるにてさけば、

▲あま 海人 海人ノ略語、海ニ漁シテ業トスル人ヲ云フ、蟹ノ字ヲ用キルハ蛭蠶ノ略字ナラム、「南海記」蛭蠶以舟爲室蛭有二三、一爲魚蛭、善學網垂輪、二爲蟻蠶、善沒海取螺、三爲木蛭、善取材木、「千載、戀」鹽垂たるる、伊勢をのあまや我ならむ、

さらば見るめをかるよしもかな、

▲あま 尼 梵語Amma母ノ義ナルヲ比丘尼ノコトトセルハ轉用ナリ、名義集ニハ阿摩ハ女母ト見エタル是ナリ、「比丘尼ノ條參者」徒然石清水に参りけるに老いたる尼の行きつれたりけるが、

▲あまのこ 海士の子 遊女ヲ云フ、「新古、雜」白波の寄する渚に身をつくす、あまの子なれば宿も定めず、

▲あまがつ 天兒 天禍津ノ約語、禍津ハ惡神禍津見ノ神ヲ云フ、木偶ニテ祟邪ヲ負ハスル料トスルモノ、後ノ犬這子モ此ノ類ナリ、「和泉式部、下」なきこと負ひてなげくとさきて、吾をあまがつにせよといひたるに、あまがつにつくともつさじ、うさことはしなとの風にふきもはらはむ、

▲あまがける 天翔 死者ノ靈ノ天上ニアリテ見ル意ニ云フ、國翔ト對ス、「空穂、俊隆」吾がすぐせのがれざりけるをあまがけりてもいかにかひなく見給ふらむ、

▲あびつらふ 論 擧取相ノ義、互ニ條理ヲ擧ゲテ述ブル意、極メテ古キ語ナリ、▲あびまき 總角 小兒ノ結髮ノ名、髮ヲ左右ニ分ケ揚ゲ卷キテ兩髻ヲ作り、總角

ノゴトクスルヲ云フ、轉ジテ少年ノ意ニ云フ、「倭名、二」總角（和名阿介萬岐結髮也）「源、蓬生」馬牛などのふみならしたるみちにて春夏になれば放ちかふあけまきの心さへぞめまじしき、○又紐ノ結方ニ兩方ニ輪ヲ出ダシ中ノ結ヲ石疊ニシタルモノ種種ノ物ノ飾ニツク「源、總角」あけまきに長さ契りを結びこめおなじ所によりもあはなむ、

▲あふりやうし 押領使 古代ニ諸國ノ狼藉者ヲ鎮定セムガ爲ニ遣ハサル使ヲ云フ、「朝野羣載、廿」天曆四年藤原有行請レ被補押領使給隨身兵仗、「徒然」筑紫になにかしの押領使とかやいふものあり、

▲あふさきさるさ 逢時離時ノ義、一方善ケレハ一方惡シト云フ語、「古、俳諧」そへにとて、とすればかかき、かくすれば、あなひしらずあふさきさるさに、

▲あこがる 憧憬 大焦ノ義、甚シク心ノ執着スルヲ云フ、あくがれニ同ジ、「續古、羈旅」哀なり、何となるみのはてなれば、またあこがれて浦づたふらむ、

▲あこぎ 阿漕 事ノ度重ナルヲ云フ語、阿漕ハ勢州安濃郡ノ地名ニテ「六帖、三」逢ふ事をあこぎの島に引く鯛のたびかさならば人も知りなむト云フ歌ヨリ起ヨリ後ニハあこぎが浦に引く鯛の度重なればあらはれぞするト誤レリ、俗ニ非道ニ貪ルヲ云フ、

▲あこめ 相 間籠ノ義、婦女ノ身ニ近ク着ル服ヲ云フ、又、男子モ禮服ノ下着ニ用キル、「源、葵」ほどなきあこめ人よりは黒くそめて、

▲あえか 淡 あへかノ誤、其ノ條ヲ見ヨ、

▲あて 艶 大美ノ義、高ク貴クミヤビナルヲ云フ、「源、若紫」げにいといたうおもやせ給へれど、いとあてにうつくしく、

▲あさい 朝寐 いハ睡ノ義、朝睡レルヲ云フ、「後撰、春」竹近く夜床寝はせじ鶯のなくこゑさけば朝いせられず、

▲あさぢふ 淺茅生 大清茅生ノ義、古クハ神ヲ祭ル場ニ茅原ヲ標シタルヨリ茅ノ潔キヲ美メタル語、後ニハ直ニ茅原ノ意トス、淺ハ借字ナリ、「後撰、戀」あさぢふの小野のしの原忍ぶれど餘りてなどか人の戀しき、

▲あざり 阿闍梨 梵語 阿闍梨耶 Acarya ノ略語、師ノ義、軌範師ト譯スルヨリ、僧ノ師タルモノヲ云フ、後、律師ノ稱號トス、又あじやリト云フ、「要覽、上」寄歸傳云、梵語阿遮梨耶唐云軌範今稱阿闍梨蓋梵音訛略也、菩提決疑論云阿遮梨夜隋云正行

〔徒然〕後七日の阿闍梨武者を築む事、

▲あさる 漁 磯狩ノ義、海邊ニテ漁スルヲ云フ、轉ジテ鳥獸ノ食物ヲ探リ求ムル意、足探ノ義トスルハ非ナリ、〔源、明石〕あさりするあま共も誇らしげなり、〔源、夕霧〕

この御文は引かくし給ひつれば、せめてもあさりとらてつれなく大殿ごもりぬれば、

▲あさがれひ 朝餉 朝ノ飯ノ意、又、清涼殿中ニアル朝餉間ノ略語、天子ノ供御ヲ參ラスル所ノ名、〔枕、十〕あさがれひの御障子をあけて、

▲あさる 鮫 魚肉ノ腐レ爛レタルヲ云フ、又、人ノ大ニ威儀ヲ亂スヲモ云フ、

〔仁徳紀〕苞直鮫於往還、〔土佐、上〕いとあやしく鹽海のほとりにてあされあへり〔源、椎本〕女の心ゆるび給はざらむ限りはあさればみ情なきさまに見えじと思ひつつ、

▲あさな 字 他名ノ通韻言ナラム、梵語 惡刹那(文字ノ義)トスルハ當タラズ、梵語ハ阿利維 Aksara ナルモ異ナリ、又、交名ノ義ト云フモ非ナリ、實名ノ外ニ他ヨリ呼ブ名、〔新猿樂記〕字尾藤太、名傳治、〔宇治拾、二〕字袴垂となひいはれ候ふ、

▲あさなあさな 毎朝毎朝 朝時朝時ノ義、ゆふへゆふへニ對ス、なへゆふしな、かへりしな、ナドノしなニ同ジ、〔古今、春〕野邊近く家居しせれば鶯のなくなる聲はあさ

なななさく、又あさなゆふななノモ同ジ、

▲あさまし 驚歎 奇見シノ義、事物ノ深ク驚クベキコトアルニ云フ語、あさむヲ形容詞化シタル語ナリ、淺猿敷ハ當字ナリ、俗ノアキレタリト云フニ同ジ、〔空穂、藏開〕さばかりかしてき宮殿原を習ひ給へれば、いかにあさましき所ともほすらむ。

▲あさぎよめ 朝精 掃除スルヲ云フ、〔堀次〕もみぢばを、夜半の嵐のしく庭は、物忘れせて朝ぎよめすな、

▲あさづしま 秋津島 日本國ノ異稱、元ハ大和ノ葛上郡腋上ノ秋津島ヨリ出デテ日本ノ總稱トナリシナリ、〔神武紀〕二十一年夏四月乙酉朔皇輿巡幸、因登腕上曠間丘

而廻望國狀曰妍哉乎國之獲矣、雖内木綿之眞迹國猶如蜻蛉之響咕焉、由是始有秋津洲之號也、〔千載、序〕普き御うつくしみの浪、秋津島の外まで及び、

▲あさのみや 秋宮 中宮ヲ申ス、支那ノ長秋宮ヨリ云フ、〔萬代、冬〕殿守に又ものいはむ、この葉ちる秋の宮にて、朝清めすな、又あさのみやまト云フモ同ジ、秋の御方トモ云フ、

▲あささらば 秋し有らばノ約語、秋ニナラバノ意、秋去者ト書クハ當字ナリ、〔萬

十五 秋さらば吾が船はてむ。

▲あみだぶ 阿彌陀佛 梵語阿彌陀婆 Amitayus 無量壽ト譯ス、佛經ニ云フ如來ノ名、西方淨土ニアリトス、光明ノ功用ニ由リテ十二光佛ノ名アリ、「阿彌陀經」爾時佛告長老舍利弗、從是西方過十萬億佛土、有世界名曰極樂、其土有佛、號阿彌陀、「觀經疏」無量壽者、天竺稱阿彌陀、「源、朝顔」あみだぶを心にかけて念じ奉り給ふ、「徒然」無量壽院ばかりぞそのかたとして残りたる、丈六の佛九體いと尊くて並びおはします。

▲あじろ 網代 編席ノ義、字ハ當字ナリ、檜木ヲ薄クヘギタルモノ、又ハ竹葦等ヲ薄ク細クセルヲ斜ニ編メルモノ、種種ノ用ニ供セラル、網代車、網代屏風、網代簀ナド多シ、「源、橋姫」この川づらはあじろの波もこの頃はいとどみみかしましう。

▲あしがも 蘆鴨 磯鴨ノ轉語、磯ニ居ル鴨ヲ云ヒ轉ジテ單ニ鴨ヲ云フ、蘆ノ中ニ居ル意トスルハ非ナリ、蘆田鶴ノ蘆ト同シ、「土佐、上」をしと思ふ、人やとまるとあしがもの打むれてこそ我は來にけり。

▲あしたづ 蘆田鶴 磯鶴「タツハ鶴ノ古名、田鶴ハ當字」ノ轉語、海邊ニ居ル鶴ノ

意、轉ジテ單ニ鶴ヲ云フ、「古、戀」住の吉のまつほど久になりぬれば、あしたづのねになかぬ日はなし。

▲あして 葦手 あしてがきニ同ジ、歌ヲ書クニ文字假字ヲクヅシテ葦ノ生ヒタル狀ニ書クヲ云フ、水ノ流ルル狀ニ書ケルヲ水手ト云フ、「源、梅枝」あして歌繪を思ひ思ひに書けと宣へば、

▲あしゆら 阿修羅 梵語 Asura 惡神ノ意、阿ハ非、修羅ハ天ノ義、佛說ニ、常ニ鬪争ヲ好ミ果報天ニ劣ルト云フ、略語ニテ修羅ト云フ、四種(卵生、胎生、變化生、濕生)アル中ノ化生ノ四修羅ハ即非天ト譯スルモノナリ、

▲あしびきの 足引 山ノ枕詞、大繁木ノ義、樹木ノ多ク繁茂セル山ト掛カルナリ、足ヲ引キテ歩ム義、又ハ山脚ノ長ク引ケルナド云フハ非ナリ、「允恭紀」あしびきの山田をつくり、

▲あひおひ 相生 相老ト書クハ誤ナリ、諸共ニ生ヒタチユクヲ云フ、「古今、序」高砂、住の吉の松もあひおひのやうにもほえ、

▲あひしらひ あへしらひニ同ジ、「源、若紫」ことずくなにいひてをさをさあひし

らぼず。

る。

▲さいなむ 叱責 差^{サシ}窘^{シマ}ムノ音便言、差ハ添語差出差控ノ差ニ同ジ、さいなむノ音便言ト言フハ非ナリ、罪ヲ糾問スルヲ云フ、「枕、一」馬の命婦もさいなみて、めのとがへてむいとうしろめたしと仰せらる、

▲ざいけ 在家 民家ヲ云フ、僧家ニ對スル語、「宇治拾、四」近邊の在家にて、

▲さいご 最後 命ノ果ツル時ヲ云フ、いまはのきはニ同ジ、「狭、三」この尼君の最後に逢ひ侍らむ、

▲さいて 裁出 布帛ノ裁片ヲ云フ、裁出ノ義、「後撰、秋」もみぢといろこさいてとを女のもとにつかはして、

▲さいめん 西面 院ノ御所ニ近ク召シ仕ハルル士ヲ云フ、後鳥羽院置カセラル、「承久記、上」白河院の御時北面といふことを始めて、侍を近く召し使はるることありける、この御時鳥羽院に又西面といふ者を召しおかれけり、

▲さは 多 甚大ノ義、數ノ多キヲ云フ、「古事記、中」ノ忍坂のおほ室屋に人さはに來入りをりとも、

▲さは 娑婆 しゃばニ同ジ、「其ノ條參看」「源、若菜」さはのほかの岸にいたりてとくあひ見むことをおぼゆ、

▲さはれ 遮莫 さもあらばあれノ約語、「落窪、一」いかにせむとわび給へば、さはれあけ給へ、

▲さへ 添^ソノ轉^マシテ成^ル助詞、俗ニマデノ意、大部分ヲ擧ゲテ小部分ヲ言外ニ知ラシムル語、だにノ反ナリ、ただノ意トスルハ非ナリ、「土佐、上」祈り來る風聞と思ふをあやなくも鷗さへだに波と見ゆらむ、

▲さへのかみ 塞神 道ノ神ヲ云フ、神代紀ニ云フ伊弉諾尊ノ投^テ給^ル杖ニ成^レル神ニテ黄泉醜女ヲ支^{ササ}へ止メタルヨリ起^リテ、路ニ邪魅ヲ遮^セギリ留^ルル神ノ意ニ云フ、くなどの神、ふなどの神、たむけの神ニ同ジ、今の道祖神、俗ノだうろくじん是ナリ、「倭名、二」道祖(和名、佐倍乃加美、)

▲さち 幸 眞威ノ義、漁獵ナドニ獲物アルヲ云フ、轉^シテ幸福ノ意トス、「神代

紀、下「兄火闌降命自有海幸」(幸此云左知)弟彦火火出見尊自有山幸、
▲さりや 然リヨノ意、「源、薄雲」むづかしうて御いらへもなければ、さりやあな心
うとて、ことごとにいひまぎらはし給ひつ、

▲さるがふ 散樂 散樂ノ轉音ヲ動詞化セル語、散樂スル、諧謔ヲナスノ意、音使
ニさるがうトモ云フ、「空穂、藏開」さるがうする人にて、かめまひをす、「又、さるがう
言トモ云フ、

▲さるがく 猿樂、散樂ノ通韻言、支那ノ散樂ヨリ出デテ、別ニ音樂歌舞具備シテ
職業トシテ演スル戲藝ヲ云フ、田樂、品玉ノゴトキ是ナリ、後ニ能樂ヲモ云フ、字又申
樂ニ作ル、散樂ノ當字ナリ、

▲さか 釋迦 しゃかニ同ジ、(其ノ條ヲ見ヨ)

▲さが 性 持前本分ナドノ意、轉ジテ習慣ナドノ意ニ云フ、「狭、三」賊ならぬ事
も只かたはし出てくれればまことしうのみいひなす人もほかる世のさがにして、

▲さかやき 月代 月代ニ同ジ、「沙石集、六」この賊も袖をしぼりぬ、さて次の日の
夕方さかやきある入道この房に來てひそかに申しけるは、

▲さかしらに 賢シラニノ義、賢氣ニト同ジ、利口ブリテノ意、「源、御幸」中將の君
ぞつらくはちはするさかしらにむかへ給ひてかろめあざけり給ふ、

▲さかもぎ 逆茂木 逆虎落ノ約語、棘木ノ枝ノ鹿角ノゴトクナルヲ地ニ逆立デテ
垣ニ結ヒ附ケ敵ノ入ルヲ防ク材トスルモノ、「百練、十」山門閉、樞道引ニ逆母木、

▲さた 沙汰 定ノ義、沙汰ハ當字、事ヲ定ムルヲ云フ、轉ジテ官ノ指揮ノ意ニ用キ
ル、又通知ノ意、「宇治拾、一」何をか取るべきと各いひさたするに、「宇治拾、三」この國
司下りて國のさたどもあるに、

▲さながら 然ナガラノ義、其ノ儘ノ意、又悉皆ノ意、「拾玉」野邊ごとにてぼるる
秋の夕露を、さながら袖のものとなしつる、「月詣、七」小萩原やどにさながら移し植ゑ
て、鹿のたちどやまばらなるらむ、

▲さながら 前條ノ語ノ轉ジテ、恰、正ニ、丁度ナドノ意ニ用キラル、

▲さらほふ 曝ほふノ轉語、ほふハ延音言、よろほふ、ちりほふノほふニ同ジ、雨
露ニ曝レテ骨ノミトナル意轉ジテ瘦セ衰フル意、俗ノヤセヒコケルニ同ジ、「莊子、至樂」
莊子之楚、見ニ空闊體然有、形、「源、未摘」瘦せ給ひけることいとほしげにさらほひて

肩のほどなどはいたげなるまでさぬの上まで見ゆ。

▲さらそうじゆ 沙羅雙樹 沙羅ハ梵語の。高遠ノ義常ニ堅固ト譯スルハ。ニテ樹ノ名ニアラズ、此ノ木ハ櫛ニ似テ皮青白ク葉ハ光澤アリト云フ、雙樹ハ並木ノ義ニテ佛涅槃ノ時一時ニ白クナリテ白鶴ノゴトクナレリト云フヨリ鶴林、鶴樹ナド云フ、「事苑」此云高遠ニ以テ其材木森超出ニ於餘木之上、或翻ニ堅固ニ誤矣由沙羅與沙羅聲相近也若呼ニ堅固ニ則轉舌言ニ之若呼ニ高遠ニ則依平言ニ之也、「涅槃經」爾時世尊娑羅林下寢ニ臥實牀ニ於其中夜ニ入ニ第四禪ニ寂然無聲於ニ是時頃ニ便般涅槃入ニ涅槃已其娑羅林東西ニ雙合爲一樹ニ南北ニ雙合爲一樹ニ垂ニ覆實牀ニ蓋覆如來ニ其樹即時慘然變ニ白猶ニ白鶴ニ枝葉花果皮幹悉皆爆裂墮落漸漸枯悴摧朽無餘、「平家、一」沙羅雙樹の花の色盛者必衰の理を表はす。

▲さらでだに 不^レ然^レだに俗ノ「サウデナクテデモ」ト云フニ同シ、さらぬだにニ同シ、「拾玉」さらでだに散ればひなしき花の色に染めし心を忍びかへしつ、

▲さんぼう 三方 食物ヲ載スル器ニテ神供ヲ盛リ、又ハ貴人ノ膳部儀式ナドニ用キル、檜木ノ白木ニテ作レル方形（角切ニテ）ノ折敷ニ臺ヲ重ネタルモノ、古クハ

衝重ト云フ、臺ノ三方ニ孔ヲ明ケテ持チ上ゲル用トス、四方ニ孔アルヲ四方ト云フ、又、孔ナキヲ供養ト云ヘリ、

▲さんぼう 三寶 佛經ニ所謂佛法僧ノ三ツヲ云フ、みづのたからト云フ、「觀經」恭敬三寶。奉事師長、「事苑」實性論云、佛法僧何以名三寶、曰具六義故、一希有如聖寶等ニ離垢不染、二勢力除貧去毒、四莊嚴、五最勝、六不改變、「源、手習」とまれかくまれおぼしたちて宜ふを三寶のいとかしこほめ給ふ事なり、

▲さんまい 三昧 梵語 三昧地 Samadhiノ略語、正定、等持ナド譯ス、思ヲ專ラシテ想ヲ靜ムルヲ云フ、「事苑」三昧者、三之曰正、昧之曰定、亦云正受、謂正定不亂、能受諸法憶持揀擇、故名正受、亦云等持、爲正定能發生正慧等持諸法具故名之爲三昧持、「源、若紫」法華三昧行ハ懺法の聲、○又、心ヲ其ノ事ノミニ用キルヲ云フ、「刃物三昧」ナド、○絶妙ノ境ニ達スルヲ入三昧ト云フ、

▲さんまいだう 三昧堂 法華又、念佛等ヲ修スル爲ニ建テタル堂ヲ云フ、「枕、入」うらやましき物、三昧堂たてて宵曉に祈られたる人、

▲さんげ 懺悔 懺ハ梵語懺摩ハ悔日ニテ悔過請恕ノ義、悔ハ漢語ニテ懺ノ意譯

字、此ノオトクナル語ヲ梵兼漢舉又梵漢兼稱ト云フ、即佛ニ對シ吾ガ惡事ヲ發露シテ悔
悛スルヲ云フ、「大藏法數」梵語懺摩、此云悔過、梵漢兼舉故稱懺悔、懺名、修來、悔
名、改往、譚修、將來之善果、改已往之惡因、是名懺悔、「金槐集、下」堂を建て塔をつく
るも人なげきさんげに勝るくどくやはある、

▲さんざう 三藏 佛經ノ經藏、律藏、論藏ノ總稱、又梵文ノ經ヲ支那文ニ翻譯セ
ル僧ノ三藏ニ通シタルニ云フ稱、藏トハ一切ノ文義ヲ攝藏シテ散滅セザラシムルニ名
ヅク、「太平、五」大唐の玄奘三藏こそはしけれ、

▲さうなし 左右無シ 左右ノ論無シヲ音讀セル語、躊躇セズ直ニナドノ意、又、拔
羣ノ意、「徒然」古くよりこの地を占めたるものならばさうなく掘りすてられ難し、「古
事談、六」八幡所司永秀古時無左右、笛吹也、

▲さうざうし さびさびしノ音便言寂寂シキ意、轉ジテ喧シノ反語トナル、騒騒シト
書クハ當字、「空穂、初秋」藤壺はまうのぼり給はぬ二宮そがさうざうし事かの君のま
うのぼり給へらむこそけふのすまひよりも見所あるべけれ、

▲さうじ 障子 しやうじニ同ジ、衝立又ハ襖ヲ云フ、「源、帚木」火ともしたるすき
かけさうじのかみよりもりたるに、

▲さうじ 精進 さうじんノ略音言、次條參看、
▲さうじん 精進 しやうじんノ約音言、其ノ條ヲ見ヨ、「源、須磨」やがて御さうじ
んにて明けくれ行ひてはす、

▲ざうし 曹司 官省禁中ナルニ官人女官ナドノ用部屋ヲ云フ、局ニ同ジ、又、大學
寮ニ學生ヲ教フル所ノ名、「彈正式」先參朝堂、後赴曹司、「北山隨筆」御曹司、大學寮に
東西の曹司あり菅江の二家之を司りて人を教ふる所なり、この大學の南に勸學院を立
て南曹と申しける氏の長者むねとこの院を管領す、氏の長者の公達この曹を司り給ふ
べき御方を貴稱して御曹司と申すにや、

▲さうじみ 正身 正シキ其ノ身ノ意、本人自身ト云フニ同ジ、「萬、十六」夫君更
娶他妻正身不來、

▲さのみ 然ばかりニ同ジ、今ノソレホド、甚シクナドノ意、打消ニ呼應スル語トハ
用方異ナリ、「續千、戀」忘れ行く、人ばかりこそつらからめ、身をさへさのみ何うらむ
らむ、

▲さくらがり 櫻狩 山野ニ櫻ヲ尋ネテ花ヲ見歩クヲ云フ、紅葉狩ノ狩ニ同ジ、狩獵ヨリ出デタル語、「拾遺、春」さくらがり雨は降り來ぬ同じくは濡るとも花のかげにかくれむ、

▲さやぐ 騷グノ通韻言、其ノ意同ジ、さわぎヲさやぎト云フニ同ジ、「萬、廿」篠が葉のさやぐ霜夜に吾が獨ぬる、

▲さぶしき 雑色 古代ニ藏人所ニ屬シテ雜役ニ供セラルル者ヲ云フ、良家ノ子弟ヲ以テ補ス、後ニ中間ノゴトキ輕キ者ヲ云フ、「宇治拾」三〇ともに具したるさぶしきをよびければ、

▲さころも 袂衣 さハ發語、衣ト云フニ同ジ、「催馬樂」夏引の白絲ななはかりあり、さ衣にありても着せむましめはなれよ、

▲さえ 才 オノ吳音、漢學ニテ修メ得タル智識學問ノ意、和魂漢才ノ才ナリ、後ニ藝能ヲ云フ、「源、少女」なほさえをもととしてこそやまとだましひの世にもあめらるる方もつよう侍らめ、「源、繪合」琴ひかせ給ふことなむいぢのさえにて、

▲ささがにの 蜘蛛ノ枕詞、笹ガ根ノ組ムト云フヲクモト轉ジテ蜘蛛ニ云ヒ掛ケタ

ルナリ、小サキ蟹ニ似タルヨリ云ヘリトノ説ハ非ナリ、轉ジテ蜘蛛ノ意ニモ用ケル、「允恭紀」吾が背子が來べき宵なりささがねのくものふるまひかねてしるしも、「源、帚木」ささがにのふるまひしるさ夕暮にひるますぐせといふがあやなむ、

▲さきをおふ 先追 貴人ノ行ケ路ノ先ニアル人ヲ拂フ掛ケ聲スルヲ云フ、「源、少女」御さきをおふ聲のいかめしきに、

▲さきら 先らノ義 口先ノ意、辯口アルヲ云フ、口ヲ略シテ單ニさきらトノミ云フ、「撰集抄、二」いはむや道心堅固にして心もかしこくさきらあらむ人人のなじかは心もすまで侍るべき、○又、筆ノ先ノ意、筆跡ト同ジ意ニモ云フ、「濱松、一」唐の薄紫の紙に書ける文字のつくり筆のさきらいとかしこくももしろき、

▲さきもり 防人 埼守ノ義、筑紫ノ海ノ埼埼ヲ守備スル人ニテ、上古、軍團ノ兵ヲ太宰府ヘ送リテ守備隊トセラレシ兵士ヲ云フ、三年分番ヲ法トス、壹岐對馬ニモアリ島守ト云フ、「續紀、廿」太宰府防人頃年差ニ坂東諸國兵士ニ發遣、由是路次之國皆苦ニ供給ニ防人産業亦難ニ辨濟、自今以後宜差ニ西海道七國兵士合一千人ニ充ニ防人司ニ依式鎮戌ニ集ニ府之日便ニ習五教、

▲さしぬき 奴袴、指貫 さしぬきのはかまノ略語、衣冠、直衣、狩衣ノ時ニ用キル袴ニテ裾ヲ緒ニテ指シ貫キテ足ニ括リツクルヤウニ製セリ、布ヲ用キルヲかりばかまト云ヒ、織物平絹等ヲモテ作レルヲ絹のかりばかまト云フ、元ハ袴帑ト書キテ舞人ノ装束ナリシヲ誤リ倒書シテ奴袴ト書ス、ぬばかまト讀ムハ非ナリ、「枕、七」指貫もなぞ足ぎぬもしはさやうの物はあし袋などもいへかし、

▲さもあらばあれ 遮莫 任地然モ有ラバ有レノ義、爲ム方ナクバソノ儘ニアレノ意、俗ノママヨニ同シ、畧シテさまらばれ、さばれト云フ、「六帖、四」吉野川よしの川水よさもあらばあれせになるふちは、なくばこそあらめ、

▲ざす 座主 比叡山延曆寺ノ長ヲ云フ、「要覽、上」今釋氏取ニ齊解優膽領拔者一名座主謂ニ一座之主、「源、若菜」山の座主よりはじめて、

▲さすがに 流石 しかすがにノ約語、然シナガラニ、サハ云ヘドモノ意、又轉シテ本分ニ耻ヂズノ意、流石ノ字ハ孫楚漱石ノ故事ニ出ツ、「土佐、下」このわらはさすがに耻ぢていはず、

▲さすらふ 流離 寄ル邊ナクサマヨフヲ云フ、「源、明石」海にます神のたすげにか

がらすば、汐の八ほあひにさすらへなまし、

き

▲きほふ 競 きとふニ同シ、負ケシト勇ミ争フ意、「源、椎本」人人あまた参りつどひ物騒がしくてきほひかへり給ふ、

▲きちやう 几帳 座側ニ立テテ内外ヲ遮ルニ用キルモノニテ、臺ニ二本ノ柱ヲ立テ上ニ長キ横木ヲ附ケ帷ヲ懸ク、「源、葵」ちひさき御几帳ひさあけて見奉り給へば、

▲きちじやう 吉上 衛士の中ニテ、上日上夜ヲ善ク勤メタルヲ頭トスル稱、馬部吉上ナド云フ、「榮、耀藤壺」陣の吉上衛士仕丁まで、

▲きちじやうてんによ 吉祥天女 梵語ニ室利摩訶訶毘軻、功德女ト譯ス、女相ノ神、毘沙門天王ノ妹ニテ威徳成就衆事大功徳ヲ司ル、「源、帚木」吉祥天女を思ひかけむとすれば、

▲きりかけ 切懸 今ノ板塀ノゴトク作レル垣ヲ云フ「字拾、七」そのおはしまししかたはらにきりかけの侍りしを、

▲きりふ 切符、切班 鷹ノ羽ノ上下黒ク中間白キモノヲ云フ矢ノ製作ニ云フ語、
▲きぬかづき 衣被 被ヲ云フ、又、被ヲ着タル婦人ヲ云フ、「辨内侍日記」卯の日は
せいそ堂の御かぐらなり、きぬかづきかさなりて更に道なし、「徒然」きぬかづきのよ
りて放ちてもとのやうにきさたりけるとぞ、

▲きよまはり 齋戒 清まるノ延音言、齋シテ身ヲ清ムルヲ云フ、「宇治拾、九」七日
水をあみ精進をして習ふことなりといふそのまゝに清まはりて、

▲きたのかた 北方 大臣、大將、公卿ノ妻ノ尊稱籙中ニ同シ、北ノ臺ニ居ルヨリ名
ヅク「源、桐壺」母、北の方なむいにしへの人のよしあるにて、

▲きたのぢん 北陣 禁中兵衛府ノ陣、朔平門ノ傍ニアリ、「平家、六」北の陣に小
山を築かせ、

▲きたのまんどころ 北政所 攝政、關白ノ妻ノ尊稱、宣下ニ依リテ云フ、
▲きそく 氣色 氣色ニ同シ、「徒然」あなたふとのけしきやとて信仰のきそくあり
ければ、

▲きんだち 公達 君等ノ轉音、諸王ヲ云フ、後ニ攝家、清華ノ子息ノ稱トナリ、

又、大臣大將ノ子ノ中納言、中將ニ至レル者ノ稱トス、「源、帚木」宮腹の君だちただこ
の御とのゐる所の宮仕をつとめ給ふ、

▲きのまるどの 木丸殿 削リ磨カヌ荒木ノママニテ造レル宮殿ノ稱ニテ齊明天皇
ノ筑前ノ朝倉ノ行宮ノ故事ニ出ヅ、「神樂」朝倉や木のまるどのにわれをれば、なのり
をしつづめくは誰が子ぞ、

▲まきぐぢん 麴塵 天子常ノ御袍ノ染色ノ名、(麴ノ微ノ意)刈安、紫草灰等ニテ染
ム黄ニテ青ミアリ、御紋ハ桐竹鳳凰或ハ唐草ト鳥トナリ、又山鳩色ト云フ、裝束圖
式「麴塵御袍御紋黃蘆染ト同シ、或又唐草ニ鳥等上皇モ着御シ給フ夏ハ生絹、冬ハ練、
裏ハ平絹、色ハ表ニ同シ、染之綾一疋ニ刈安草大九十六斤紫草六斤、灰三石、薪八百
四十斤、

▲まやうざく 景跡 上代ノ法律家ノ語、人ノ是マデニ行ヒ來タル善惡ノ跡、行
跡、履歷ナドノ意、轉シテ推察スル意、「沙石、七」餘りに情なく候ふ事さのみ申し盡し
難く候ふ、一事を申さば、餘の事は御景跡あるべし、

▲まやうざく 警策 及第ヨリ出テタル語、詩文ノ秀逸ナルヲ云フ、「陸機文賦」立

片言以居、要、乃一篇之警策。(注)馬因策而行疾、喻文資片語而理明以一言入衆辭中若策之警馬也。○又、物ノ優レタルヲ云フ、「源、花宴」このたびのやうに文どもさやうさうに舞樂ものの音どもとのほりて、

▲まげん 機嫌 佛經ノ語、譏嫌ノ誤、人ノ忌ミ嫌ヒヲ伺ヒ知ルノ意、「法苑」如佛梵鉢提善護譏嫌藏身天上。○又、時機、都合等ノ意、「徒然」世に從はむ人はまづ機嫌を知るべし。○又、心地起居ノ意ニ云ヒ、更ニ轉ジテ氣色、氣合ノ意ニ云フ、

▲まじやう 起請 誓ヒヲ立テテ其ノ言ヲ書記シタル文書ヲ云フ、誓書ニ同ジ、「徒然」比叡山に大師勸請の起請といふことは、「十訓、四」起請をかいて三塔に披露せらる、

▲まびはに 幼稚 幼ク弱キヲ云フ、「空穗、藏開」いとあてにまびはにをさなかるべきほどよりは、

▲まさせわた 着綿 眞綿ヲ丸ク扁タクシテ菊ノ花ノ上ニ被フモノヲ云フ、其ノ綿ハ白、黄、赤等アリ、之ヲ取リテ身ヲ撫デ老ヲ忘レ命ヲ延ブトス、九月九日ニスル業ナリ、「後撰、秋」隣に住みける時九月八日伊勢が家の菊に綿を着せにつかはしたりけれ

▲まさせなが 着背長 鎧ノ異名、大將ノ料ナルニツキテ云フ、「平家、二」入道の御きせながを召され候ふうへは、侍どもも皆うちたちて、

▲まきすぐに 木強 生直ニノ義、心強ク正直ナル意、俗ノ眞面目ニ同ジ、「枕、一」猶例の人のやうにかくないひ笑ひそいとまきすぐなるものを、「源、總角」亂れ初めじの、心にて、いとまきすぐにもてなし給へり、

ゆ

▲ゆはた 纈纈 結機ノ義、絞染ヲ云フ、「顯季」君が爲、ゆはたのさねを取してて、神をぞ祭る萬代までに、

▲ゆるしいろ 許色 衣服ノ染色ニ紅色紫色ノ薄クシテ常人ノ着ルベク禁制ニ及バザル色ノ名、深紅深紫等ノ禁色ニ對スル稱ナリ、「源、末摘」ゆるしいろのわりなくらはじらみたる一かさね、

▲ゆかし 懐 心ノ往カトスル義、深ク慕ハシノ意、「源、桐壺」いとど人わろるか

なまにふりはつるもささの世のゆかしうなむ、「紫日記」ましていかならむなど心も
となくゆかしきに、

▲ゆゑま 維摩 梵語 維摩羅詰 Vinak-ketiノ畧語、無垢稱、又淨名ト譯ス、威
德無垢稱王優婆塞ト云フ、印度毘耶城中ニ住セル大悟ノ婆優塞ニテ釋迦ノ弟子、「西域
記」毘摩羅詰、唐言ニ無垢稱、舊曰ニ淨名、然淨則無垢名則是稱、義雖取同名即有異
舊曰ニ維摩詰訛也、

▲ゆくりかに 不意 ゆくりなくニ同ジ、思ヒガケズニノ意、「源、玉葛」いでや、こ
はいかに仰せらるるとゆくりかによりきたるけはひにおびえて、

▲ゆくりなし 不意 思ヒガケズ、不意ナリノ意、「源、夕顔」いさよふ月にゆくりな
くあくがれむこと、

▲ゆくさくさ 行方來方 行時來時ノ義、行ク時ニモ來ル時ニモノ意、「萬、九」わた
つみのいづれの神を祈らばか、ゆくさくさもくさも、舟の早けむ、

▲ゆげひ 鞆負 鞆負ノ約轉語、近衛、兵衛門ノ官ノ稱、「源、落標」かの加茂のみ
づがさうたひし右近のせうもゆげひになりて、

▲ゆふ 木綿 古代ニ楮ノ纖維ヨリ製セル絲ノゴトキモノヲ云フ、織リタルヲ白妙
ト云フ、「徒然」襪にゆふかけたる、「源、襪」かけまくもかじこさあまへにとてゆふに
つけて、

▲ゆふばえ 夕映 夕日ノ光ニ映ルヲ云フ、夕榮ハ當字、「源、幻」あかの花の夕ばえ
していとあもしろく見ゆれば、

▲ゆふづつ 長庚 夕威威ノ義、太白星ヲ云フ、金星ヲ暮天ニ云フ語、今ノ宵ノ明
星ナリ、「萬、十」ゆふづつも通ふ天路をいつまでか仰きてまたむ月人男、

▲ゆふつけどり 木綿附鳥 古代ニ天下騷亂ノ時四境祭トテ朝廷ヨリ鶏ニ木綿ヲ附
ケテ四方ノ關ニ到リテ祭ラルルニ用ケル鶏ヲ云フ、轉ジテ鶏ノ異名トナル、「古今、戀」
逢阪のゆふつけ鳥にあらばこそ、君がゆきさをなくなくも見ぬ、

▲ゆふされば 夕去者 夕シ有ればノ約語、夕方デアレバノ意、去ハ當字、秋さら
ばノ條參看、「六帖、二」夕されば、君をまつちの山どりのなくなぐぬるを立ちもさか
なむ、

▲ゆふして 木綿四手 木綿令垂ノ約語、玉串、注連等ニ垂レシムルモノ、木綿ヲ

用キタルヲ木綿四手ト云フ、今ハ多ク紙ヲ用キル、「堀太」神垣の、三室の山に、霜降れば、ゆふしてかけぬ榊葉をなき、

▲ゆきかふ 行交 行き違ふノ義、彼ハ往キ是ハ來ルサマヲ云フ、「源、早敷」行きかふ時時にしたがひて花鳥の色をも音をも、

▲ゆきすき 悠紀主基 齋潔助齋ノ義、大嘗會ニ建テラルル祭場ノ名ニテ、悠紀ハ正祭場、主基ハ副祭場ニテ、悠紀ハ東方、主基ハ西方ニ建テラル、「中臣壽詞」悠紀、主基乃黒木白木乃大御酒造、

▲ゆゆし 由由 忌忌シノ義、身ヲ忌ミ潔メテ畏コム意、又、忌忌シキ意、畏コムニモ嫌フニモ云フ、轉シテ殊ノ外ナリ、容易ナラズナドノ意、「源、玉葛」涙絶ゆる時なく娘共も思ひこがるるを舟路ゆゆしとかつは諫めけり、「枕、一」高き履子をさへはきたればゆゆしく高し、「著聞、十四」ゆゆしき大雪にこそ、

▲ゆめのうきはし 夢浮橋 元ハ吉野ナル夢回ト云フ地ニ渡セル浮橋ヲ云ヒシガ、後ニハ夢ノ中ノ通路ノ意トス、「新古、春」春の夜のゆめのうきはしとたえして、峯に分かるるよこむものぞら、

▲ゆめゆめ 努力努力 齋メ齋メノ義、慎シミ慎シミテ、又ハ決シテ決シテナドノ意、強ク禁止スル詞ニテ末ハ必打消ニ應ズ、「狭、一」かしこには筑紫の人曉になむゆめゆめだがへ給ふなといひければ、

▲ゆじゆん 由旬 梵語踰繕那 Yojana 限量、又、合應ト譯ス、印度ニ於ケル里程ノ名、一由旬ハ我が(六町一里ニテ)四十里トモ三十里、十六里トモ云フ、「祖庭事苑」此云合也、應也、計度量合應ノ如シ、乃驛邏之類、五百里爲一俱盧舍、八俱盧舍爲二由旬、此當三十里也、梵語或俞由、或云ニ由延、或云ニ踰繕那一皆一也、

▲ゆゑゆゑし 故故 故有リ氣ナリノ意、俗ノ仔細アリサウノ意、「源、總角」御供の人人にも故故しき肴などしていださせ給へり、

▲ゆするつき 泔坏 鬢ヲ梳ルニ用キル水ヲ盛ル器ニテ「泔」米ノ洗水「古クハ土器、後ニ銀器、漆器等ヲ用キル、臺ト蓋トアリ、「新古、戀」久しくまうてこざりける比びんかきいてけるゆするつきの水入りながら侍りけるを見て、

め

▲めいぼく 面目 面目ノ訛音、人ニ合ハスル面、又、人ノ世ニ於ケル名譽ヲ保ツ意、面皮ニ同シ、「空穂、初秋」かへりて、めいぼくありとむかしよりさこしめしかけて、「源、竹川」ひとりをもとがめらるるはめいぼくなくなむ。

▲めがる 目離 目離ノ義、目ヲ放ツ意、見ルコトノ止ムヲ云フ、「伊勢物語」めがるともちもほえなくに、忘らるる、時しなれば、おもかげになつ、

▲めだらう 馬道 古代、禁中ノ殿舎ニアリシ廂間ヲ云フ、又、めんだらうめうたうト云フ、切馬道ト云フモアリ、元ハ馬ニ上ル爲ノ料ナリト云フ、「演繁露」止於馬道、(注)馬道許人上馬處也、「倭名、三」馬道俗音、女多字、向堂之道也、「大鏡、五」帝、馬をいみじうせさせ給ひければ、後涼殿の馬道より通させ給ひて、朝餉の壺に引下させ給ひて殿上人共を乗せて御覽す、

▲めんぼく 面目 めいぼくニ同シ、「史、項羽」縦江東父兄憐而王我、我何面目見之、「狭、四」かばかりの身は何かをしう侍らむ、この世のめんぼくにこそは、

▲めんだらう 馬道 めんだらう條ヲ見ヨ、「長門平家、十」主上をば、時忠卿抱き奉りて雪の御所のめんだらうに立ち給ふ、

▲めのおと 妻妹 妻ノ妹ヲ云フ、神代紀ニ彦火火出見尊ノ妃豊玉姫、御兒ヲ生ミテ海郷ニ歸リ給ヒシヨリ、其ノ妹玉依姫留マテ侍養セシコトアリシキリ、後世乳母ノ稱トシ、約語ニめのとト云フ、「神代紀、下」是後豊玉姫聞ニ其兒端正ニ心甚憐重、欲ニ復歸養ニ於テ義不可、故遣ニ女弟玉依姫ニ以來養者矣、

▲めのと 乳母 古名ちおも、母ニ代リテ小兒ヲ乳養スル女ヲ云フ、(前條參看)おも、ちのひとナド云フ、又其ノ夫ヲナツト傳トスルヨリ傳ヲモ云フ、「神代紀、下」彦火火出見尊子、時權用ニ他姫ニ歸以乳養、「源、桐壺」親しき女房御めのとなどをつかはしつ、▲めのとご 傳子 傳トシタル者ノ子ヲ云フ、「保元、上」傳子の矢前拂ノ須藤九郎家季、

▲めのわらは 女童 女ノ童ヲ云フ、童トハ散髪ニシタル年幼キモノヲ云フ、又側ニ召仕テ少女ヲ云フ、女孺ナリ、「源、東屋」いとらうたしと思ふめのわらは侍リ「平家、六」女の童の長持の蓋下げたるがなくなにてぞありける、

▲めくばす 胸、目語、目成 目食ノ義、目ヲ以テ吾ガ思フ意ヲ通ズル意、俗ノ目クハセヌルニ同シ、「史、項羽」須臾、梁胸籍、「源、夕顔」つさしろひめくばす、「平治、

中「鎌田にまじり」と申はせて、

▲めがきぢやう 馬部吉上 馬寮ノ下衆ノ者ヲ云フ、(まぢやうノ條參看)「盛衰、二十五」召し具したる馬部吉祥を二三人とどめて、

▲めて 馬手 右ノ手ヲ云フ、(弓手ノ條參看)「宇治拾、十五」肩ぬぎてめてうしろ見まはして、

▲めてたし 可愛 愛甚シノ義、深ク愛スベシ、殊ニ賞スベシノ意、「古今、春」残りなく散るぞめてたき櫻花ありて世の中はてうのうければ、○又、殊ニ麗ハシ、俗ノ潔構ノ意、「源、桐壺」さまかたらのめてたかりしこと、○又、悦バシク祝フベキ意、新年めでたし「ナド、

▲めざまし 目醒 目進マシノ義、事ノ案外ニテ心ノ驚クバカリナリノ意、「源、桐壺」御方方めざましきものにとしめそねみ給ふ、瞠若ノ意ニアタル、

▲めしひ 盲、瞽 目廢ノ義、目ノ物ヲ見ル官能ノ失セタルヲ云ヒ、又、其ノ人ヲモ云フ、俗ノめくらニ同シ、「玉葉、釋教」めしひたる龜の浮木にあふなれやたまたま見たる法のはし舟、

▲めひ 姪 女甥ノ義、兄弟女ヲ云フ、通ジテ姉妹ノ女ヲモ云フ、「倭名、一」釋名云、兄弟之女爲姪和名、米飛

▲めもあやに 目モ奇ニノ義、目モキラキラスル程ニノ意、物ヲ見テ驚歎スル時ニ云フ語、「源、總角」今すこし思ひよらぬ事のためもあやに心づきなうて、

▲めもあてられず 見ルニ堪ヘズノ意、あてハ目ヲ着クルヲ云フ、「方丈記」かはりゆくかたちありさまもあてられぬことおほかり、

み

▲みろく 彌勒 梵語梅怛廉耶 *Maitreya* 慈氏ト譯ス、彌勒ハ舊譯ナリ、當來ノ佛ノ名、慈氏ハ姓、阿逸多ハ字ナリト、華林園内龍華樹下ニ成佛ス、當ニ來ルベキ世ヲ指シテ彌勒ノ世ナド云フ、「觀下生經」時修梵摩、即爲子立ノ字名曰彌勒、「夫木、二十一」わが戀のかねのみたけのかねならばみろくの世にもあはましものを、

▲みはかし 佩刀 貴人ノ佩刀ヲ更ニ尊ミテ云フ語、「紫日記」宮は殿抱き奉りて、みはかしは小少將の君、

▲みどりのはやし 緑林 剽盜ノ異名、漢ノ亡命者緑林ニ聚マリ掠奪セシヨリ出デタル語、緑林ヲ訓讀セルナリ、「漢書、輿地」諸亡命聚緑林山中、（注）緑林山荆州山名也、「夫木、二十」はや過ぎよ、人の心は、横田山、みどりのはやし、かげにかくるる、

▲みどりこ 緑子 美善兒ノ義、五六歳ノ少兒ノ顔色ノ麗ハシキヲ賞メタル語、五六歳ナル少兒ヲ云フ、髪ノ色ノ深黒ナルヲ云フトノ説ハ非ナリ、緑兒ハ當字ナリ、「萬十六」緑子のはふこが身には、

▲みとしろ 御戸代、御刀代御處代ノ義、神供タルベキ稻ヲ作ル田ヲ云フ、神田ノ字ヲ充ツ、「神功紀」爰定ニ神田而一佃之時、「夫木、二十二」さなみや、志がのかみたのみとしろに今日とる苗は萬代のため、

▲みちのくにがみ 陸奥紙 檀紙ヲ云フ、古代ハ陸奥ノ特産ナリシヨリ云フトゾ、又、みちのくにがみトモ云フ、「源、未摘」みちのくに紙の厚肥をたるに匂ひばかりは深うしめ給へり、

▲みちゆきぶり 道行觸 旅行中ニテ出逢フヲ云フ、轉ジテ道中ノ日記ヲ云フ、「躬恆、下」玉簪のみちゆきぶりに、山櫻、をるとや我を花の思はむ、

▲みちもせに 路も狭にノ義、路モ狭キ程、即路一面ニノ意、みちもせをト云フコトノ非ナルハ庭もせを、野もせをト同例ナリ、「千載、春」吹く風をなこそこの關と思へども路もせにちる山櫻かな、

▲みちすがら 途其儘ノ義、途上途中ナドノ意、「源、夕顔」いかなりけむ契りぞと道すがらもぼさる、

▲みをつくし 漣標 水脈之申ノ義、遠淺ノ海ノ水脈（水路）ヲ識ス爲ニ設ケタル杭ヲ云フ、今ノみをぐひナリ、歌ニハ身を盡シニ言ヒ掛ク、「萬、十二」みをつくし、心つくして思へかも、ここにももとな、ゆめにし見ゆる、「延喜、雜式」凡難波津頭海中立漣標若舊朽折者搜求拔去、「倭訓栞」漣は水零二合をもて、水尾の義に取るなるべし、字書

の正義にあらず、荀子に、水行者表深、表不明則陷、注に表標準也と見えたり、

▲みかど 帝 眞嚴人ノ義、平人ト殊ニ種姓ノ異ナル人ノ意、即、天皇ヲ申ス語、御門ト當字セルヨリ、御門ノ義トスルハ非ナリ、朝廷ヲみかどト云フトハ語意別ナリ、「古今、春」仁和のみかどのみこにあはしましける時、「源、若菜」かしてきみかどの君も位を去り給ひぬるに、

▲みかど 朝廷 帝ノ座シマス宮ノ義ヨリ皇宮ノ意ニ云ヒ、又其ノ知ロシメス國ノ意、更ニ轉シテ皇宮ノ御門ヲ云フ、「續紀、廿五」朝廷「源、須磨」もろこしにもわがみかどにても、

▲みかさのやま 三笠山 神ノ社ノ後ニ控ヘタル山ヲ云フ、御蓋ノ義ニ取ルナリ、三笠ハ當字、春日ノ三笠ノミ特ニ有名ニテ遂ニ固有名詞トナレド何レノ社ニモアルベキナリ、「土佐、上」天の原ふりさけ見れば春日なるみかさの山に出でし月かも、○又、近衛ノ大中少將ノ異名、「後撰、雜」宰相中將より中納言になりて又の年賭弓の遠立のあるじに罷りて是彼思ひを述ぶる序に、故郷の三笠の山は遠けれど聲は昔の疎からぬかな、又拾遺ノ歌ニモ據レリト云フ、

▲みかきもり 御垣守 禁中門門ノ衛士ヲ云フ、夜ハ篝ヲ燒キテ守ルヨリみかきもり衛士ナド云フ、「衛門式」凡伊勢齋内親王初齋之時、差門部二人衛士一人爲門衛「詞花、戀」みかきもり、衛士の焼く火の夜はもえ、

▲みだ 阿彌陀ノ略語、其ノ條ヲ見ヨ、

▲みだい 御臺 御臺盤ノ略語、御食ヲ載スル臺、今ノ Table ノゴトキモノヲ云

フ、轉シテ御食事ヲ云フ、後ニ御臺所ノ略語、「源、末摘」御臺祕色やうのものもろこしの物なれど、「源、東屋」惱ましとして大殿籠りくらしつ、御だいこなたに參る、

▲みだいどころ 御臺所 御臺盤所ノ略語、大臣大將將軍家ノ夫人ノ尊稱、略シテ御臺トノミモ云フ、(臺盤所ノ條參看)、

▲みたる 亂 羅行四段活用ノ語ニテ亂すノ意、「伊勢物」ぬきみたる人こそあるらし、白玉のまなくも散るか袖のせばきに、「萬代」春風は吹きなみだりそ吾妹子がかづらにすてふ青柳の絲、

▲みたまのふゆ 恩頼 御靈ノ榮ノ義、神ノ御靈ノ威徳ノ遠ク及ブ意、因リテ天神ノ御恩ノ意トス、「神代紀、上」大己貴尊與ニ少彦名命ニ戮力一心、經營天下、復爲顯見蒼生及畜産ニ則定ニ其療養之方、又、爲攘鳥獸昆虫之災異ニ則定ニ其禁厭之法、是以百姓今成蒙恩頼、

▲みたけさうじ 御嶽精進 大和ノ吉野ノ金峯山ニ詣デムトスル人ノ、其ノ前ニ百

日ナド精進スルヲ云フ、「定頼」みたけさうじしてつれづれにおぼされけるに、

▲みぞ 御衣 御襲ノ義、衣ノ敬語、貴人ノ料ナルニ云フ、又、おんぞトモ云フ、

「源、桐壺」みぞたてまつりかへて、

▲みぞかけ 衣架 御衣懸ノ義、衣桁ニ同シ、但敬語ナリ、「倭名、十」爾雅云、
簇、和名美懸衣架也、「源、葵」みぞかけの御さうぞくなど例のやうにしかけられたる
に、

▲みそなはす 見行、看行 見シ行爲ノ義、見シハ見給フノ義、御覽遊バサルナド
ノ意、見ルノ重キ敬語ナリ、「古今、序」今も見そなはし後の世にも傳はれとて、

▲みづはくむ 稚齒萌ノ義、老人ノ齒ノ脱チテ更ニ小齒ノ生ズルヲ云フ、又、みづは
さすト云フ、長壽ノ意ニ云フ、轉ジテ甚シク年老イタルコトニ云フ、みづわくむハ誤ナ
リ多ク水ハ汲ムノ意ニ云ヒ掛ク、「大和」年経れば我が黒髪も老ら河のみづはくむまで
老いにけるかな、

▲みづほのくに 瑞穂國 眞美穂國ノ義、稻ノ美シク榮ユル國ノ意、日本國ノ異名、
更ニ美稱シテ豊葦原瑞穂國トモ云フ、

▲みづらまや 水驛 水路ノ驛舍、船路ノ驛ヲ云フ、轉ジテ舊街道ノ間ノ宿ノ類小休
憩所ニテ飲食スル所ノ意、更ニ轉ジテ正月ノ男踏歌ニ人ヲ饗應スルニ用テ節シテ酒肴

ノミヲ饗スルヲ云ヒ、饗膳ヲ用キルヲ飯驛、葛驛ナド云フ、踏歌ノ人ノ所所ヲ巡行スルヲ
驛路ニ比シテ云フナリ、又、轉ジテ何ノ趣向モナキヲ云フ、「源、初音」今年は男踏歌あり
夜も漸く明け行けば水らまやにて事をがせたまふべきを、「源、竹川」みづらまやにて夜
更けにけりとして逃げにけり、

▲みづぐき 水莖 眞美莖ノ義、若草ノ莖ノ細ク美シキヲ筆ノ莖ニ喩ヘテ筆ノ意ト
シ、更ニ筆シテ書キタル手跡(書)ノ意トシ更ニ轉ジテ消息文ノ意トス、舊説ニ古ハ手
紙ヲ遣ルニ梓ニ玉ヲ附ケテ遣ルナド云フハ玉梓ノ字ニ拘ハリタル説ニテ取ルニ足ラ
ズ、「源、幻」ふりあつる御涙のみづぐきにながれそふを、「拾遺」けふみづぐきの跡見
れば、「狭、一」稀稀一くだりも書き流し給ふみづぐきの流れをば、

▲みづぐきの 水莖の 岡ノ枕詞、前條ナルみづぐきト同語ニテ若草ノ莖ノ若ト云
フベキヲをカト轉ジテ岡ノ枕詞トセルナリ「萬、十二」みづぐきの岡の葛葉を吹きかへ
し、あもしろこらが見えぬ頃かも、「十六夜」みづぐきの岡の葛葉かへすがへすも書き
置く跡たしかなれども、

▲みづて 水手 歌ノ書キ方ノ一種ノ名ニテ水ノ流ルルサマニ書クモノ、葦手ノ類

ナリ(其ノ條參看)、「著聞、五洲濱のこころばへに水手にて歌二首、

▲みつぎ 貢 御齋ノ義、人民ヨリ力作シテ獲タル物ヲ獻ジテ天皇ヲ崇ムルヲ云フ、御供給ノ義トスルハ名分ヲ知ラヌ説ニテ、取ルニ足ラズ、「拾遺、神樂歌みづぎつむ大倉山は常磐にて色もかはらず萬代やへむ、

▲みづし 御厨子 厨子ノ敬語、轉ジテ御厨子所ノ婢ヲ云フ、所謂みづしめナリ、「落窪」あこぎ御手水かゆいかでまゐらむと思ひてみづしにや語らはましと思へど、

▲みづしどころ 御厨子所 禁中ニテ朝夕ノ供御ヲ調進スル所ヲ云フ、後涼殿ノ西庇ニアリ別當預所衆等アリ、「後撰、春みづし所に候ひけるころしづめるよしを歎きて、

▲みつせがは 三途川 三途川ニ同ジ、又三途川、三途川ハ、佛説ニ其土ニアリト云フ川ノ名ニテ、火途(地獄)血途(畜生)刀途(餓鬼)ノ三惡道是ノ川ヨリ別ル、此ノ邊ノ樹下ニ老婆居リテ死者ノ衣ヲ奪フト云フ、所謂三途川ノ婆ナリ、俗訛シテしやうつかのばばト云フ、奪衣婆是ナリ、「祖庭事苑」四解脱經以ニ三途對三毒一火途瞋恚、二刀途慳貪三血途愚癡乃至塗道也謂惡道也、「要覽」塗猶道、若依梵語云阿波那迦低此云惡

道二道是因義由履而行也「拾遺、雜」三瀬川渡るみさをもなかりけり、何に衣をぬぎてかくらむ、

▲みながら 悉皆 皆ながらノ略語、殘ラズスベテナドノ意、「古今、雜」紫の一本ゆゑに武藏野の草はみながら哀とぞ見る、

▲みなづき 水無月 眞夏月ノ義、陰曆六月ノ倭名ニテ、水無ハ當字ナリ、「伊勢物語」みなづきのつごもり、

▲みのしろごころも 蓑代衣 蓑ノ代リニ上ニ着ル衣ナリト云ヘド定カナラズ、「後撰、春」ふる雪のみのしろ衣打着つ春來にけりと驚かれぬる、

▲みぐし 御首 御殿ノ義、首、又、頭ノ敬語、轉ジテ髮ノ敬語、「方丈記」東大寺の佛のみぐしちちなとして、「源、東屋」いと多かる御ぐしなればとみにもえほしやられず、

▲みくしげどの 御匣殿 御櫛笥殿ノ義、禁中貞觀殿ノ中、后町ノ北ニアリテ御裝束ヲ司ル所ヲ云フ、上臈女房ヲ別當トス女藏人アリ、又、大臣家ニモ此ノ名アリ、「源、玉葛」みくしげどのなどにもまうけの物めしあつめていろあひしさまなどことなるをとらせ給へれば、

▲みやづかへ 宮仕 宮中ニ奉仕スルヲ云フ、轉ジテ貴人ニ仕フルヲ云フ、「源、桐壺」この人の宮づかへの本意かならずとげさせ奉れ、「伊勢物語」宮づかへの始にただなほやはあるべき。

▲みやつこ 造 御家處兒ノ義、上古ニハ世襲ノ官名ニテ姓ナリシガ、後ニ姓ノ等級一定セラルルニ及ビテ連ニ混ゼリ其ノ姓ニ伴ノ造、國ノ造アリ、

▲みやつこ 御奴 官ニ仕フル者ヲ云フ、とものみやつこハ伴ノ御奴ニテ一部隊モテ仕フル者、即仕丁ヲ云フ上古ノ伴ノ造ト語同ジクシテ意大ニ異ナリ、「拾遺、雜」殿守のとものみやつこ心あらばこの春ばかり朝ぎよめすな、

▲みやらぶ 名簿 名札ノ意、物ニ自己ノ名ヲ書キタルモノヲ云フ、古ハ貴人ニ見エ又師ニ入門シ又他ニ服従スル時ナドニ捧ゲテ證據トスルナリ、「宇治拾、十一」御弟子になり候はむといひて懷より名簿引出てて取らせけり、「宇治拾、十一」たちまちにみやらぶを書きて文挾にはさみてさしあげて(中略)守殿みて彼のみやらぶをうけとちせて、

▲みやらぶ 命婦 五位ニ叙セラレタル官女ノ稱ニテ内命婦ト云フ、又、五位ノ官

人ノ妻ヲ外命婦ト云フ、「周禮天官、注」内命婦、謂ニ九嬪世婦女御、外命婦謂ニ卿大夫妻、「同春官、注」命有ニ爵命之義、○又、後ニ中薦ノ女房ヲ云フ、多ク夫ノ官名ヲ冠ラセテ侍從命婦、鞠負命婦、監命婦ナド云フ、○又、稻荷ノ神ノ使ナリトスル狐ノ異名トス、稻荷ハ女神ナルヨリ女官ニ准ジタルナルベシ、

▲みやま 眞山、深山 みハ發語ニテ意ナシ、山ト云フヲ強メタルノミ、後ニ又奥山ノ意トス、「神樂歌」みやまには霰降るらし、外山なるまのさのかづら色づきにけり、「古今、雜」かたちこそみやまがくれの朽木なれ、心は花になさばなりなむ、

▲みやこほこり 都誇 都人タル得意ヲ誇ル意、今ノ都自慢ニ同ジ、「土佐、下」かかれども淡路のたうめの歌にめでてみやこほこりにもやあらむ、

▲みやすどころ 御息所 御休息所ノ義ニテ天子ノ御休息所ノ意、御便殿ナドニ同意、みやすんどころト云フ、「源、桐壺」かうぶりし給ひて御やす所にまかて給ひて御衣かへ奉りかへて、○又、御子ヲ生ミ進ラセタル女御更衣ノ尊稱トシ、又、東宮、親王ノ妃ノ尊稱トモス、「古今、春」二條の後の東宮のみやす所ときこえける時、

▲みまかる 身罷 身眞離ルノ義、現世ヨリ冥土ニ行ク意、人ノ死スルヲ云フ、物

故ニアタル、「古今、羈旅」男まかりいたりてすなはちみまかりにければ、

▲みまぞかり 御坐スガ有リノ義、いまだかりヲ更ニ敬語トセル語、「伊勢物語」もほ

さちとどの榮華のさかりにみまぞかりて藤氏のこととに榮ゆるを思ひてよめる、

▲みまのみこと 御孫尊 御身ノ尊ノ義、大御身ヲ大御身ト云フガゴトク、天照大

神ノ御子孫タル御身ノ意ニテ孫ノ字ハ當字ナリ、又、皇孫トノミモ云フ、「續紀、十五」

天津神みまのみことのととりもちて、

▲みまし 汝 御齋大人ノ義、尊キ御身ト云フ意、對稱ノ代名詞ニ用キレド古クハ汝

ト云フ意ノ時ハ皆な(なんぢノ意)トノミ云ヘリ、御座ノ義トスルハ非ナリ、「續紀、三」

美麻斯乃父止坐天皇、

▲みげうしよ 御教書、下文ノ敬稱ニテ、院ヨリ下サルルニ云ヒ、又、關白ナルニ

モ云フ、室町將軍ノ下文ニモ云フ、將軍ノ名ヲ以テ管領ヨリ出ダスモノニテ名及判ア

リ、次ナルニ御内書、奉書アリ、御教書尤貴キモノナリ、

▲みけし 御衣 御着シノ義、シハ左行四段ノ敬語、着サセ給フモノノ意、即尊キ人

ノ衣ヲ云フ敬語、「古事記、上」ぬばたまの黒きみけし、「萬、十」あしだまも、手玉もゆ

らに織る縞を君が御衣に織ひあへむかも、

▲みけしきたまはる 御氣色賜 俗ノ御機嫌ヲ伺フ、又、物ヲ申シ上グナドノ意、ノ

様子ヲ見テスルヨリ云フ、「落窪、三」殿に御けし給はるべきことありてなむまゐり

たるときこえたまへば、

▲みぶ 御封 封戸ノ略語ヲ敬シタルニテ皇族ニ附キテ申ス語、封戸ニ同ジ(封戸

ノ條參看)「源、藤裏葉」太上天皇に準ふる御位得給ひて、みぶ加はりつかさかうぶりな

どみなそひ給ふ、

▲みふゆ 三冬 眞冬ノ義、冬ト云フニ同ジ、三ハ當字ナリ、「十六夜」頃はみふゆた

つはじめの定めなき空なれば、

▲みこと 尊、命 眞殿人ノ轉語、上古、神又ハ高貴ナル人ノ名ニ添フル敬語ナルヲ

後ニハ汎ク對稱ノ名ニ添ヘテ用キラル、但日本書紀ノ書例ニハ至貴曰レ尊、自餘曰レ命ト

定メラレシガ和銅ノ多胡ノ碑文ニハ石上尊ノゴトク臣下ニ尊ノ字ヲ用キ、古事記ニハ

總ベテ命ノ字ヲ用キラレタリ、御事、御言ナドノ義トスルハ取ルニ足ラズ(御門ノ條

參看)「神代紀、上」便化爲レ神號ニ國常立尊、至貴曰レ尊、自餘曰レ命、並則ニ美譽等ニ也、

命、並則ニ美譽等ニ也、

「み」一三三

神號曰「級長戸邊命」亦曰「級長津彦命」、是風神也、「萬、十七」はしきよし汝背のみこと、「萬、二十」はしきよし妻のみこと、「萬、九」はしむかふ弟の命は、

▲みことりのり 詔 御言宣ノ義、御言ハ天子ノ命令、宣ハ汎ク告グ給フ義、即、天子ノ命令ヲ一般ニ告グ給フ意、祝詞ノのりモ同義ナリ、之ヲ文書ニ記スニハ詔、勅、ノ別アリ「公式令」詔書、勅旨、同是綸言、但臨時大事爲「詔」、尋常小事爲「勅也」、「夫木、春」初春の今日はかきこみことりのりのべよと千代のしるしをぞさく、

▲みこともち 宰司 御言持ノ義、天皇ノ御言ヲ承ケ持チ行キテ其ノ國ノ政務ヲ總理スル意、上古ニ、諸國ニ出デ居テ地ヲ治ムル官ヲ云フ、太宰帥國司ノゴトキ是ナリ、「萬、十七」すめろぎのをす國なれば、みこともち立別れなば、

▲みこまき 御國忌 天子皇后等ノ御忌日ヲ云フ、「太政官式」凡國忌者、諸司就寺供齋會事、但東西兩寺參議已上及辨外記史各一人太政官史生官掌各一人參、「古今、哀傷」深草の帝の御國忌の日よめる、

▲みてぐら 幣帛 令充坐ノ義、種種ノ神幣ヲ數多神前ニ置キ足ハシ奉ルヨリ云フ、語、御手坐御栲座ノ義ナド云フ皆非ナリ、即神ニ捧グル種種ノ物ヲ云フ、後ニハ紙ヲ

種種ニ切り串ニ挿ミテ奉ルヲモ云フ、是ハ木綿ノ遺製ナラム、「神祇式」宇豆能幣帛、「拾遺、夏」神祭る宿の卯の花白妙のみてぐらかとぞあやまたれける、

▲みあかし 御燈 神佛又ハ貴人ノ用タル燈ヲ云フ敬語ニテ、御燈明ノ意ナリ、「空穗、藤原君」土をまるがして是を佛といはば御あかし奉り神といはむには天竺なりとも御みてぐら奉らせ給へ、百萬の神七萬三千の佛に御あかしみてぐら奉り給はば佛神とのちのより來給はむ、

▲みあらか 御殿、御舍 御在處ノ義、神ノマシマス處ノ意ニテ正殿ノ敬語トス、「古語拾遺」令手置帆負彦狹知二神以天御量一伐大峽小峽之材而造瑞殿古語美豆能、「古語拾遺」魚香古語正殿、謂之魚香古語美豆能

▲みあれ 御生、御別 御生ノ義、別雷命ノ生レマセル日ナルヨリ云フ、山城賀茂神社ノ陰曆四月中ノ申ノ日ノ祭ノ名、其ノ翌日ナル酉日ヲ葵祭ト云フ、「萬代、夏」人も皆かづらかさして千早振かものみあれにあふひなりけり、又、日吉社ニモ云フ、

▲みさを 操、節義 眞眞青ノ義、常磐木ノ葉替セタラ人ノ志行ノ常ニ變ラヌニ比シテ云フ語、固ク志ヲ守リテ變ラヌ意ヲ云フ、水竿ノ義トスルハ非ナリ、「源、東屋」深

き山の本意はみさをになむ侍るべきをとて、うちなくも。

▲みさをつくる 作操 常ノ心ヲ堅ク執リテ崩サヌヤウニスル意、本心ヲ改ムル意ニモ解スベシ、「深、帚木」上はつれなくみさをつくり、「方丈記」さのみやほみさをもつくりありあへむ是ハ本心ヲ變ズル意ニ云フ、反語ナレバナリ、

▲みささう 御莊 貴族ノ所有ナル莊園ヲ敬シテ云フ語、御莊園ト云フニ同シ、「源、鈴虫」御封のものども國國の御莊御牧などより奉るものどもはかばかしさまものは、皆かの三條の御倉にをさめさせ給ふ、

▲みささき 御陵 御少小城ノ義、皇宮ノ境域ヨリモ小サキ場所ノ意、皇宮ノ境域ハ極メテ大キナルニ對スル稱、山ヨリモ少サク造ル義ト云フハ非ナリ、天皇、皇妃ノ御墓所ノ稱ナリ、其ノ制高ク大キク陵ノゴトクスルヨリ陵ノ字ヲ充ツ、「枕、一」みささきは、鶯のみささき、かしは原の陵、あめの陵、

▲みき 御酒 酒ノ敬語、酒ハ古名クシニテ奇ノ義(藥ノくすト同語、くすしノ條參看)ナルヲ約語ニテキト云フナリ、御ハ例ノ敬語ナリ、「神功紀」このみきはわがみきならず、やまとなす大物主のかみしみき、「造酒ヲみきト讀ムハ造酒司(上古宮内省

ノ被官)ノ字ヲ用キルナリ、

▲みざり 砌 軒ノ下、又ハ階ノ下ノ登ナル所ヲ云フ、水限ノ義ト云フハ確ナラズ、字、古ク切ニ作ル後ニ砌ニ改ム、「漢書、外戚傳」切皆銅沓金冑、(注)切門限也、「徒然」大みざりの石をつたひて雪に跡をつけず「西宮記」至仁壽殿西砌下ニ拜舞以雨不立中庭、

▲みゆき 御幸 古クハみゆきト讀ミテ天子院其ノ區別ナカリシガ、後ニ其ノ文字ヲ代ヘテ御幸(ごかう)ト讀ム事ニナレリ、「續千載、釋教」正和二年法皇高野山に御幸侍りし時、「玉葉、賀」大宮院西園寺にて従一位貞子の九十賀給はせけるに行幸、御幸春宮行啓などありて、

▲みゆき 行幸 御行ノ義、天子ノ他所へ出デ行キ給フヲ云フ、行幸トモ云フ讀癖アリ又臨幸トモ云フ、其ノ還リマスヲ還幸、還御ナド云フ、東宮皇后ニハ行啓ト云フ、「狹、四」又の年の秋冬は、大原野春日平野などの行幸あり、はじめてめづらしき御ゆきなるにそへても、

▲みみずがき 蛭蛸書 蛭蛸ノ這ヒ廻轉ガゴトクナル文字ヲ書クヲ云フ、拙キ書方

ヲ形容スル語ナリ、「信明」かへりごとくみみずがきをしておこせられたれば、
▲みじろく 身退 身後退ノ義、身ヲ動かサヌ云フ、「源、若紫」さすがに、むづかしう
ねもいらすおぼえてみじろぎふしたまへり、

▲みしほ 御修法 古代ニ、正月大内裏ナル眞言院ニテ行ハルル佛事ノ名ニテ、八
日ヨリ七日間東寺ノ一長者參リテ修ス、之ヲ後七日ノ御修法ト云フ、元日ヨリ七日マ
デハ公事多キ故ニ參内セズ長者ノ本坊ニテ行フ、因リテ之ヲ後七日ト云フ、金剛界胎
藏界ヲ隔年ニ修ス、又みすほふトモ云フ、眞言院ナクナリテ後ハ紫宸殿ヲ用キラル、
〔公事根源〕眞言院の御修法正月八日より七日おこなはる、

▲みすずかる 水簞刈、信濃ノ枕詞、みハ發語、簞ハ篠ノ意、篠ヲ刈ル篠ノ野ト云
フベキヲ科野ニ言ヒ掛クルナリ、「萬二」みすずかる信濃の眞弓引かずしてをはぐるわ
ざと、しるといはなくに

▲しろたへ 白妙、白栲、白細 栲布ノ色ノ白キニツイテ云フ語ニテ、妙、細ハ當字ナ

リ、栲布ハ栲皮ヲ晒シテ木綿トシ（之ヲ白和幣ト云フ）績ミテ絲トシテ織レル布ナリ、
又、たへトノミモ云フ、上古貴賤上下一般ノ着用スル所ナリ、「萬、三」白細ニ舍人よそ
ひて、「萬、三」白栲に服取着て、○又、白キヲ形容スル語トス、「萬、七」白妙の雲か隠
せる、「萬、十」梅が枝に、啼きてうづるふ鶯の羽白妙に沫雪ぞふる。

▲しろしめす 知食、所知 知シ食スノ義知シハ知り給フノ意之ヲ更ニめすニ續ケ
テ一層重キ敬語セルモノニテ、俗ノ御知り遊バサルニ同シ、めすハきこしめすおほじ
めすト同シ用法ナリ、「古今、序」かかるに、今、すめらぎの天の下しろしめすこと

▲しばたたく 繁叩ノ義、睚ヲ展開閉スルコト、又ハ、屢瞬スルノ意、「著聞、十七」た
だ目ばかりしばたたくさけり、

▲しばなく 鳴 繁鳴ノ義、鳥ノ屢鳴クヲ云フ、「六帖、六」深山には雲居たなびきあ
けにけり、川の瀬ごとくに千鳥しばなく、

▲しほのとほそ 柴樞 柴ノ戸ノ意ニ用キラル、元來樞ハ楣ト闕トニ穿チテ戸ノ開
閉ニ便スル穴ノ名ナルヲ誤リタルナリ、（とほそノ條參看）「玉葉、雜」山里の柴のとほ
そは雪閉ぢて年のあくるもしらさずやあるらむ、

▲しほやま 柴山 小木山ノ義、矮樹ノ生ヒタル山ヲ云フ、「後拾遺、冬」いかばかり、降る雪なれば、しなが鳥、るなのしほやまみちまどふらむ、

▲しほぶる 咳嗽 しほぶくと同意、咳セキバラヒスルヲ云フ、老人ノコトニ云フ、「源明石」何とも聞きわくまじきこのものしほぶる人どもすすろはしくて、濱風ハシカゼひきありく、○又、老人ナラズシテ、殊更ニ咳セキシテ容子ナルニモ云フ、「萬、十七」歸り來てしほぶれつぐれ、

▲しほぶるひびと 咳嗽人 しほぶかひびとノ誤ニテ咳セキスル老人ヲ云フ語ナリ、(しほぶるノ條ヲ見ヨ)「源、柳」見奉り送るとてこのものにあやしきしほぶるひどもあつまりて、

▲しほぶく 咳嗽 繁吹シラフクノ義、咳セキヲスルノ意、其ノ病ヲしほぶきやみト云フ、又、延音言ニテしほぶかひトモ云フ、但、自然ニ病ニテ發スルヲモ殊ニコワツクルヲモ云フ、しほぶるニ二義アルニ同ジ、「源、手習」尼君しほぶきあぼれて起きにけり、「源、若紫」犬夫妻戸をならしてしほぶけば、

▲しほとく 鹽解 乾ケル鹽ノ解クルニ比シテ人ノ涙ニ袖ノ濡ルルヲ云フ、しほとくるニ同ジ、「榮華、月宴」五月のさみだれにも哀にてしほとけくらし田子の袂たもとに劣らぬありはるにて、

▲しほち 新發意 佛教ノ語ニテ、新ニ佛道ニ入りタル人ノ稱トス、但、入道ト云フハ三位以上ノ人ニ限リテ稱スルヨリ、以下ナルヲ新發意ト云フ例ナリト、又しんぼちトモ云フ、「源、若紫」かの國の前の守しほちが娘のかしづきたる家いといたしかし、「岷江入楚」御堂關白出家以後世皆稱ニ入道殿ニ其時憚たはラナシテ世間ニ入道ト云フコトナシ、滿仲モ自新發意ト號ス、(入道ノ條參看)

▲しほたる 鹽垂 海人ノ袖ノ濡レタルヲ云フ語ニテ、潮水ヲ垂ラスヲ云フ、「拾遺、雜戀」仁和の御屏風にあまのしほたるる所に鶴鳴く、○又、涙ニテ袖ノ濡ルルヲ云フ、「拾玉」あさりするあまならなくに我が袖のうちしほたれていづちゆくらむ、○又、轉ジテ歎キニ沈ム、泣キ入ルナドノ意トナル、「源、桐壺」御しほたれがちにのみちはしますと語りて、「大鏡、八」七才にて舞せさせ給へるばかりのことこそ侍らざりしか、萬人しほたれぬ人なかりけり、○又、齋宮ノ忌詞ニ泣くヲ云フ、「齋宮式」泣稱

鹽垂

▲しほさる 潮騒 騒潮ノ約音言ニテ潮ノ寄セ來ル時ニ潮ノ高ク浪ノ騒ギ立ツヲ云フ(萬、一)しほさるにいらこの島へ漕ぐ舟に妹乗るらむか荒き島を、

▲しほじり 鹽尻 鹽濱ニテ沙ヲ積ミ上ゲテ圓ク高ク塚ノヤウニシタルモノヲ云フ、此ニ潮水ヲ汲ミカケテ日ニ晒スナリ、鹵坵ノ字ヲ充ツ、「伊勢物」なほはしほじりのやうになむありける、

▲しほぜ 潮瀬 潮ノ流ルル所ヲ云フ、「千載、雜」礎おろす方こそなけれ、伊勢の海のしほぜにかかる蟹の釣舟、

▲しへたぐ 虐 甚シク攻ムル、又、深ク苦シムナドノ意、非道ニ扱フナドニ同シ、又、せたくトモ云フ、「保元、下」人民をしへたぐる由を認へ申しければ、「徒然」人を苦しめものをしへたぐることを賤しき民の志をも奪ふべからず、

▲しと 小便 濕るノ義ナラム、小便ノ異名ナリ、今ノ俗語ニシシ、シット云フモ若語ノ遺レルナラム、「紫日記」ある時はわりなきわさしかけ給へるをこの宮の御しとに濡るるはうれしきわさかな、

▲しどろに 取次 次第モナク打亂レタルヲ形容スル副詞、今ノ俗ニ藤次モナク、又シドロモドロニト云フニ同シ、「千載、秋」踏みしだき朝行く鹿や過ぎぬらむ、しどろに見ゆる、野路の刈萱、

▲しどろもどろに しどろニもどろヲ重ネテ甚シク打亂レタル狀ヲ形容セル副詞ナリ、もどろハみだれノ轉語ナリ、「源、梅枝」亂れたるさうの歌を筆にまかせて亂れがき給へるさま見所限りなししどろもどろに愛敬づき見まほしければ、

▲しどけなし 疎脱 取リシマリナシノ意、「源、常木」直衣ばかりしどけなく着なし給ひて、「源、末摘」御髪つきのしどけなきをつくるひ給ふ、

▲しとき 黍餅 白漸ノ義ナラムト云ヘド確ナラズ、祭ニ用キル米ノ粉ニテ作レル餅ヲ云フ、今ノ鳥子餅ノゴトキ形シタルモノナリ、「倭名、十二」黍餅、漢語抄云、黍之度祭餅也、「宇治拾、四」しときをせさせて一をしき取らせれば、

▲しとみ 節 風止ノ義、格子ヲ上ゲタル時ニ云フ語、下ロセルヲ格子ト云フニ對ス、其ノ物ハ格子ニ同ジ、(格子ノ條參看) 下止ノ義トスルハ非ナリ權ヨリ吹キ下シ來ル風ヲ止ムル爲ニ用キルナリ、下ヲ止ムルニアラズ、「源、夕顔」門はしとみのやうなる

を、押あげたるみいれのほどなくものはかなきすまひを、「徒然」遺戸は蔀のまよりもあかし、

【七一三三四】

▲しぢ 榻 牛車ノ轆ヲ据ウル臺ヲ云フ、形机ノゴトク四脚ニテ上ノ板ノ中央ヲ格子ニシテ錦ナドヲ張リタリ、「徒然」しぢにたてたる車の見ゆるも都よりは目とまる心地して、

▲しぢのはしがき 榻の端書 戀歌ナドニ榻の端書ト詠メルハ古代ニ或男、女ニ懸想シテ九十九夜マデ通ヒテ車ノ榻ニ其ノ數ヲ記シタリシガ百夜ニナル夜故障アリテ逢ハズナリシ故事ヨリ云フ、「千載、戀」思ひさや榻のはしがきかきつめて百夜も同じまゐるねせむとは、

▲しぢやう 使廳 檢非違使廳ノ略語ニテ、使ノ廳ノ意ナリ、「徒然」之の法師をとらへて所より使廳へ出だしたりけり、

▲しりうごつ 後言 後言ノ挿音言ニテ、其ノ人ノ聞カヌ所ニテ、其ノ人ノ身ノ上ヲ言フ意、善惡共ニ云フ、かげごと「かげぐちニ同シ、「源、若菜」いとなめげなるしりうごとなりかし、「蜻蛉」かくのみをりをりさこえさせ給ふなる、御しりうごともよろこ

びさこえ給ふめるといふ、

▲しりうごつ 後言 前條ノ語ヲ動詞化セル語ニテ、後言ヲ言フノ意、「紫日記」昔は經をよむをだに人は制しきとしりうごちいふをささ侍るにも、

▲しりくめなは 尻久米繩 領籠繩ノ義、上代ノ俗吾ガ定メタル場所ノ標トスル爲

ニ引キ延フル繩ノ意ニテ、今ノ注連トテ新年ニ門ニ飾トスルモノ此ノ遺製ナリ、尻籠ノ義ニテ藁ノ本ヲ斷チ去ラヌ意、又、ハ後方限目ノ義ナド云フ皆非ナリ、しりくべなは又、しめなは、しめナド云フ、「古事、上」布刀玉命以尻久米繩ニ控ニ度其御後、「土佐、上」こへの門のしりくめなはの繩のかしら、

▲しりざや 尻鞆 太刀ノ鞆ノ損ゼヌ爲ニ鞆ニ懸クル袋ニテ、虎、豹、熊、水豹ナドノ

毛皮ニテ作レルモノナリ、「保元、上」三尺五寸の太刀に熊の皮の尻鞆入れ、

▲しるまし 怪兆 知端ノ通韻言、不吉ノ事ノ前表ノ意ナリ、驗欲ノ義トスルハ非

ナリ、「三實、四十六」以雨ニ石鏃ニ之恠、兵役示凶也、

▲しをり 柴 柴撈リノ義ニテ、古代ニ、山ニ分ケ入ル路ニ木ノ枝ヲ折リ掛ケ置キテ返ル時ノ標トスルモノヲ云フ、枝折ト書クハ借字ナリ、柴ハ正シクハ柴ニ作ルベシ、

【七一三三五】

「字彙」蔡、槎、槎也、周伯溫曰、禹貢隨山、山菜、木、宜用、此字、謂隨所行林木、斫其枝、爲道記識也、「新古、春」吉野山、去年のしをりの道かへてまだ見ぬ山の、花を尋ねむ、○又、讀ミサシタル書物ノ間ニ挿ム薄キ板製或ハ紙製ノ札ノゴトキモノ、書畫等書ケルモアリ、

▲しをる 萎 凌擣ルノ義、深ク傷ムル意ヲ云フ、「源、樹」御前の五葉の雪にしをれて下枝枯れたるを見給ひて、

▲しをる 折懸 前條ノ語ヨリ轉ジテ深ク人ヲ傷ムル意ニ云フ、「伊勢物」この女のいとこの御息所女をばまかてさせて殿のくらにこめてしをり給ひければ、藏にこもりて泣く、

▲しがらみ 柵 繁絡ノ義、流水ヲ塞キ止ムル爲ニ材ヲ伐チツツケテ竹木ナドヲ絡ミ附ケタルモノヲ云フ、「大鏡、二」流れゆく吾はみくづとなりぬとも君しがらみとなりて止めよ、又、袖のしがらみ「風のしがらみナド云フハ比喩ナリ、

▲しがらみ 試樂 音樂合奏ノ前ニ其ノ器ノ下調ヲスルヲ云フ、即、笛ノ音取等ノ爪關、琵琶ノ撥合等是ナリ、但、調樂トハ別ナリ、又、俗ニ用意ノヨキヲしがくよしナ

ド云フモ是ヨリ出デタル語ナルベシ、「源、紅葉賀」試樂を御前にてせさせたまふ。

▲しかじか 二云云 然然ノ義、文句ノ多キ時ニ略スルニ云フ語ニテ彼ノゴトク此ノゴトク又ハカヤウカヤウナドノ意、「摩訶止觀」云云者未盡之貌、云者言也、說文云、像雲氣在天、廻轉之形言之在、口如雲潤物「漢書、汲黯傳」上曰吾欲云云（注）師古云、云云猶言如此如此也、只略其辭耳、「宇治拾、一」しかじかの事ありて鬼の取りたるなりといひければ、

▲しかすがに 然サナガラニノ略語、然シナガラ、サスガニト同ジ、「萬、八」かきくらし雪は降りつつしかすがに、わき家の園に鶯どなく、

▲しよらう 所勞 いたづきニ當テタル字ヲ音讀シテわづらひ、病患ノ意トセル語ナリ、「頼政」大事なる所勞ありて人して書かせてつかはしける、

▲しよらうとく 所得、證得 得テ所有スル利益ノ意、佛經ニ多ク用キラレタル語ナリ「智度論」一入ニ佛法寶山都無所得「宇治拾、三」あはれしつるしよらうとくかな、年頃不動尊をあしくかさけるなり、

▲しよらうしほらし 承仕法師 寺中ノ觸事法事ノ雜役ナド勤ムル法師ヲ云フ、承ハ

「仕方の意ナリ、古事談、三」惠信僧都ノ承仕法師奉花ノ間俄悶絶死去、「徒然」遍昭寺の承仕法師、

【し】一三二八

▲しよくわ 所課 課ハおほすノ意、其ノ所作ヲ割リ充ツルヲ云フ、「朝野群載、七」抑不_レ論_ニ權勢庄園_ニ可_レ勤如_レ此_所課之由依_ニ國司申請_ニ、「徒然」大納言入道まけになりて所課いかめしくせられたりけるとぞ、

▲しよくゑ 觸穢 穢ニ觸レタルヲ云フ、そくゑニ同ジ、臆忌、産穢、月經等ニ云フ、神事ニ忌ムナリ、人畜ニヨリテ區別アリキ、

▲した 時 しなニ同ジ、時ノ意、逢ふした「忘れむした」ナド多シ、今モ方言ニゆきしなかへりしなナド云フ是ナリ、又、約音ニヤトモ云フ往く_ヨ來_ヨナドノゴトシ、「萬、十四」人の子の悲しけしだははますどり、あなゆむ駒の惜しけくもなし、
▲したりがほ 得意顔 してやり顔ノ約音言ニテ、今ノ得意顔ト云フニ同ジ、誇_ルタル貌ヲ云フ、「枕、十」我はと思ひてしたりがほなる人ばかりえたる、「徒然」程つにけつしたりがほなるも、

▲したかさね 下襲、下重 禮服ノ下着ノ名ナリ、束帯ノ時ニ袍ノ下着ニスル衣ニテ

其ノ後ニ垂ルル長キ裾ヲ裾ト云ヒテ元ハ續キタルモノナルヲ後世切り放シテ別ニ裾ノミヲ着ケテ下襲ヲ略セリ、夏冬ニ差別アリテ、「裝束圖式」ニ詳ナリ、「源、葵」したかさねの色うへのはかまもん馬鞍までみなとのへたり、

▲したたかに 健 繁_シ甚_シ足_カ氣_カノ義、極メテ多ク_ニ殊_ニ甚_シク_ニ十分_ニノ意、いささか(些少)ニ對スル語ナリ、「空穗、祭使」御佩刀の緒したたかに結び垂れ、「著聞、十六」若き者よりはしたたかにしたりつるはといふ、○又、したたかものナド云フハ、極メテ完全ナル者、即極強健ナル者ナドノ意ナリ、「著聞、六」西をさして走り出てむとしければ、したたかなるものども六人してとどめけるに、その身のつよきこといふばかりなし、

▲したたむ 認 心留_シノ轉語、心中ニ儘ニ定ムルコトニテ見止ム見極ムノ意、轉シテ物事ヲ行フ意ヲ云フ、所置ス、處分ス、整理ス、調治ス、支度ス等ニ同ジ、「宇治拾、九」國の政をしたためおこなひ給ふ、「増鏡、十」昔こそ受領共も任の程異國をしたため行ひしか、「源、浮舟」むづかしき反古などやりておどろしくおどろしくひとたびにもしたためず、「徒然」なにとなき具足とりしたため、又、書キ配スノ意、常ニ認ノ字ヲ書ク、「十六

【し】一三二九

夜「歌のさうしどもを撰りしたためて、侍従の方へ貽るとて」、又調へ食フ意、ひる飯し
たたむ、わりごしたたむナド、

▲したなき 下泣 心泣ノ義、心中ニ氣ノ毒ト思ヒテ隠ビ泣クノ意、「宇治拾、十一」
殿上の人人したなきをして皆笑ふまじきよしをいひあへり、

▲したまづ 襪 下沓ノ音便言、東帯ノ時靴沓ノ下ニ着用スル足袋ナリ、「装束圖式」
襪頭文紗ハ唐装束ノ時用之練貫ハ常ニ用之宿老ハ白キ平絹ノ張リタルヲ用キル、襪
ハ東帯ノ外ハ着用セザル事也、

▲したく 蹴躑 踐ミ荒ラスヲ云フ多クふみしたくと熟語ニ用キラル、「六帖、六」鶯
のしたかむ中に梅の花散り残らなむ、春の形見に、

▲したすだれ 下帷 下簾ノ義、牛車ノ前ノ簾ノ下ニ掛タル帷ニテ、白キ絹二幅、
或ハ裾濃ニシテ掛ク、貞丈雜記ニ其ノ圖アリ、「源、葵」網代のすこしなれたる下すだれ
のさまなどよしばめるに、「枕、十三」尼の車、簾はあげず、下すだれも薄色のすこし
濃き、

▲しれもの 痴者 正氣ノ失タル者ノ意、即愚ナル者ヲ云フ、白物ハ當字ナリ、「源

帚木」中將ながしはまれの物語せむとて、「古事談、一」白物ヲバ可ニ追放、

▲しそく 紙燭、脂燭 縷紙ニ油ヲ浸シテ今ノ蠟燭ノゴトクニ用キルモノヲ云フ、禁
中ニテ用キラルルハ杉ノ細木ヲ青紙ニテ巻キタルナリト云フ、但蠟燭ハ極メテ古クヨ
リアリ、「源、夕顔」まそくめしてありつる扇御らんすれば、「徒然」まそくまじてくまじ
まを求めし程に、「和名、十二」紙燭、雜題詩有紙燭詩紙燭、俗云
之昏坎

▲しぞく 追 しりをくノ略語退クニ同シ、但、中古の普通語ナリ、「土佐、下」こげど
もこげどもしりへしぞきにしぞきて、「紫日記」老もしぞきぬべき心地するに、

▲しづ 賤 下人ノ義賤シキ者ヲ云フ、「源、夕顔」あやしきしづのをの聲聲、

▲しづ 倭文布 しづありノ略語ニテしづりト云フガ正シキナリ、又、しづはた、又、
あやト云フ、しづハ筋ノ義即、楮布、麻布、苧布ノ緯絲ヲ青赤等ノ諸色ニ染メテ横柳
條ヲ織リ成セルモノニテ、多ク帯トセリ、「萬、十一」古のしづはな帯を結び垂れたれて
ふ人も君にはまざじ、「伊勢物」いにへしのしづのをたまきくりかへし昔を今になすよ
しもがな、

▲しつたん 悉曇 梵語シツダム Siddham 成就ノ義ニテ一切ノ事言ヌ文字ニ因リ

ヲ成就スル意ヨリ云フ、最古ハ梵文ヲ書スル前ニ吉祥成功ヲ祈ル爲ニ置ク用トス、次キ母韻ノ名トシ又轉ジテ總字母ノ名トシ後ニハ梵語ノ名トス、近代ハ主トシテサンスクヲト語ノ意ニ用キラルレド巴厘語ヲモ包含シタルガゴトシ、

▲しつらふ 室禮 室禮ノ字音ヲ動詞トシ、又、名詞法ニテしつらひトモシテ用キル中古ヨリノ語ナリ室内ノ裝置ヲスル意、俗ノ飾リツケスル意ナリ、「落窪、三」中納言殿には御かたがたの物はこひ簾かけしつらふ「源、帚木」かりそめの御しつらひしたり「源、蓬生」さすがに寢殿の内ばかりはありし御しつらひにかはらず、

▲しづくら 鞆 下鞍ニ同ジ(其ノ條ヲ見ヨ)「萬、五」さつ弓をた握り持ちて赤駒にしづくら打ちさはひのりて、

▲しづころなし 静心無シノ義、オチツキタル心ナシノ意、亂リガハシキヲ云フ、「古今、春」久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ、「玉葉、春」櫻花にはよを見つづ歸るにはしづ心なきものにぞありける、

▲しな 品 種類ノ意ニ用キラル、「神樂歌」弓といへばしななきものを、○又、等級、階級ノ意ニ云フ、「源、帚木」その品品やいかにいづれを三つの品にもきてかわくべ

き、○又、身柄、人品ノ意トナル、「徒然」しなくたり顔にくさげなる人にも立まじりて、

▲しな 支那、梵語チーナ China 多ク震旦ト書ス、支那國即今ノ清國ヲ云フ、但、此ノ語ハ元、支那ニ起コリテ印度ニ入リシガ、又、更ニ支那ニ轉ジテ入レル語ナリ、印度ニテハ、マハチーナト云ヘリ、梵語チーナハ秦ノ訛音ナルベシ、秦ノ始皇ノ天下一統ノ大名ノ遠ク印度ニ聞コエシニ因ルナラム、方今、偶然ニ清ノ支那音ヨリ羅旬語化セル China トノミ思フハ誤ニテ其ノ源甚古ク唐代ニアリ、

▲しなとのかせ 科戸の風 科戸ハ級長戸邊命(風ノ神ノ名)ノ略語ニテ、其ノ神ノ司ル風ト云ヒテ、即、風ト云フニ同ジ、「神代紀、上」乃吹撥之氣化ニ爲神、號曰級長戸邊命、亦曰級長津彦命、是風神也、「延喜、祝詞」科戸乃風乃、天入重雲吹放事乃如久、

▲しなてる 級照 撓立有ノ義ニテ、山ノ撓ミ立テル意地形ニ掛クル枕詞ナリ、級立物ハ斜ニ片ハヘナル意ニテ片トツヅクルト云フ説ハ從ヒ難シ、サレバ片ノミニハ掛カラズ、「萬、九」しなてる片しはがはの、「萬、十三」しなてるつくまさぬがた、

▲しなひ 撓 曲リ垂ルルヲ云フ、多ク藤ノ花ノ靡キヲ云フ、「枕、三」藤の花しなひ長く色よくささたるいとめてたし、

▲しらびぎて 白和幣 白和袴布ノ義、神幣ニ用キル袴布ノ色ノ白キヨリ云フ、(袴布ノ條參看) 麻ヲ青和幣ト云フニ對ス、又、にぎたへトモ云フ、〔古語拾遺〕植、製造白和幣、

▲しらなみ 白波 盜人ノ異名、後漢ノ靈帝ノ時、賊張角西河ノ白波谷ニテ盜ヲナシ白波賊ト云ヒシヨリ起コル、〔後漢、靈帝紀〕中平元年、張角反、皇甫嵩討之、角餘賊在、西河白波谷、爲盜、俗號白波賊、〔著聞〕白波の立ちくるままに、玉櫛簪、二見の浦は見えずなりにき〔方丈記〕しらなみのおそれもなし、

▲しらじらし 白白 現在ニ明カニ見ユノ意、〔夫木、二十七〕人も見ば、あなしらじらし、老い狐いとともひるの、まじらひなせと、○又、興醒ムノ意ニ云フ、〔枕、三〕いみじく美しき君達も隨身なきはいとしらじらし、○又、俗ニ見テ見ヌオオスルヲ云フ、そらとほけるノそらモ同シ、

▲しんぼち 新發意 しぼちノ條ヲ見ヨ、〔法華、方便品〕新發意菩薩供養無數佛、▲じんだがめ 兼太瓶 字又、糶林ニ作ル、本字ナリ、細末ナル糶ニ麴ト鹽トヲ加ヘテ醸セルモノニテ、酢、又、酒ニテ食フナリ、今ハ糶味噌ト同物ノヤウニ云ヘド今

ノ糶味噌トハ異ナリ、隣ノ糶林云フト俗語モ是ヲ云フ、〔徒然〕糶林瓶一つも持つまじきなり、

▲しんでん 寢殿 中古以後ノ貴族ノ家作ニテ其ノ正殿タル所ヲ云フ、東西ニ對屋アリ、支那ノ正寢、又、路寢ニ同シ、文字モ亦之ニ據ル、〔源、紅梅〕七間のしんでんひろく大きにつくりて、

▲しんし 進士 古代ニ國中ニ士ノオアル者出デテ官選ニアタリ及第シタル者ニ云フ稱號ナリ、〔源、少女〕その日の文うつくしう作り給ひて進士になり給ひぬ、

▲しのめ 東雲 しののめのト云ヒテほがらほがらニ掛クル枕詞ヲ切リテ直ニ曉ノコトトセル語(しののめのノ條參看)〔古今、戀〕しののめの別を惜しみ、〔古今、夏〕郭公なく一聲にあくるしののめ、

▲しののめ 細竹目 忍ぶノ枕詞、細竹ハ篠竹ニテ群レテ生ユルモノ故ニ、其ノ群ヲ約メテしののめト云ヒ忍ぶノしぬニ云ヒ掛ケタルナリ、轉ジテしののめのト云ヒテほがらほがらニ掛クル枕詞トス、〔萬、十二〕しののめ、人にしぬべば、〔萬、十二〕しののめ、忍びてぬれば、

▲しのぶずり 信夫摺 古代ニ、忍草ヲ紫ニテ布帛ニ摺リツケタルヲ云フ、其ノ文様種種ニ亂レ交ハリタルヨリしのぶもぢずりトモ云フ、歌ナドニ陸奥ノ信未ニ言ヒ掛クルハ詞ノ縁語ナルノミ、其ノ地ニ産スルモノノゴトク言ヒナスハ附會ニテ誤ナリ、何地ニテモ製セシナリ、「伊勢物語」この男しのぶずりの狩衣をなむ着たりける、「古今戀」みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに、

▲しやはば 娑婆 梵語シャハハのSaha 忍土思界ナド譯ス、内ニ諸苦惱アルヨリ云フ、三千大千世界ノ總名ニテ、大地現世ノ意、「悲華經」何名ニ娑婆ニ是諸衆生忍受三毒及諸煩惱能忍ニ斯惡ニ故名ニ忍土、

▲しやり 舍利 梵語舍利羅のŚāli 略語又設利羅トモ書ク、骨身、又、靈骨ト譯ス、佛ノ火葬シタル遺骨ヲ云フ、「名義集、五」新云ニ室利羅或設利羅ニ此云ニ骨身又云ニ靈骨ニ即所遺骨分通名ニ舍利、

▲しやか 釋迦 梵語舎枳也謨尼又ハ釋迦牟尼 Sakya-muniノ略語、能仁寂默ハ字義ノ翻譯ニテ、牟尼ハ無言行者ノ稱アリシヨリ譯セルナリ、但聖者、仙人ノ義當タレリト云フ、即釋迦種族ノ聖者ノ意、印度佛教ノ開祖摩迦陀國淨飯王ノ子ナリ、「狹、

三〇 釋迦ほとけも三途を出て給ひにけれ、「源、須磨」しやかむに佛弟子となのりて、
〇又しやくト云ヒテ僧ノ冠稱トス、

▲じやうにち 上日 つかふるひト云フ、禁中ナドニ勤仕スル番ニ當タレル日ノ意、即當番ナリ、「平家、六」上日のものをあまたつけて主の女房の局まで送らせましましける、

▲しやうにん 上人 智徳ヲ具シテ能ク一心ニ佛道ヲ行ズル人ヲ云フ、「要覽」摩訶般若經曰、何名ニ上人ニ佛云若菩薩一心行阿耨菩提一心不散亂是名ニ上人、本邦ニテハ僧位ニ上人位アリ法橋上人位ト云フ、徳アル者ニ云フ稱ナリ、「千載、哀」服に侍りける時ある上人のきたりける日、

▲じやうらふ 上臈 臈ヲ多ク積メル人ヲ云フ、轉ジテ二位、三位ノ典侍ノ稱トナリ更ニ轉ジテ汎ク貴婦人ノ稱トナル、又、公卿ノ女ヲ小上臈ト云フ、「禁秘抄、下」不謂ニ是非ニ二位二位典侍號ニ上臈ニ着ニ赤青色ニ候ニ御陪膳ニ也、

▲じやうえ 淨衣 白地狩衣ノ稱ニテ古クハ白張ニテ庶人ノ服ナリシガ後平絹ナドニテ作り祭服トス、又、僧ノ法服ヲ云フ、「更科」供の人人淨衣姿なるを、「榮華、玉臺」

伴僧十二人ばかりして白き淨衣をきてあこなふ。

▲しやみ 沙彌 梵語室羅末尼羅 *Sramanera* の略語、求寂ト譯ス、得度式ノミ終

ヘタル僧ノ意、具足戒ヲ終フレバ比丘ト稱ス、女ナルヲしやみに *沙彌* ト云フ。

▲しやうじ 精進 さうじんノ條ヲ見ヨ、「大經」光明悉照徧此諸國如[○]此精進威

神難量(注)此二句神道莊嚴諸佛各於其上勲作[○]化事[○]故云[○]精進[○]枕[○]二[○]一日[○]ばか

りのさうじんのけだいとやいふべからむ。

▲しやもん 沙門、桑門 梵語舍羅摩那 *Sramana* の略語、勤息ノ義、出家シテ欲ヲ

息ムル意ヨリ、僧ノ泛稱トス、「名義集」或云[○]桑門[○]或名[○]沙迦憊曇[○]皆訛、正言[○]室摩

那拏或舍羅摩拏[○]此言[○]功勞[○]言[○]修道有[○]多勞[○]也、什師曰、佛法及外道凡出家者皆名[○]沙

門。

▲しげやま 繁山 樹木ノ繁リ生ヒタル山ヲ云フ、端山ニ對ス、「拾遺、雜」世の中

はいかがはせまし、しげ山の青葉の杉のしるしだになし。

▲じふにひとへ 十二單、女官ノ裝束ノ名、勅許ニテ服スルモノナリ、其ノ着用順

序ハ白[○]小袖[○]、單[○]、五衣[○]、表衣[○]、唐衣[○]、袴[○]、排[○]精好[○]ノ袴[○]、上[○]ニ裳[○]ヲ着ル、「盛衰、四十三」彌

生の末の事なれば、藤重ねの十二ひとへの御衣を召されたり。

▲じふぜん 十善 佛教ニテ十惡ヲ行ハヌヲ云フ、十惡ハ殺生[○]、偷盜[○]、邪淫[○]、妄語[○]、

兩舌[○]、惡口[○]、綺語[○]、貪欲[○]、瞋恚[○]、邪見[○]ナリ、現世ニ十惡ヲ作サザリシモノハ其ノ果ニ

ヨリテ天子ニ生ルト云フ、「太平、五」辱[○]くも十善[○]の天子。

▲しで 四手 垂ヅルヨリ名トス、神ニ捧グル幣帛ニテ木綿ヲ用キ後ニ紙ヲ代用ト

ス、ゆふしてナド云フ、「拾玉」手向かも、をりから神もめぐむらむ、しでに風よく有

明の空。

▲してのたをさ ^{ホトトギス}郭公ノ異名、賤ノ田長ノ義ニテ勸農ノ意ニテ鳴ク鳥ナレバ云フト

云ヒ、又ハ其ノ鳴聲ナルヲ田長ヲ呼ブコトト聞キナシテ云フトモ傳フ、「古今、俳諧」い

くばくの田を作ればか郭公してのたをさをあさなよふ。

▲してのやま 死出山 十王經ニ死天山門集ニ鬼神(十王經ハ偽經ノ由ナリ)トアル

ヨリ出デテ死ニ逝キテ歸ラヌ所ヲ云フ、所謂、冥土、冥界ノ意、「源、幻」しての山越

えにし人を慕ふとして跡を見つのも猶まどふかな。

▲しきたい 式代、色代 人ニ對シテ敬禮スルヲ云フ、顔色ヲ改メテ敬スル義ナルベ

シ。「盛衰」三「雲の上人御前に侍ひてめてたき御事と色代申して、○又口ニ道從言スルヲ云フ俗ノ御世辭ニ同ジ、「沙石、七」ある人妻を送りけるが雨の降りければ色代に雨ふればとまり給へといふ、○又、玄關ノ式臺ト云フモ此ノ語ヨリ出デタリト云フ、

▲しぎのはねがき 鳴の羽搔 鳴ガ己ノ嘴モテ羽ヲシゴク音ノ高ク聞コユルヲ云フ、其ノ數ノ多キヨリ百羽搔トモ云フ、曉ニスルコトナレバ直ニ曉ノ事ニモ、ハリ、「古今、戀」曉のしぎのはねがき、ももはがき、君がこぬ夜は吾ぞかずかく、

▲しきしま 敷島 崇神欽明兩帝ノ都タリシ大和國磯城島ノ地名ニ起コリテ大和國ノ枕詞トシ、轉ジテ日本ノ枕詞トシ更ニ略シテ日本ノコトトス、「崇神紀」三年九月遷ニ都於磯城ニ是謂ニ瑞籬宮、「欽明紀」元年七月遷ニ都倭國磯城郡磯城島ニ仍號爲ニ磯城島金刺宮、「萬、十二」志貴島の倭の國は、「榮華、御賀」しきしまやこのこととは見えず、こまもろこしまでぞ見えける、

▲しきしまのみち 敷島ノ倭歌ノ道ノ略語ニテ我が國歌道ノ意、「千載、序」しきしまの道もさかりにおこりて、

▲じゆん 旬 古代、禁中公事ノ名ニテ夏ト冬トノ二孟旬ヲ云フ、其ノ朔日ニハ臣下ニ御酒ヲ賜ヒ政ヲ聞コシ召シ夏ニハ扇ヲ賜フ、冬ニハ氷魚ヲ賜フ、又内裏新造ノ後、始メテ南殿ニテ行ハルルヲ新所旬ト云ヒ、即位ノ後、始メテ政ニ臨ミ給フヲ萬機旬ト云ヒ十一月朔日冬至ニ當タル年ニ行ハルルヲ朔旦旬ト云フ、○又、果物ナドノ食フベキ時ニナレルヲ、云ヒ又物事ノ其ノ時節ニナレルヲモ云フ、

▲しゆみせん 須彌 梵語蘇迷廬 Sumeru 妙高山ト譯ス、佛經ニ云フ山ノ名、極メテ高大ナルモノ、高サ八萬四千由旬日月其ノ山腹ヲ廻ルト云フ、「要覽」長阿含並起世因本經等云、四州地心即須彌山梵音正云ニ蘇迷廬此名ニ妙高此山有ニ入山、遠ニ外有ニ大鐵圍山ニ周廻圍繞、並一日月晝夜回轉照ニ四天下ニ名ニ一國土、

▲しめ 注連 しりくめなはノ條ヲ見ヨ、

▲しめやかに 深沈 沈ヤ氣ニノ義、有様、景氣ナドノ落チツキテ鎮マリタルヲ云フ語、シトヤカニ同ジ、「源、竹川」殿の内しめやかになりゆく、

▲しじま 無言 縮間ノ義ニテ口ヲ開カヌ程ノ意、無言ニテ居ルヲ云フ、沈黙ニ同ジ、「源、未摘」いくそたび君がしじまに、まけぬらむ、物ないひそといはぬたのみ

に、「拾玉、一」憂身にはしじまをだにもまこそせぬ、思あまれば、ひとりごたれ

▲しひしほのそて 椎柴の袖、喪服ノ異名、椎柴ハ椶ノ木ナレバ其ノ木ヲ染料トシテ喪服ヲ染ムルヨリ云フナリ、「後拾、哀」これをだに、形見と思ふを、都には葉がへやしつる椎柴の袖、

▲しも しハ強意ノ助詞其ノ義、すらト同ジ、もハ感歎詞ニテ其ノ上ノ語ヲ強く指シテ確定シ、又ハ必アルニハ限ラヌナドノ意ヲ反説スル語ナリ、之をやすめ詞ト云フハ誤レリ「伊勢物語」京に思ふ人なきにしもあらず、「源、浮舟」遙かなる岸にしも漕ぎ離れたらむやうに心細く思して、「折しも、必しもナド用キルモ同ジ、

▲しもべ 下部 下群ノ約語、下ノ階級ニアリテ一部隊ノ組ヲナシテ仕フルモノノ意、即、召仕ノ者家來ナドヲ云フ、「源、蓬生」しもべなどのかはして蓬はらはせ、

あ

▲あはら 恵方、吉方 陰陽家ニ稱スル所ニテ、曆ノ上ニ其ノ歳ノ寒ガリノ方ノ正

反對ナル明ノ方ヲ祭ル名ニテ祭ル時ハ百福ヲ得ト傳フ、「蜻蛉、中」いとよきことなりてんけのあはらにもまさらむなど、笑ふ笑ふいへば、

▲あと 穢土 佛經ノ語ニテ、淨土ニ對シテ穢レタル世界ノ義ニテ此ノ國土ヲ云フ稱、娑婆ト同ジ、「平家、一」穢土を厭ひ淨土を願はむと深く思ひ宜ふこと、

▲あとり 餌取、屠兒 狗兒ヲ取リテ鷹ノ餌トスルヲ職トスル者ヲ云ヒ後ニ牛馬ヲ屠リ其ノ肉皮ナドヲ賣買スル者ヲ云フ後ニあつたト云フ、穢多ト書クハ當字ナリ、「倭名、二」屠兒惠止楊氏漢語抄云屠兒屠ニ牛馬肉ニ取ニ鷹雞餌ニ之義也、

▲あつほ利 笑壺 笑ミ興ジテ最中キルヲ云フ、「宇治拾、十四」すすろにあつほに入りけり、「保元、上」龍顔すこぶるあつほにいりあはします、

▲あぶくろ 餌袋 鷹ノ餌ヲ納ルル袋ニテ美シク作レルモノナリ、後ニハ人が食物ヲ納レテ携帯スルニモ用キタリ、「枕、六」をのこに、さうぞくをかしろしたるあぶくろ抱かせて、「大鏡、二」さるべきあぶくろわりごやうのもの調じて打具して罷りつつ習ひとり侍し、

▲あひしれて 酔海 深ク酔ヒテ物モ覺エヌヤウニナリテノ意、「土佐、上」ありと

ある上下重まてゐひしれて一文字をだに知らぬものしが、足は十文字によみてをあらぶ。

ひ

▲ひろごる 弘 四方へ弘ク延ビ張ルヲ云フ、「枕、一」柳などそれもまた眉にこもりたるこそをかしけれひろごりたるはにくし、○又廣マル傳播ナドノ意ニ云フ、「源、桐壺」おのづからことひろごりてもらさせ給はねば、○又、繁殖スル「殖ユナドノ意ニ云フ、「枕、三」蓮の浮葉の大ききと小さきとひろごりただよひてあり、

▲ひはだや 檜皮屋、殿社ノ屋根ナドヲ檜木ノ小方板ノ厚サ數分ナルヲ重ネテ葺キタルヲ云フ、厚キヲ厚檜皮ト云ヒ、密ナルヲ薄檜皮ト云ヒテ賞翫ス、又檜ノ生皮ヲ剝ギテ程ヨク斷チ切り打平メテ葺クヲ舒葺ト云フ、最上ノ葺方ナリ古代ニひはだト云フハ多ク是ナリ、「枕、五」新しくもなくいたくふりてもなきひはだやに、

▲ひはやかに 細クタヲヤカニテノ意、ひはつにニ同シ、「榮、音樂」宮いみじうひはやかにめてたうて入らせ給ふ、

▲ひはぎ 引劔 山野ナドニ潜ミテ人ヲ劫シ衣財ナド盜ム者、即、追劔ヲ云フ、「宇治拾、二」ひはぎありて人殺すやとをめぐ、

▲ひとだのめ 人令頼ノ義ニテ、人ヲシテ頼マシムノ意「古、離別」かつこえて、別れもゆくか、あふ阪は人だのめなる名にこそありけれ、

▲ひとだまひ 人給 従者ニ與ヘテ用キシムルヲ云フ「延喜、宮内式」五月五日能草蒲又人給乃菖蒲進登申、○又、車ヲ與フルニモ云フ出車ト書ス、「空穂、藏開」金造の御車ニひとだまひの御くるま五つ具して出で給ふ、

▲ひとやり 人遣 人遣ノ義、吾ガ心ヨリナサヌコトヲ云フ、心ヨリナスヲ人やりならぬト云フ、「古、離別」人やりの道ならなくに大方はいさうしといひていざかへりなむ、

▲ひぢぢかぢ 泥近ノ義ト云ヒ、又、肱近ノ義ナドモ云ヘド確カナラズ、但、品格ノ卑シクノ意トス、「空穂、藏開」いと小さくひぢぢかに、ふくらかにあいぎやうづき給へり、

▲ひぢかさめ 肱笠雨 俄雨ノ名トス、但、萬葉ナル妹が門行き過ぎ兼ねつ久方

の雨も降らぬか、そを因にせむトアルヲ誤リテ、催馬樂、六帖、源氏枕草子ナドニヒ
ぢかさの雨トシテ笠モ取リアヘズ袖ヲ翳シテ笠トスノ意ニ云フナリ、関田次筆ニ委シ
ク辯アリ、

▲びるしやな 毘盧舍那 梵語毗盧舍那 *Vairocana* 光明徧照ト譯ス、大日如來ヲ云
フ、奈良東大寺大佛ハ此ノ如來ノ像ヲ造レルモノナリ、

▲ひをけ 火桶 圓ク曲物ノゴトクニ作レル火鉢ヲ云フ、角ナルヲすびつト云フニ
對ス、「枕、八」同じ心なる人二三人ばかり火桶、中にすゑて物語などするほどに、

▲ひわりご 檜破子 檜物製ノ破子ヲ云フ、破子ハ、中ニ隔テ多クシテ作レル重箱
ノゴトキモノヲ云フ「源、葵」をかしげなるひわりごなどばかりをいろいろにて參れる
を、

▲ひがん 彼岸 到彼岸ノ略語、人ノ生死ヲ海ノ此岸トシ煩惱ヲ中流トシ、涅槃ヲ
彼岸トシ、波羅密ヲ到彼岸トス、即、菩薩ノ大智ヲ以テ三諦ノ地位ニ達シタルヲ云フ、
又、佛家ニテ春分秋分ノ中日ヲ中トシ前後各三日間佛事ヲ修スルヲ彼岸會ト云フ、善
導大師ノ觀經ノ釋ヨリ起コレト云フ、「後紀」延曆二十五年二月官符應ニ五畿七道諸

國轉ニ讀金剛般若經ニ宜レ使下國分僧春秋二仲月別七日存心、奉讀之也又其ノ七日間ノ
氣節ヲ云フ、「源、少女」十六日ひがんのはじめにていとよき日なり、

▲ひがおほえ 僻覺 理ニ中ラヌ記憶俗ノ間違たる心得ナドノ意、ひが目ひが耳ひ
が事ノひが皆同じ、「枕、一」ひがおほえもし忘れたるなどもあらば、

▲ひかげのかづら 日蔭鬘 大嘗新嘗ナドノ時ニ冠ノ笄ノ左右ニ掛クル飾ヲ云フ、
最初ハ女羅ヲ用キタリ、女羅トハ日影ヲ翳シ隔ツル意ヨリ云フ、後ニハ白青ノ絹絲製ナ
ルヲ着ケ、巾子ノ前ニ心葉ヲ立ツ、「延喜式」踐祚大嘗祭親王已下女嬪以上皆日蔭鬘、

▲ひた 引板 引板ノ略語、鳴子ヲ云フ、「夫、十二」寝たるまも露やあきつつしほ
るらむひたうちへて守る山田を、

▲ひたちおび 常陸帶 古代ニ正月、常陸ノ鹿島ノ神ノ祭ニ、男女、想フ人ノ名ヲ記
シテ供へ、以テ婚ヲ卜定シタリシ帶ヲ云フ、「六帖、五」東路の道のはてなるひたちおび

のかごとばかりもあはむとぞおもふ、

▲ひたたれ 直垂 方領ニテ無紋ノ衣、袖括アリ、胸紐菊綴アリ、袴ハ長キモ短キ
モアリ、衣ヲ先ニ着シ袴ヲ後ニ着ル、地色文ハ衣袴共ニ同シ元ハ庶人ノ服ナリシガ後

ニハ禮服トナル服地ハ貴賤ニ依リテ異ナリ鏡直垂ハ袖窄ク裾ニ括アリ、布直垂ハ紋アリ、又、大紋トモ云フ、

▲ひたたく 叨、沿 取締リナキヲ云フ、「源、若菜」あまりひたたけてたのもしげなきもいとくちをし、

▲ひたやごもり 直隱 直隱ノ義やハ威歎詞、一向ニ籠リ居ルヲ云フ「源、帚木」えんなる歌もよまずけしきばめる消息もせてひたやごもりになさけなかりしかば、

▲ひたぶる 頓、一向 ひたすらニ同シ、「源、桐壺」今はなき人とひたぶるに思ひなりなむと、

▲ひたもの 頓、一向 ひたすらニ同シ、「枕、四」これに白からむ所ひたものいれでもてこ、

▲ひたすら 頓、一向 直向ノ義、一途ニ、ソレノミニ、一向ニノ意、「源、帚木」ひたすらに愛しと思ひ離れぬ男聞きつけて、

▲ひそく 祕色 青磁ノ古名、「源、末摘」御臺ひそくやうのもろこしのものなど、

▲ひづ 濡、漬 濡ルルヲ云フ、「貫之」菊の花ひづちて流るる水にさへ、浪のしわなき宿にざりける、

▲ひつじのあゆみ 羊歩 死ノ近ヅケルヲ譬ヘタル語、「摩耶經」譬如ニ梅陀羅驅羊就屠所步步近死地人命復過是、「新古、釋」極樂へまだ我が心ゆきつかず羊の歩みしばし止まれ、

▲ひねもすに 終日 日好モ其儘ニノ略語夜もすがらニ對ス、一日ノ朝ヨリ夕マデ、日一日ノ意、又ひねもすトモ云フ、「土佐、下」ひねもすに波風立たず、

▲びらうげ 檳榔毛 牛車ノ屋形ノ簷ニ蒲葵(檳榔)ノ葉ヲ細ク裂キテ車蓋ヲ葺キタルヲ云フ、濕氣ヲ避クル爲ナリ、又、檳榔毛車、又、毛車ト云フ、仙洞以下四位以上ノ通用ノ車タリ、但、檳榔庇車トハ別ナリ、「枕、二」びらうげはのどやかにやりたる、

急ぎたるはかるがるしく見ゆ、

▲びんづる 寶頭盧 梵語寶頭盧、Pindola 不動ト譯ス佛弟子ニテ羅漢ノ一ナリ、白頭長眉ノ像ヲ作ル、此ノ像ノ寺ノ食堂ニ置クハ晋ノ道安法師ニ始マル、此ノ像ヲ摩

デテ病願ヲ念ズル説ハ真俗佛事編ニ委シ、

▲びんなし 無便 便無シノ義、不都合ナドノ意、「空穗、藏開」いとびんなきことい

かてか御文なくてはとて、

▲ひのおまし 晝御座 禁中清涼殿ニアリ、平敷ノ御座ニテ主上ノ晝御座スル所ヲ云フ、「狹、二」常よりもあつき晝つ方(中略)ひのおましばかりをしきて、

▲ひのさうぞく 晝装束 東帯スルヲ云フ、衣冠又ハ直衣ヲとのめさうぞくと云フニ對ス、(東帯ノ條參看)「宇治拾、十二」ひの装束うるはしくしたる人の太刀佩き、

▲びく 比丘 梵語^{ヒンズ}破煩惱ノ義、乞士ト譯ス、僧ノ意、女ナルヲびくに比丘ト云フ、「大藏法數」梵語比丘華言乞士、謂上乞、法以資慧命、下乞、食以資色身也、亦名苾芻蓋苾芻雪山香草名草有五義以喻比丘五德、

▲ひまゆくこま 隙行駒、隙駟 時間ノ速キヲ譬ヘタル語、光陰ニ同ジ、「史記」酈生說、豹、豹時曰人生間如白駒過隙耳「新古、冬」あたらしき、年や我が身をとめくらひ、ひまゆく駒にみちをまかせて、

▲ひげこ 髻籠 圓キ竹籠ノ端ヲ編ミ殘シテ立テテ髻ノゴトクシタルモノヲ云フ、今、蜜柑ナド納ルルモノナリ、「枕五」なまめかしき物、ひげこのをかしよう染めたる五葉の枝につけたる、

▲ひこぼし 彥星 牽牛星ヲ云フ織女ノ夫トスルヨリ彥星ト云フナラム、「源、東屋」天の河を渡りてもかかる彥星の光をこそまらつけさせめ、

▲ひこじろふ 引知合ノ義、相互ニ引キ合フ意、俗ノ引ツ張リ合フノ意ヲ云フ、ひさじろふ、ひこづらふモ同ジ、「源、夕霧」惜しみ顔にもひこじろひ給はねば、

▲ひさかたの 久堅、久方 瓢葛ノ青ト云フベキヲ天ノ枕詞トス、轉ジテ雨、日、月、星、空其ノ他天象ノモノノ枕詞トス、「萬、七」ひさかたの天のかぐやま、

▲ひさめ 氷雨 雹ニ同ジ、降雹ヲひふるト云フ、俗ニひょうト云フハひノ訛言ニテ雹ノ字音ニアラズ、「古事、中」ここに大ひさめふらして倭建命を打惑はしき、

▲ひさめ 大雨 直雨ノ義、大雨ヲ云フ、「倭名、一」霈、太雨也、日本紀私記云大雨比佐

女、「萬、二」玉梓の道行く人の泣く涙ひさめにふれば、

▲ひさし 庇 古代ノ殿作方ニ正中ヲ母屋トシ其ノ四面ノ間ヲ廂ト云フ後世いるかはト云フ、其ノ外ナルヲ孫廂ト云フ「大和」例のおまし所にはあらでひさしにおましききて大殿ごもりなどして、

▲ひへぎ 引倍木、引折 板引ニシタル絹ヲ云フ、下襲ノ服地ニ用キル、「榮、駒鏡」

關白殿の御下襲の菊のひへぎかがやき目とどまりたり、

▲ひきよう 比興 興醒ムノ意、俗ノ「アケニ取ラレタルコト」ナド云フニ同ジ、「盛

衰六」小松殿は弟の殿原に向かひていかにかやうの比興は結構せられ候ふぞや、「續古

事談」その座の人人腹をさりて笑ひあひけり、一座の比興なり、

▲ひきなほし 引直衣 直衣ノ帶アリテ引クヤウニ作レルモノニテ、主上ノ召料ノ

直衣ヲ云フ、後世ハ常ノ直衣ヲ小短程ニ着ラルト云フ、「保元、上」主上は御引直衣に

テ腰輿に召さる、

▲ひきてもの 引出物 祝宴饗應ナドノ終ニ來賓ニ出ダシテ贈ル物ヲ云フ、元ハ馬

ヲ引出ダシテ贈リシヨリ起コリ、後ハ諸物ニ通ジテ云フ、「北山抄」次尊者牽出物馬ニ

疋、若尊者好鷹者馬一疋鷹一聯加犬、「宇治拾、七」事やうやうはて方になるに、引出

物の時になりて、

▲ひじ 非時 僧家ノ語ニテ午後ノ食ヲ云フ稱、非時食ノ意、午後ニナレバ食ハタ

ヲ法トスルニ因ル、「類聚雜例」御念佛御讀經及女院御讀經僧等被行非時、「徒然」時

非時も人に定めては食はず、

▲ひじり 聖 靈知ノ義、崇高ナル道德ヲ備ヘタル人ノ意ヨリ聖天子等ノ意ニ用キ

轉シテハ、凡人ニ勝レタルモノヲ云ヒ、又、高德ノ僧ヲ云フ、又、酒ノ異名トス、「徒然」

古のひじりの御代の政をも忘れ、「古今、序」柿本の人丸なむ歌のひじりなりける、「徒

然」ことにかたほとりなるひじり法師、

▲ひじりめ 聖目 せいもくニ同ジ、基盤ノ自ノ上ニ記セル點ニテ中央ト上下ト左

右ト四隅トニ合セテ九ツアルヲ云フ、對局ノ時、技ノ劣レル者先此處ニ石ヲ置ク爲ト

ス、「徒然」吾が手本をよく見てこころなるひじりめをすくに弾けば、

▲びしやもん 毘沙門 梵語吠室羅摩拏 Vaisravana 多聞ト譯ス、北方ヲ司ル天王

ニシテ四天王ノ一ナリ財寶ヲ司ル神ナリ、「智度論」秦言多聞「福德之名聞四方」故名

焉、主ニ夜叉及羅刹、「仁王經疏」北方毘沙門天此云多聞主、

▲びしゆかつま 毘首羯摩 梵語毗濕縛羯摩 Viskarmā 種種業ト譯ス、天童部

ニ屬シ工匠ヲ主ル神ナリ、「眞言密記」帝釋天王以ニ神通取此女至切利天上召喚首

羯摩天令造喜見城、

▲ひびらく 振蕩 微ニ震ヒ動クヲ云フ、又、動キ痛ムヲ云フ、「源、常木」馬の頭物定

め博士になりてひびらきなり、〔後心集〕この病の苦痛に責められて寝られ侍らざり、切り焼くがごとくうづさひびらき、身もとほりて、堪へ忍ぶべくもあらぬば、

▲ひびき 響 世ニ聞ユル意ヨリ評判ノ意トス、〔榮、玉村菊〕大書會とて又人人ひびききのしる

▲ひもろぎ 神籬 靈盛木ノ義、太古ニ樹木ヲ繁ク植エ周ラシテ神ノ御座トシテ祭ル所ヲ云フ御室ハ當字ナリ、後ニ神社ノ總名トス、〔萬、十一〕神なびにひもろぎたてていはへども人の心はまもりあへぬかも、

▲ひもとろ 紐解 下紐ヲ解ク意ヨリ轉ジテ花ノ蕾ノ開クヲ云フ、〔源、蜻蛉〕花の紐とく御前の草叢を見渡し給ふ、

▲ひもかがみ 水面鏡 氷ノ面ノ鏡ノゴトク光レルヲ云フ語ニテ歌ニハ多ク細ニ言ヒ掛ケ解クルニ寄セテ詠メリ、影清み岩間の水のひもかがみとけても春にむかふ今日かな、

▲ひもかがみ 紐鏡 能登香山ノ枕詞、鏡ノ裏ノ紐ハ常ニ鏡臺ニ結び着ケテ解ガネバ莫解ト云フベキヲのどかノ音ニ轉ジテ枕詞トス、〔萬、十一〕紐鏡能登香の山は誰故

ぞ、〔按ズルニのどかの山ハ紀州ナル名高山ノ訛言ニヤ、

も

▲も 裳 女官ノ禮服ニテ、唐衣ヲ着ル時、袴ノ腰ノ上ヨリ着ル長キ裝束ヲ云フ、地ハ生絹ナドニテ繪ヲ書ケリ、但、地摺、白羅、下濃、額額、白染ナド種類多シ、〔源、夕顔〕紫苑の色折にあひたるうすもの裳、

▲もろや 諸矢、兩矢 二本ノ矢、即甲矢、乙矢ヲ云フ（はやノ條參看）〔徒然〕或人弓射ることを習ふに諸矢をたばさみて的にむかふ、

▲もろこし 唐土 希越ノ轉語ナラム、又、諸越ノ字ヲ文字讀シタル語ナラムトモ云フ、支那ヲ云フ、〔土佐、下〕もろこしに渡りてかへりきたる時に、

▲もはら 專 眞廣ノ義、只其ノミ「一途ニ一筋ニ」ナドノ意、促呼シテもつばらト云フ、〔古、戀〕逢ふことのもはらたえぬる時にこそ人の戀しきこともしよけれ、

▲もどろく 文身 亂ラスト同意、身ニ割青ヲスルヲ云フ、〔景行紀〕男女並推レ結、文身、

本もどろろ 亂レシムノ義、亂レ紛レシムルヲ云フ、「顯輔」もろこしの玉つむ舟の
もどろけは思ひ定めじ方も覺えず、

▲もどかし 長カシノ義、批難スベクアリ、反對シタシナドノ意、轉ジテハ思フヤ
クニナラヌ意ニ云フ、「枕、九」むびしげなる車に裝束わろくて物見る人いともどかし、

▲もちづき 望月 満月ノ轉語、陰曆十五日ノ月ヲ云フ、「徒然」もちづきの隈なき
を千里の外まで眺めたるよりも、

▲もちあふる 用 持率^{モチケ}るノ義ニテ和行上二段活用ノ語ニテ佛經ヨリ出デタルナルヲ
中古以後もちあふト波行上二段活用ニモ通用シタレド猶もちあふるヲ正シトス、用^{モチケ}用^{モチケ}ヲ
ノ語ハナシ、誤ナリ、

▲もかち 帽額 御簾ノ上邊ニ添ヘテ長ク横ニ引キ延ベタル幕ノゴトキモノニテ、
織物地ニ縁ニ窠^{カサ}ノ紋ヲ黒ク出ダシタリ、諒開ノ時ハ布ノ鈍色ト改メラル、(布ノ帽額ノ
條參看)「空穂、樓上」簾のもかうには大もんの錦をせさせ給ふ、

▲もがさ 疱瘡 齋瘡^{イモガサ}ノ上略語、天然痘ヲ云フ、此ノ病ハ飲食其ノ他禁忌多ケレバ
云フ、今モ痘痕ヲいもト云フモ古言ノ殘レルナラム、(榮、本等)世の人只今このもがさ

にこともちばをぬさまなり、
▲もたいなし 無物體 物ノ本體ヲ失フ意ヨリ恐レアリ畏シノ意ニ用キラル、(宇治
拾)「大童子うも見てあはれ勿體なき主かな、

▲もんじゆ 文殊 梵語曼珠室利^{マンジュシクリ}、妙吉祥、又ハ、妙首ト譯ス、菩薩ノ
名、智慧ノ代表者ニシテ諸如來ノ標準トシテ敬ムルモノトス、「大藏法數」梵語
文殊師利、華言「妙德」、謂明見佛性具足法身般若解脱三德、不可思議故、言「妙德」
也、

▲ものいみ 物忌 天一神太白神等ヲ避ケテ一日乃至數日間家ニ籠リ居ルヲ云ヒ、
又、物忌ノ標(木ニテ作ラル)ニ物忌ト書キテ冠、簾ナドニ懸クルヲモ云フ何レモ中古ノ
俗ナリ、「源、帚木」内の御物忌さしつづきて、「源、浮舟」母屋の簾皆あらしわたして
物忌などもほせてついたり、

▲ものか ものかはノ意ニテ反語ナリ、「源、若菜」かかる心はあるへきものか、
▲ものか 疑問ノかニテにかあらむノ意ナリ、「新古、秋」月をなほ待つらむものか、
村雨の晴れゆく雲の末の里人、

▲ものか 物かなノ意シカナリ、「後撰、戀」世の中といひつるものか陽炎のあるかなさかのほどにぞありける、

▲ものから ものながらニ同シ、其ノ事ニハアレドシテ意ナリ、「源、紅葉製」ねたきものからえたとて笑ひぬ、

▲ものうし 懶 物憂シノ義ニテ心ノススマズアツクノ意、俗ノ物臭シ無性ナドニ同シ、「詞花、冬」山里は柴の立枝に吹く風の音さくをりぞ冬はものうさ、

▲ものむ 物具 調度具足道具ナドニ同シ、轉シテ鏡ノ意ニ用キラル、「大和」家もほろびもののも皆とられて、「著聞、十二」海賊一人ものものぐして出てむかひて、

▲ものけ 物怪 鬼祟ノ氣ノ義、死靈、生靈ノ祟ルヲ云フ、怪ハ當字ナリ、「源、葵」物のけいさすだまなどいふもの多くいて來て、様様の名のりする中に、人に更に移ら

ず、
▲ものふ 武士、武夫 物爲ノ義、古昔朝廷ノ御料ノ器具ヲ作ルヲ職トセル者ナリシガ軍陣ノコトニ從事スルヤウニナリテ一部隊ヲものものべ（後ニ遊兵ナル）ト云ヒ略シテものものトモ云ヒ途ニ武士ノ稱トナリヌ、「狭、二」いかなるものものふなりと

▲ものあはれ 物情 人情ト云フニ同シ、「源、帚木」うしろみの方はものものあはれ

しりすぐし、「土佐、上」楫取ものものあはれも知らて、

▲ものぐるほし 物狂 物狂ハシノ義、物ニ狂スルサマナリノ意、俗ノ狂氣ジマタ

リト云フニ同シ、「徒然」あやしうこそものぐるほしけれ、

▲ものし 物物シクテ厭ハシ、俗ノ氣障ナリナドノ意、又、目障リナリトモ解スベ

シ、「源、桐壺」いとすまじうものじとよこしめす、

▲ものものし 物物ラシク嚴メシ、立派ナリナドノ意ナリ、「源、葵」御年の加はるに

や物物しきけさへそひ給ひて、
▲ものす 物スノ義、事ヲ爲スノ意ニテ、總ベテニ通ジテ云フ語、おはすノゴトキ

意ニ用キラル、其ノ用廣シ、「源、東屋」なみなみの人にも物し給はねば、「源、東屋」扱か

の北の方にはかくと物しつや、
▲もや 母屋 身屋ノ義、古代ノ殿作法ニテ中央ノ廣間ヲ云フ、廂ノ内ナリ、おもや

ニ同シ、正屋トモ書ク、「枕、十」鏡打見てもやよりすこしあざりてたるに、

▲もて 以テノ義ヨリ轉シテ添語トナリ下ノ動詞ヲ強ムルニ云フ語、以ノ意ハナシ、
 もてはやす、もてつけて、もてなやむ、もてなす、もてあそび、もてゆくナド多シ、
 ▲もて 裳着 女子ノ成長シテ始メテ裳ヲ着ル式ヲ云フ男子ノ袴着ノゴトシ、其ノ
 式甚盛ナリ、「源、寄生」十四になり給ふ年御もぎせさせ奉り給はむとて、
 ▲もしほごさ 藻鹽草 眞鹽草ノ義、藻ト書クハ當字ニテ眞ハ發語、鹽草ハ鹽ヲ製
 スルニ用キル藻ヲ云フ、猶鹽燒クニ用キル木ヲもしほ木ト云フガゴトシ、鹽ヲ藻鹽ト
 云フモ眞鹽ノ義ニテ藻モ亦借字ナリ、轉シテ、物ヲ書キ集ムルニ寄セテもしほごさト
 云フ、又、かくノ序詞トモス、「狹、三」日に二たび三たびもしほごさかきあつめつ、
 ▲ももどり 百千鳥 諸鳥ノ意ニテ多クツ鳥ヲ云フ、一ツノ鳥ノ名トスルハ弄ナ
 リ、「活、春」ももどりさへづる春は物ごとにあちたされどもわれぞふりゆく、
 ▲ももじり 桃尻 乘馬ニ云フ語ニテ馬ノ乗方ノ拙キヲ云フ、桃ノ實ノ尻ノヌワラ
 ヲニ譬ヘタルナリ、「長門平家、八」六度まで御落馬あり、世の人桃尻とぞ申しける「徒
 然」はめいももじりたて沛艾の馬を好みしかば、
 ▲ももしきの 百敷 百石城ノ略語ニテ古昔ハ皇城ノ周圍ヲ壯大ニ高ク石垣モテ圍

ミタルヨリ大宮ノ枕詞トス、轉シテハ直ニ大宮ヲ云フ、「萬、一」ももしきの大宮所見れ
 ばかなしも、「源、未摘」ももしきにゆきかふ人のきくばかりやはとて、

▲もずのはやにへ 鴨早贖 もずのくまきニ同シ、次條參看、「俊賴」垣根には、
 もずのはやにへたててけり、しての田長に憑びかねつ、
 ▲もずのくまき 鴨草具吉 鴨ガ鳥也ナドヲ捕ヘテ樹ノ枝ノ股ナドニ括リ置クラ
 云フ、くまきハくまの約言ナリ、くぐりハ潜ルノ意トスルハ誤レリ、もずのはやにへ
 ニ同シ、「萬、十」春さればもずの草くまき見えねども、「顯季」今はやや咲きはほはなむ櫻
 花もずのくまきかかくるへにけり、

せ

▲せいはい 成敗 政事ヲ取扱フヲ云フ轉シテハ罪ニ處スナドノ意ニ云フ、「平家、
 一」攝政關白の御せらばいにも及ばず、

▲せはし 狹 せましニ同シ、但古言ナリ、「源、手習」いとせはくむじかしくもあれ
 狹をちかうめて奉るに、